

第51回  
日米学生会議

*The 51st Japan-America Student Conference*

日本側報告書



1934~1999

*Evaluating the Japan-United States Relationship  
to Shape Our Future*

—— 検証そして創造へ—— 新たなる日米関係 ——

# 第 51 回日米学生会議 日本側報告書

## <目次>

### 序章

日本側実行委員長挨拶	2
米国側実行委員長挨拶	3
小渕恵三内閣総理大臣からのメッセージ	4
ビル・クリントン大統領からのメッセージ	5

### 第 1 章

第 51 回日米学生会議の概要	8
共同宣言草案委員会—Drafting Committee	10
第 51 回日米学生会議共同宣言	11

### 第 2 章

テーブルの成果	
・安全保障問題	14
・日米安全保障条約	18
・ビジネス	22
・経済政策	26
・人口と医学	30
・環境問題	34
・オフィシャルメモリー	38
・歴史的事実と利害関係	42
第 51 回日米学生会議総括フォーラム	46
第 51 回日米学生鍵広島会議	51

### 第 3 章

本会議までの準備活動	62
本会議の日程	66
本会議中の活動	67

### 第 4 章

第 51 回日米学生会議を振り返って	76
第 51 回日米学生会議を経て	78
実行委員の目を見た第 51 回日米学生会議	82
第 52 回日米学生会議概要	85

### 第 5 章

第 51 回日米学生会議日本側参加者	88
第 51 回日米学生会議米国側参加者	89
会議開催にご協力下さった方々	90



## 日本側実行委員長挨拶

第51回日米学生会議実行委員会  
日本側実行委員長 山崎蘭加

1934年から65年間、日米学生会議は綿々と受け継がれてきた。日本とアメリカの学生が一緒にお互いの国を訪問し語り合う、それだけで有り余るほどの意義を生み出したと思われた時代はもう終わった。以来会議が開かれるごとに、実行委員たちはその回の会議の付加価値を高める努力を必死になって行ってきたことであろう。会議を続ける意味はあるのか。あるのならなぜ会議をまだ続けるのか。続けるに値する会議を自分たちは創っているのか。歴代の実行委員が悩みに悩んだのと同様、第51回実行委員会も第51回会議の存在理由探し・創出に苦しみ続けた。もし戦後50年なら、2001年なら、第50回会議なら、その作業はどんなに楽だろうと何度も考えた。2001年なら「21世紀の展望を示す」ことをテーマにできるように、数字が持つ意味を強調し、その数字に関連した企画や議論テーマの設定が可能である。しかし戦後54年、1999年、第51回会議ではそれができない。54、1999、51は全て区切りでも始まりでも終わりでもない微妙な数字だからだ。いわば第51回会議は「日米の学生が1ヶ月間一緒に生活し議論する」という基本形の中で、何ができるかを問われていたと言えよう。

第51回会議で私たちがやろうとして、そして少しはできたことが、一つある。それは、参加者全員が今を生きる若者として、時代に対する感受性を精一杯研ぎ澄まし、その感受性を使って聞こえたものを真剣に考えることだ。冷戦後、世界では経済を中心に大きくまとまろうとする力と、逆に民族、個人へと小さく分裂していく力との狭間で、国という概念が希薄になってきている。また中国をはじめとする新しい力のダイナミズムなどもあり、注目すべきものが多様化、多元化している。こうして関心が拡散しているため、国際社会に関する議論が非常に雑に、ややもすると感情的になることが多い。このような現状認識をもとに、もう一度国の視点を軸に世界全体ではなく日米関係を考えるという方向性が浮かび上がった。それが総合テーマ "Evaluating the Japan-United States Relationship to Shape Our Future" 「検証そして創造へー新たな日米関係」である。会議を振り返ってみると、テーブルでの議論や何気ない会話などの全てが、それまで一人一人が特に意識をせずに持っていた感受性や時代認識が他の参加者のそれとぶつかり合うことで深化していく過程であったように思う。会議を経ていく中で徐々に形成されていった共通の思いが、最後の総括フォーラムで総合テーマのもとに結晶し、学生たちのメッセージとして発信された。

しかし、鋭敏な感受性を持って時代に耳を澄まし、考え、人に伝えていくという作業は会議の1ヶ月間だけ行うものではなく、今後は各自のフィールドで形を変えて営まれていかねばならない。そうして初めて、会議での真剣な議論や、衝突、共同作業が、夏の短く楽しい夢で終わることなく、現実の社会で意味のある実を結んでいくのであろう。

第51回日米学生会議は生まれたばかりの銀河のようであった。エネルギーが渦巻く中で、小さな星たちはどんどん大きくなり、もともと大きい星たちはもっと明るくなった。これらの星が、1999年夏の銀河で培った輝きをより一層増しながら、それぞれの宇宙の中で光り輝いていくことを期待したい。

最後になりましたが、第51回会議開催に際して多大な御協力を賜りました外務省、文部省、米国大使館の皆様、開催地として積極的に御支援下さいました立命館大学、北海道大学の皆様、御賛助金を賜りました財団・企業の皆様、日頃より貴重な御指導をいただきました国際教育振興会の皆様、その他様々な形で御支援いただきました全ての皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 米国側実行委員長挨拶

The 51<sup>st</sup> Japan-America Student Conference Executive Committee  
American Executive Committee Chair Blaine Baldwin

Now that the 51<sup>st</sup> Japan-America Student Conference has come and gone and the preparations for the 52<sup>nd</sup> are well underway, it is time to reflect on the experiences of the 51<sup>st</sup> JASC. Since this the 51<sup>st</sup> JASC was the beginning of the next 50 meetings of JASC it is an awesome feeling to be a part of continuing the JASC\* strong tradition.

The 51<sup>st</sup> theme was "Evaluating the Japan-United States Relationship to Shape Our Future" and the delegates took this theme under consideration in the process of writing their papers, presenting their topics to their table members, and throughout thought provoking discussions through the course of the conference. The delegates collectively worked together throughout the conference to express their ideas and ideals along with facts and figures to come up with concrete solutions that affect both the United States and Japan. This was no small mission considering the gaps in language level, communication styles, and personalities that were experienced throughout the conference; however, it was achievable due to the determination of all involved.

If I had to use a word to describe the conference this year it would be "inspirational". I think the events and experiences that the delegates had throughout the conference will be inspirational to all delegates in the years to come. Looking back at all that was experienced during the 51<sup>st</sup> conference makes the delegates realize the significance of JASC and how important good communication is between our two countries currently and will continue to be in the future.

On behalf of the 51<sup>st</sup> Japan-America Student Conference delegation, I invite you to read this bulletin and join us in the journey that we embarked on starting in Kyoto and finishing in Tokyo, Japan with a world of incredible experiences along the way.

To the 51<sup>st</sup> Executive Committee, thank you for your strong effort in planning and helping to make the conference a success.

To the 51<sup>st</sup> delegates, I want to say how awesome it was to meet you and get to learn so much about you. Thank you for your hard work and believing in the conference theme and goal.

To the 52<sup>nd</sup> Executive Committee, I wish you all the best with the challenges you will have this year. Please enjoy this year of planning for the 52<sup>nd</sup> JASC and the strong tradition you are now carrying of the conference. Continue to communicate, like you did during your long days of meetings, and I am sure the 52<sup>nd</sup> will be successful.

To JASC Alumni and supporters, thank you for your help in being strong supporters of the conference and for the advice you have given to us.

Finally, I would like to thank Jack, Gretchen, and Akiko, who all work at JASC, Inc. and provide so much support to all of the Executive Committee members.

\*JASC= Japan-America Student Conference



## 小淵恵三内閣総理大臣からのメッセージ

「第51回日米学生会議」の開催、誠におめでとうございます。

日米両国は、これまで自由と民主主義という基本的価値を共有する貴重なパートナーとして、経済、外交、文化等多くの分野で緊密な関係を構築してきました。また、現在両国は、地球環境問題、世界的な人口問題をはじめ、多くのグローバルな問題において共同の取り組みを行っています。

去る5月、私はクリントン大統領の招待を受け、訪米いたしました。その際、大統領との首脳会談の他、米国民との交流を深めるため、例えばシカゴにおいては、シカゴ大学の学生と懇談を行った他、ワシントンにおいては、米国の財界人や日本滞在経験を有する米国人青年等の日米交流関係者とも懇談を行いました。

こうした出会いを通じて、両国のパートナーシップが国民同士でも強固な相互信頼により結ばれていることを実感しました。また、日米関係のさらなる発展のために両国民の一層の交流を促進していくことの重要性を強く感じました。

このような観点から、両国の学生が約1ヶ月にわたり、言葉や文化の違いを越え、時宜を得たテーマにつき研鑽に励み、率直に意見を交換し合うこの日米学生会議は、極めて意味のある日米交流の取り組みと期待している次第であります。

本年の会議のテーマは、「検証そして創造へ—新たなる日米関係」(Evaluating the Japan-United States Relationship to Shape Our Future)です。私としては、皆さんに、新しい世紀への変り目のこの時期に、日米関係の歴史を振り返り、来るべき新しい時代にふさわしい日米関係につき、自由に思索を凝らして欲しいと願うとともに、この夏の経験を活かし、一人一人がそれぞれの立場で日米両国の友好の架け橋として大きく活躍されることを祈念いたします。

# 小淵恵三

## ビル・クリントン大統領からのメッセージ

Warm greetings to all those participating in the 1999 Japan-America Student Conference.

The partnership between the United States and Japan has always been important, but never more so than now. Today our alliance is the cornerstone of stability and prosperity in the Asia Pacific region. Our Common Agenda promotes scientific research, democratic reform, and improved living standards across the globe. Our friendship has shown the world that different societies can work together constructively for the good of all.

But the close relationship we enjoy would be impossible without the strong cultural and personal ties that link our societies. I commend all the young people participating in this year's conference for your commitment to intercultural exchange and understanding. You are helping to strengthen the friendship between the United States and Japan and ensure a brighter future for our world.

Best wishes for a wonderful conference.

July 12, 1999

Bill Clinton

A handwritten signature in black ink that reads "Bill Clinton". The signature is written in a cursive, flowing style with a long horizontal stroke at the end.

# 第1章

第51回日米学生会議の概要  
共同宣言草案委員会—Drafting Committee  
第51回日米学生会議共同宣言



## 第 51 回日米学生会議の概要

### この会議が目指したもの

第 51 回会議総合テーマ "Evaluating the Japan-United States Relationship to Shape Our Future" 「検証そして創造へ—新たなる日米関係」は、日米関係の過去と現在を国家の視点から検証し、その検証に基づいて未来のあるべき日米関係の姿を創造することを目的とした。この総合テーマには大きく分けて三つの「思い」が込められている。

第一に、米国開催第 50 回日米学生会議を踏まえた「思い」である。第 50 回会議は "Seeking Solutions to Facilitate Mutual Understanding Between the United States and Japan" 「真の相互理解から世界へ—今見つめ直す日米関係」を総合テーマとし、「相互理解」についてコンピューターから教育まで様々な分野を話し合った。そこで強く感じたのは、相互理解をしよう、お互いをわかろう、とすればするほど、相互理解の成立を前提として共通点を重要視する傾向が強くなるということであった。相互理解とはある目標を達成する過程で得られるものであり、それ自体を考え求めるものではない。具体的な議論可能な問題を設定し、対立と受容を繰り返しながらそれに対するソリューションを生み出そうとしていく共同作業や努力こそ、もしあるとするならば相互理解の第一歩なのではないかと考えたのである。日米の学生にとって、お互いがぶつかり合いながら議論が可能であり、更に何らかのソリューションが導き出せるといったら日米関係しかない。

第二に、日米学生会議創立時の「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米にある。その平和の一翼を学生も担うべき」という理念への「思い」である。日米学生会議は学生でありながらも日本という国のために何かしたいという信念に基づき、日米関係の回復を願って発足したのである。65 年も経過し、形は変わったとしても、やはり維持していくべきものはある。それが、各人の中に日本なりアメリカなり国という視点を持った上で、日米関係をとことん考えるということなのでないか。

第三に、現在の世間認識への「思い」である。冷戦の終結、社会主義の終焉により、世界は大きな機軸を失いとまどっていた。そこへ唯一確固たるものとして残った自由主義資本経済の価値観が、情報技術の進歩を媒介として瞬く間に世界に広がり「グローバルコミュニティー」なる言葉ができるに至っている。企業は世界全体を市場とみなした活動を活発化させて国の枠を飛び出し、ヒトもモノもカネも国境を無視して世界中を駆けめぐっている。このような現状を踏まえて「グローバルな思考が必要」という認識が強まっている。しかし一人は「グローバル」に考えることなどできるのであろうか。どんなに実質的に世界はどんどん小さくならうとも、人の思考には限界がある。結局失敗して、今度はミーイズム的な個人主義に陥るケースが多に思う。さながらローマ帝国の晩年時にコスモポリタリズムと個人主義が一世を風靡したかのように。日本人である限り日本を、アメリカ人である限りアメリカを母国として認識していることを思うと、人の思考の限界は国にあるのと考えてもいいのではないか。安易なグローバリズムやミーイズムに陥らないためにも、国という枠組みを与えた上で考える必要がある。また前述のように、冷戦終結後は国を単位とする国際社会の機軸は失われつつあるが、なんと言っても二国間関係があつての多国間関係である。国や二国間関係に限界があるからと言って、それを捨ててより大きな枠組みで考えてよいわけではない。きちんとそれらを踏まえてこそ限界も、次のステップも、明確に見えてくるのである。

## 会議の構造

総合テーマのもとに、まず安全保障・経済・科学技術・歴史の4つの分科会を設置した。いずれも「国の視点で日米関係を検証する」ために無くてはならない分野である。更に各分科会の中に、その分野を違った視点から眺めることでより検証を確実なものにするために、それぞれ2つのテーブルを置いた。安全保障分科会は、現状の枠組みから検証する日米安全保障条約と、具体的問題から帰納的に検証する安全保障問題、経済分科会はミクロの視点からのビジネスと、マクロの視点からの経済政策、科学技術分科会は人口と医学と、環境問題を、歴史分科会は、様々な記憶から検証するオフィシャルメモリーと、史実から日米関係を検証する歴史的事実と利害関係をそれぞれテーブルとして設置した。個別の議論は各テーブルで行い、随時分科会レベルのインターテーブルを開くことで異なった視点を融合させた。(しかし、会議が進むに連れて各テーブルの独自の色が強まり分科会レベルでのインターテーブルはほぼ開催不可能となってしまった。)

## サイト(開催地)の位置づけ

"Evaluating the Japan-United States Relationship to Shape Our Future" 「検証そして創造へ—新たなる日米関係」に關係する土地をサイトとして決定した。

第一開催地は京都。日米関係に直接關係することはないが、日本传统文化の中心都市で、更に国際都市でもあるため「日本を知る」導入部として最適ではないかと考えた。第二開催地広島から開催地における「検証そして創造へ」が始まる。戦後の日米関係と日本人の意識を決定した原爆の記憶を背負う広島は、日米関係の検証には欠かせない都市である。第三開催地は札幌である。札幌はその歴史を振り返ってみても開拓、クラーク博士の札幌農学校(開催地となった北海道大学前身)などアメリカとの關連が非常に強い。また冷戦時には対ソの最前線基地になり、北方領土、数多くの自衛隊基地などの冷戦の影を未だ色濃く残している。よって、広島に続く戦後日米関係の「検証」の場として札幌は重要だと考えたのである。第四開催地は東京である。広島、札幌と行ってきた「検証」をいよいよまとめ、未来に向けた「創造」を行う場所としては、日本一の政治・経済・国際都市である東京しかないと考え、そこを最後の開催地に選んだ。



第51回日米学生会議実行委員

(後列左より) Athena Pantazis、富士岡篤臣、Blaine Baldwin、Edward Papabathini、糸永洋三、原田曜平、粕谷浩和、Jennifer Connelly、Wright Meyer

(前列左より) Aindree Sircar、小林美和子、嶋田浩子、大木愛、Jodie Roussell、山崎繭加、Nancy Malvin



## 共同宣言草案委員会—Drafting Committee

### メンバーの結成からフォーラムの発表まで

何とか無事に済んだからこそ言えるが、DC\*は多難であった。DCの任務は、フォーラムで第51回日米学生会議参加者を代表して共同宣言を発表することだった。任務は明快である。しかしその任務を達成するには何もかも自分たちで創らねばならなかった。すんなりと進んだ箇所は記憶にない。また以前とは全く違った方式をとったためDCは白紙の状態から始まった。時間的制約もあった。その経緯を時間順において述べたい。

メンバーは各テーブル（安全保障問題・日米安全保障条約・ビジネス・経済政策・人口と医学・環境問題・オフィシャルメモリー・歴史的事実と利害関係の8テーブル）から原則一人ずつ。ただビジネステーブルから2人きた。メンバーは以下の通り。アメリカ側参加者：Samiya Edwards、Brian Hagenhoff、Naila McKenzie、Sarah Richter。日本側参加者：須賀川朋美、田中大樹、夏目高平、平林優、矢野こずえ。

まず宣言の形式を話し合った。会議とテーブル内容の要約といった内容にするのはメンバー全員が反対した。では何をするのか。もめたあげく三点を合意した。学生らしい宣言にすること、テーブルでは扱わない参加者の会議の印象・思い出を内容とすること、そして第51回のテーマ「検証そして創造へ—新たなる日米関係」を盛り込むことである。参加者の意見を聞くため各テーブルごとにディスカッション形式で5点の質問をした。

宣言の材料となるデータは揃ったがここからが問題であった。会議の印象は共通点がみられたものの、テーマに関する意見は参加者によって様々であった。また実行委員から、テーマとテーマの下地となる「国益」に対する見解を宣言に組み込むよう強い要望があった。これをいかに一つにまとめ上げるか我々は頭を抱え込んだ。喧喧ガクガクの議論の果てに気がついたのは我々DCは、このテーマとテーマができた由来を明確に理解していないことだった。そもそもこのテーマに決まった理由は何か、このテーマの下地となる「国益」とは何か。結局、実行委員を招いてテーマの説明をしてもらった。

宣言とテーマについてDCは当初混乱していた。新しい宣言の形式とテーマに対しての理解不足から、メンバー内での誤解が多かった。この混乱に拍車をかけたのは時間的制約であった。メンバーが結成されたのは8月5日。本格的な活動を開始したのは9日（その間は各種イベントが入り、充分協議はできなかった）。フォーラムは15日である。前日の14日は一日DCのためにあけてくれたが、何しろ各テーブルもフォーラムに向けて追い込みに入っており、メンバー全員が揃って協議できることは疑わしかった。9日から13日は昼休みと睡眠時間を削って協議した。テーブルの議論も煮詰まっており、DCのミーティングが始まるのが夜の10時ということも珍しくなかった。

時間の無さへの焦りや睡眠不足と戦いながら我々は何とかテーマの概要を掴みつつあった。10枚近くの文章・スケッチ・図式を12日夜から朝までかかって数人のメンバーが共同宣言の原稿に仕上げた。それを13日から14日の午前までメンバー全員で推敲に推敲を重ねた。

これでようやく共同宣言ができたが、最後の問題としてフォーラムでどのように発表する

か、が残った。ブレインストーミングの結果、宣言を読み上げるといった単なる発表の形式では不相当と判断。テーマの見解は最小限に抑え、参加者の会議の印象を中心に発表した。第51回参加者の10年ぶりの再会という舞台設定で、会議が我々に与えた影響の大きさを回想劇のスタイルにした。面白くするためにコメディの要素も盛り込んだ。

\*DCはDrafting Committeeを表す



フォーラムでの共同宣言発表の様子

## 第 51 回日米学生会議共同宣言

1991 年の冷戦の終結は国際環境に激変をもたらした。この変化に対応するためにいくつかの非合理的な決断が下され、東欧の不安定・東南アジアの経済問題・旧社会主義国家の社会問題等に発展した。これらの問題に対応するため、昨今世界は多国間協議の枠組みへと変わってきている。多国間協議が世界情勢の中心となる一方、日米の二国関係は未だ世界にその影響力を及ぼしている。日米関係は、地域安定と経済発展を促進し、民主主義の原則を保持し、そして人権を保護する。よって日米関係はかつてないほど重要である。

次の千年期が近づくと世界は人類史上大きな転換期を迎えている。世界がますます小さくなりそして個人がこれ以上なかったほど密接する時代において、コミュニケーションと相互理解の大切さを見過してならない。日米学生会議、JASC\*は 1934 年に学生グループによって設立された。その一番の目標は、日米両国ひいては世界に安全で豊かな未来を保証するために相互の理念や文化交流を促進することであった。

第 51 回のテーマは「検証そして創造へー新たな日米関係」である。20 世紀最後の会議が近づき、第 51 回参加者 (JASCers\*) は、会議を通して個人的、また学問的レベルでユニークな衝突と経験に直面した。

共通の経験から相互理解の点で特筆すべき例は、広島平和記念資料館の訪問である。日米参加者は、この大きな出来事とそれの矛盾に対する先入観を再検討しなければならなかった。第 51 回の会議を通して行われた密な思想 (考え) の交流は、率直なそして大概心苦しいプロセスによって「国家の視点」への認識を促した。この密度の濃い JASC 経験とその反響によりこの会議の重要性は、単なる日米の大学生の集まりより遥かに高まった。熱のこもった学問の交流が行われ、また文化・個人関係の困難の複雑性が認識された 1 ヶ月の旅を通して、JASC は両国の小世界となった。未来の社会に対しての、この規模の会議が持つ影響の大きさは計り知れない。

第 51 回日米学生会議のテーマは、我々の世代の参加者が対面しなければならない、現在の日米関係の変わりゆく役割という緊急な問題も含んでいる。ここに疑問が残る。日米学生会議の重要性は何か。現在の国際関係において、国家を主体とした二国間関係、および多国間関係の果たし得る役割が変化してきており、それに伴い国益という言葉が指す意味も変わってきている。このような中で、個人の持つ社会的影響力はますます重要となってくるであろう。JASC は、現在社会の小世界であるだけでなく、更に重要となっていくであろう日米関係の未来における社会的変化と転換を促進する媒介としての役割を果たすのである。時に不満がたまったこともあったが、学問的、文化的、社会的に密な交流を経験したことを通して、我々は JASC がよくその目的を果たしたと信じる。この 1 ヶ月の発見の旅に搭乗した JASCers は、将来の日米関係の創造者、そして国際関係の変化を促す人材となるための知識と手段を旅の土産として持ち帰るであろう。この希望こそが JASC が目的を果たしたという確信をより一層強固にするのである。

\*JASC は日米学生会議を、JASCers は日米学生会議参加者を表す



## Joint Statement of the 51<sup>st</sup> Japan America Student Conference

The end of the Cold War in 1991 caused dramatic changes in the international environment. In dealing with these changes, certain irrational decisions were made, leading to various problems such as instability in post socialist countries. Recently the world has turned to multilateral frameworks in order to deal with these problems. While multilateral frameworks have taken the center stage in world affairs, the bilateral relationship between Japan and the United States continues to exercise its influence in the world. The Japan-U.S. relationship promotes regional stability, economic prosperity, and strives to uphold democratic principles and protect individual human rights. Thus, Japan-U.S. relationship is more important today than it has ever been.

As the next millennium draws near, the world is facing a major turning point in global history. In an era when the world is becoming increasingly smaller and individuals are more closely linked than ever before, the importance of communication and mutual understanding cannot be overlooked. Japan-America Student Conference, or JASC, was established in 1934 by a group of students. Its primary goal is to foster the exchange of ideas and cultural experiences in order to maintain the hopes of a safe and prosperous future for both the Japan and the U.S., as well as the rest of the world.

The theme of the 51<sup>st</sup> JASC was "Evaluating the Japan-United States Relationship to Shape Our Future". Approaching the last conference of the 20th century, 51<sup>st</sup> JASCers found themselves confronting a host of unique conflicts and experiences throughout the conference, both on a personal and academic level.

An outstanding example of mutual understanding through shared experiences was a visit to Hiroshima National Peace Memorial. Both American delegates and Japanese delegates were forced to reexamine their preconceived notions about this pivotal event and the discrepancies thereof. During the 51<sup>st</sup> JASC, this type of intense idea exchange prompted an examination of the honest and often times discomfoting process of the realization of "national perspective." The intensity of the JASC experience and its reverberations propel the significance of this conference far beyond that of a mere gathering of American and Japanese university students. Throughout the course of one month, through the rigorous academic exchange and the realizations of the complexities of cultural as well as interpersonal barriers, JASC became a microcosm of the two countries. In terms of the social impact, the lasting effects of a conference of this magnitude are unfathomable.

The theme of the 51<sup>st</sup> JASC is infused with the kind of urgency that can only be brought by the current state of the shifting roles of the Japan-U.S. relationship that our generation of JASCers must confront. The question then remains: What is the significance of JASC? In a world where national interest is increasingly becoming influenced, if not indeed transformed by the growing importance of bilateral and multilateral relationships, the potential and the necessity for individuals to affect society in lasting ways is increasing. JASC serves not just as microcosm of the present society, but more importantly as a catalyst to promote lasting social change and transformation in the Japan-U.S. relationship. Through the sometimes frustrating and yet profoundly rewarding experience of intense academic, cultural, and social exchange, it is our belief that JASC has served its purpose well. This belief is embedded in the hope that all those who have embarked upon this one month voyage of discovery will take with them the knowledge and the tools that will enable them to become human vehicles of international change and the future caretakers of the Japan-U.S. relationship.

# 第2章

—テーブルの成果—

安全保障問題

日米安全保障条約

ビジネス

経済政策

人口と医学

環境問題

オフィシャルメモリー

歴史的事実と利害関係

第51回日米学生会議総括フォーラム

第51回日米学生会議広島会議



## 安全保障問題 Security Issues

### テーブルメンバー

安里周悟：琉球大学法文学部  
 塩崎哲也：青山学院大学法学部  
 夏目高平：早稲田大学政治経済学部  
 山崎繭加\*：東京大学経済学部  
 Blaine Baldwin\*：University of Kansas  
 Jason Totten：West Chester University  
 Lakisha Mitchell：University of Missouri  
 Martina Martin：Howard University

\*はコーディネーターを表す



### テーブル設置当初の目標

日米安全保障は、「何」(What)の安全を「どうやって」(How)「何のために」(Why)保障してきた/いるのかを具体的問題から帰納的に検証し、そしてその現在での検証をもとに、未来の安全保障の What, How, Why を模索し、あるべき安全保障のビジョンを創造していくことを目標とした。最終的には主に憲法や日米安全保障条約などの法的枠組みを取り扱う日米安全保障条約テーブルと合体し、あるべき姿へ到達するための具体的方策まで提言したいと考えていた。

### スケジュール

<本会議前の準備活動>

- 5月18日 防衛大学校助教授 新治二佐訪問
- 6月21日 勉強会 (岡本アソシエイツ代表取締役 岡本行夫氏)
- 6月26日 勉強会 (元防衛研究所 現サンコーコンサルタント取締役 大場昭氏)
- 7月12日 勉強会 (東京大学法学部教授 北岡伸一氏)

<本会議中>

テーブル1・2・3	日米安全保障に関するゲーム・勉強会
テーブル4	Jason Totten：“Stuck in the Middle with You: Rosso Japanese Relations and Role of the United States”
テーブル5・6	Lakisha Mitchell：“Chapter II, Article IX:Renunciation of War” Blaine Baldwin：“U.S. Military Presence in Okinawa and its Significance” Martina Martin：“Upholding the Ideals, Securing Security: The Growing Need for the Reform of U.S. Military Practices in Japan”
テーブル7	千歳航空自衛隊基地フィールドトリップ
テーブル8	東千歳陸上自衛隊基地フィールドトリップ
テーブル9・10	テーブル1～8のまとめ・日米安全保障テーブルとの合同テーブル
テーブル11	夏目高平：“Men to the Rescue :The Problems that Confront Japan in the Korean Peninsula Conflict” 塩崎哲也：“Korean Peninsula Crisis”
テーブル12	安里周悟：“A Study of the Emergency in the Taiwan Strait” 山崎繭加：“Taiwan: In the Triangle of Japan, U.S. and China”
テーブル13	テーブル1～12までの総括
テーブル14	日米安全保障テーブルとの合同テーブル
テーブル15・16	横須賀米軍基地へのフィールドトリップ
Forum 準備	プロダクトの最終構成

## テーブル流れ

<本会議前の準備活動>

●5月18日 防衛大学校新治二佐（当時）訪問

メンバーからの希望で主に北朝鮮についてのお話を伺う。北朝鮮有事の際の軍事的シミュレーションをしていただいた。

●6月24日 岡本行夫氏勉強会 於（株）岡本アソシエイツ

（岡本行夫氏に関しては講演会の p.62 参照）

まず日米安全保障条約に関して岡本氏よりブリーフィングを受け、条約の最大のポイントは「米国は日本の安全を保障する法的義務があり、日本は米国に対し協力をする」にあることなどを学ぶ。その後の質疑応答では、日本国憲法、自衛隊、台湾・朝鮮問題等へのメンバーからの質問が発展し、日本の安全保障政策のゆがみ、国際社会における日本の位置、平和観の相違等についての岡本氏の見解を伺うことができた。

●6月26日 大場昭氏勉強会 於 サンコーコンサルタント株式会社会議室

自衛権、憲法などを長年独自に研究していらっしゃる大場昭氏による「憲法と国家緊急事態」という題目での勉強会。15枚のレジュメを使って、日本国憲法の諸問題をわかりやすく解説していただき、憲法に対する様々な視点を学ぶことができた。

<本会議>

<テーブル1> 日米安全保障に関するゲーム

知識の確認と共有のため、各自が5問ずつ出題するカルタ形式のゲームを行う。

<テーブル2・3> 日米安全保障に関する勉強会

これからのテーブル進行の基礎を固めるために、日本の防衛白書とアメリカの東アジア戦略を、割り振りの分担をしてプレゼンテーションを行う。

<テーブル4> ペーパー発表1

論旨：日露関係の歴史の概説後、ロシアに関係する深刻な問題として北方領土、核拡散、政治基盤の弱体化、エリツインの対日政策を挙げる。これらに対して、アメリカはASEAN（東南アジア諸国連合）などを含めた多国間安全保障体制を日本と共同して築く必要があると主張。（Totten）

その後の議論：核拡散について。

<テーブル5・6> ペーパー発表2・3・4

論旨：日本国憲法第2章第9条をめぐる衝突・論争を概説。日本の国際的地位と立場上、第2章第9条は白黒ははっきりつけない形で維持するべきだと主張。

その後の議論：憲法9条は日本人にとって公平なものか、日本人は憲法制定とその維持に関してどう考えるか、憲法9条の存在によって日米関係はどう深化させていくことができるか、集団的自衛権にどのように取り組むか。（Mitchell）

論旨：沖縄在日米軍基地の現状、米外交政策上の沖縄の意義、様々な問題点を説明。沖縄基地は日米双方、そして太平洋の平和にも重要であるから、建設的な話し合いによって妥協の道を探るべきと主張。（Baldwin）

論旨：日米安保条約の「影」とも言える暴力・レイプ事件、環境破壊などの在日米軍基地の抱える社会的問題を説明し、それらへの解決策を提示。（Martin）

その後の議論：沖縄について。

<テーブル7・8> 千歳航空自衛隊基地、東千歳陸上自衛隊基地フィールドトリップ

航空自衛隊基地では、航空自衛隊の概略説明を受けた後、基地内バスツアーへ。世界で最も高価といわれるF15戦闘機を見学。続いてレスキュー部隊の説明を受ける。レスキュー部隊員が真剣な眼差しで「戦闘地域を含む危険な地域に飛んで救出作業をすることもあるのに自衛を越えるという理由で武器携帯が許されていない。是非若い人達の間で自衛とは何かを議論して欲しい。」と訴えたことが忘れられない。陸上自衛隊基地でも、概略のブリーフィ



ングを受けた後基地内バスツアーへ。さまざまな戦車・武器の説明を受け、戦車を試乗した。

〈テーブル 9〉 テーブル 1~8 までのまとめ

復習を兼ねて今までの軽いラップアップを行い、今後の長期プランを立てる。

〈テーブル 10〉 日米安全保障テーブルとの合同テーブル

今までの議論の経過と今後の議論の組立方を互いに発表し、「平和とは何か」「日米の安全保障観」などを議論する。

〈テーブル 11〉 ペーパー発表 5・6

論旨：北朝鮮有事の際の邦人救出をシミュレーション。日本人の危機意識向上の必要性を主張。(夏目)

論旨：北朝鮮有事の際の時系列シミュレーションと、各状況において発生するガイドライン、地位協定の不備による問題点の指摘。政府の早急な対応が可能な緊急時体制の構築の必要性を主張。(塩崎)

その後の議論：北朝鮮、日本の有事法制について。

〈テーブル 12〉 ペーパー発表 7・8

論旨：中国の台湾侵攻の可能性と、日米の台湾問題への反応の検証。中国の政治的・軍事的現状、台湾侵攻によるデメリットを考慮すると台湾侵攻の可能性は低いという結論。(安里)

論旨：中台衝突の歴史的経緯、台湾海峡危機の概説後、台湾が日米安保体制と日中関係の狭間にある非常に危険で微妙な問題であることを説明。二国間関係の限界、多国間協議の重要性を主張。(山崎)

その後の議論：二国間関係と多国間協議について。

〈テーブル 13〉 テーブル 1~12 まとめ

もう一度これまでのまとめを行う。フォーラムでの発表の柱として、理想対現実、日米関係と中国、経済と安全保障、核弾頭問題、自衛対攻撃、多国間協議の 6 つを据える。

〈テーブル 14〉 日米安全保障条約テーブルとの合同テーブル

自衛対攻撃について議論を行い、日米安全保障テーブルからは憲法・条約の観点から、安全保障テーブルからは現実的な側面からの意見が出され、白熱した議論となった。

〈テーブル 15・16〉 横須賀米軍基地へのフィールドトリップ

前日の横田基地に引き続いて在日米軍基地訪問。横須賀基地へ歴史分科会と合同で訪問した。到着後"Officer's Club"というレストランにて昼食をとり、戦艦ツアーとバスツアーへ。戦艦では普通の人立ち入りが禁止されている中枢部の閲覧も許される。ツアー終了後、安全保障分科会のメンバーのみ、日米安全保障に関するブリーフィングを受け質疑応答を行った。

〈Forum 準備〉 8月12日~13日

上記の 6 つのテーマのリンクづけと、これら 6 つについてのより深い考察を行う。内容が確定した後、フォーラムでの発表形式を決定。並行してテーブルのプロダクトを作成する。

## 考察

会議前は日米間の温度差から、アメリカ側参加者があまり日米安保体制に対する知識も興味も持っていないのではと心配していた。しかしその心配は杞憂に終わり、非常に質も温度も高い議論ができた。日米安保の重要性、日米安保を取り込んだアジア太平洋における多国間協議の必要性は確認されるであろうと当初思っていたが、実際のテーブルではその予想を越えた議論の発展を見せ、正直びっくりしているほどである。計画していた日米安全保障条約テーブルとの共同作業は断念したが、これは日本における憲法や日米安保条約の取り扱いの難しさを改めて認識できたがゆえの建設的あきらめだったと言える。とにかくテーブル設置当初の目標をはるかに越えた素晴らしいテーブルであった。

## プロダクト

### 理想主義から現実主義へー多国間協議の重要性

日米安全保障条約を念頭に日米間の安全保障同盟の重要性を考察する時、理想主義と現実主義の二つの視点を持つことが肝要である。挑戦されるべき目標あるいは達成値が理想であるのに対し、現実とは理想を達成する（または越える）可能性をもち発展の意思をもって考察することである。例えば日本国憲法第2章9条に述べられた「軍備無き平和」という理想は、国際紛争が多発する現状では非現実的であるかもしれない。しかしながら現実には自衛隊の設立を許容し、侵略行為を伴わない戦略によって地域の平和に貢献しようとしている。そしてそれは、いずれ「軍備なき平和」へ至る可能性もある。理想主義には現実主義の方向を定め、推進する役割がある。

この理想主義と現実主義を念頭に、我々即ち安全保障問題テーブルは、多国間協議の利用を強く主張する。地域の複雑さのため東南アジアの安全保障問題は二国間協議では対応しきれない。更に核兵器・経済・日米中関係・自衛対侵略といった国家安全保障に関わる問題も全体像を提示するには多国間協議によらなければいけない。上述された理想に近づくには東アジア地域において政治的環境が変化した現実を受け入れねばならない。日米同盟を核としコミュニケーションを提供する多国間協議が東アジア地域の安全保障関係の新しいモデルとして検討されるべきである。国家がイデオロギー陣営に分かれ、究極の核対決を恐れる冷戦時代は、経済と民族対決をキーワードとする、縛られない自由な時代へと変化した。冷戦時代において東アジアの安定は厳密な日米二国間関係で維持されていた。しかしながら例えば台湾をはじめとする中華人民共和国（中国）の論点は、多国間協議のみによって可能である。なぜならばそれは二国間問題の範疇を越えているからである。

核兵器に関してはロシア・北朝鮮（朝鮮人民共和国）・そして中国は脅威であり、よって日米は仲裁者として機能せねばならない。東アジア地域に反核兵器政策を実施するためにIAEA（国際原子力機関）に似た核兵器に関するアジアフォーラム設立を真剣に検討すべきである。

同盟により日本はアメリカの核傘下に入り、自衛のための必要最小限の軍事力を確保した。これにより日本は経済的成功を達成したのである。この成功から日本は、国際社会に特に北朝鮮と東南アジアに政府による人道的援助そして救助活動を果たすべきである。また日本は、ロシアの民間投資を推進し、それにより経済相互依存が生まれるようIMF（国際通貨基金）に経済政策を変更するよう圧力をかけるべきである。アジア、特に中国における経済上の緊密化の結果、多国間協議に新たな課題が提示される。

日米同盟関係と中国の関係をみるに、この地域の安全と経済成長のためには多国間のコミュニケーションが必要不可欠である。両陣営の政治的・歴史的障害と、この地域における中国の潜在的軍事力の脅威を念頭に、日米はこの台頭する勢力に対して緊密に協力して一致した対応を計らねばならない。これに加えて、コミュニケーションの回路を開くことにより、中国の台湾への敵対意識を抑制することもできる。そして多国間協議により台湾の意図を知ることにもできる。また産物と思想の交換は中国の資本主義化を援助し、それはひいては中国の民主化につながるかもしれない。よって多国間協議は侵略を抑止するだけでなく、文化・思想理解にも一助するのである。

東アジアの安全保障を強化し多国間安全保障を可能にするためには、日米双方で自衛の定義を明確にすべきである。自衛と侵略の境界は視点によって異なるため、自衛の定義は困難なプロセスである。よって視点の明確化が必要である。明確化の後、日本は自衛隊内に反テロリスト部隊を設置することを検討し、そして日本国民の安全を確保するためにスパイ活動を取り締まる法律を同時に検討するべきである。対弾道ミサイル、例えばTMD（戦域ミサイル防衛）構想や偵察衛星の保持もまた検討すべきである。救助活動において自衛隊で個人防衛のため武器を携帯することを許可する検討も有意義であろう。



## 日米安全保障条約 Mutual Security Treaty

### テーブルメンバー

清水道成：京都大学総合人間学部  
 Brett Dohnal：大阪外国語大学研究生  
 富士岡篤臣\*：北海道大学経済学部  
 吉村光歩：大阪大学法学部  
 Jennifer Connelly\*：Mount Holyoke College  
 Holly Drygas：University of Alaska  
 Brian Hagenhoff：University of Kansas  
 Joshua Pople：Sacred Heart University  
 \*はコーディネーターを表す



### テーブル設置当初の目標

日米間の同盟は日米安全保障条約を基盤として結束していた。そして、その日米安全保障条約の存在理由は、冷戦下において共産主義国、特にソ連に対抗するためであった。しかし、冷戦が終結し、日本を取り巻く国際環境も大きく変化した。21世紀へ向け、日米同盟を規定する日米安全保障条約をはじめ、憲法9条、自衛隊等を考慮しつつ、今後日米がどのような関係を維持すべきか、またどのような役割を果たすかといったことを考え、新たな指針を作成することを目的とした。

### スケジュール

＜本会議前の準備活動＞

(安全保障問題テーブル p.13 参照。全て合同。)

＜本会議中＞

テーブル 1	Josua Pople：“A Look at the Treaty of Mutual Cooperation and Security” 清水道成：“Examine the Mutual Security Treaty and Think about the Better Way the Treaty Exists”
テーブル 2	Holly Drygas：“Evaluating the Roles of Japan and the United States under the Mutual Security Treaty” 吉村光歩：“The Relationship between Problems of the Article IX of the Constitutions of Japan and Japan-U.S. Relationship with New Japan-U.S. Relationship in Mind”
テーブル 3	富士岡篤臣：“Japanese Security Policy for the 21 <sup>st</sup> Century” Jennnifer Connelly：“Japan's Identity as a Nation-State -What the Gulf War Revealed-” Brett Dohanal：“The Future of the U.S. and Japan Mutual Security Treaty” Brian Hagenhoff：“The U.S.-Japan Treaty of Mutual Cooperation and Security: Vital for the 21 <sup>st</sup> Century?”
テーブル 4～6	リサーチ及びこれまでの疑問点等についてディスカッション
テーブル 7・8	フィールドトリップ（航空・陸上自衛隊基地）
テーブル 9	日米安全保障条約に関してディスカッション
テーブル 10	安全保障問題テーブルとインターテーブル
テーブル 11～14	日米安全保障条約に関してディスカッション
テーブル 15・16	横須賀米軍基地へのフィールドトリップ
Forum 準備	プロダクトの作成

## テーブルの流れ

### <テーブル 1>

今後のテーブルの方向性を決定するため、何をテーブルで取り上げていくべきか話し合った。その結果いくつかの論点が挙げられ、発表の順番も決定した。

### <テーブル 2>

Joshua Pople と清水道成のペーパー発表が行われた。ともに日米安保条約の歴史とその内容についてであった。Pople のペーパーでは条約の歴史とともに主な条項の説明に力点が注がれていた。対して清水のペーパーは条約の成立過程から現在に至るまでの歴史に重点が置かれ、発表では今後の日米安保体制について地域的安全保障を提案した。発表の後は、ペーパーに関するディスカッションが行われた。

### <テーブル 3>

Holly Drygas と吉村光歩の発表が行われた。Drygas は日米安保体制について言及し、経済大国としての日本がその立場に見合った人的貢献をすべきと主張した。その点について、方法は異なるがほぼ全員の賛同が得られた。吉村はペーパーで憲法 9 条を扱った。既存の条文が現状と乖離してきている現状に焦点を当て、日米安保体制を維持するため最終的には 9 条を修正することを提案した。この提案に対して、どのように修正するかについて活発な議論が行われた。

### <テーブル 4>

富士岡篤臣、Jennifer Connelly、Brett Dohnal、Brian Hagenhoff の発表が行われた。富士岡の発表では現行憲法下では自衛隊の活動に制限があり、そのために日本が適切な国際貢献を果たせていないことを問題視した。そして、最終的には憲法を改正し、自衛隊をより自由に活動できるようにすべきだと主張した。Connelly のペーパーは湾岸戦争時に日本が経験したことを論じ、湾岸戦争を経て今後の国際貢献で日本が何をすべきか議論をした。Dohnal と Hagenhoff は共同で発表を行った。条約を機軸とした、日米安保体制の説明がなされた。

### <テーブル 5>

発表とそれに伴う議論から出た疑問点を解決するため、インターネットを利用してリサーチを行った。PKO、自衛隊、日本の政党の安全保障に関する政策を調べた。

### <テーブル 6>

個々の発表の後に浮上してきた疑問点をぶつけ合った。自衛隊の現状や米軍との協力の仕方、ロシアの存在が自衛隊の基地に与える影響などを議論した。また、翌日の広島 Day を踏まえ、平和とは何かについて話し合った。

### <テーブル 7・8> 千歳航空自衛隊基地、東千歳陸上自衛隊基地フィールドトリップ

(安全保障問題テーブル p.14 参照)

### <テーブル 9>

日米安保と安保条約をどのように分析するかについて話し合った。そこで、日米安保と安保条約を、条約の歴史、条約の分析、条約の意味するもの、国家のアイデンティティー、条約のあるべき姿、5つの観点から話し合った。

### <テーブル 10>

条約の歴史、条約の分析、条約の意味するものに関する考察を行った。このテーブルでは「日本が世界においてとるべき役割」に関して、議論が白熱した。意見はいわゆる「普通の国家」になるべきだというもの、「交渉と援助を中心とする国家」になるべきだというものに分かれた。その後、安全保障問題テーブルと合同でディスカッションを行った。

### <テーブル 11>

主に、条約のあるべき姿に関連させて、日本の将来とるべき進路について話し合った。そこで、日本のとるべき進路を、短期的かつ具体的な観点からと、長期的かつ抽象的な観点から分析することを決めた。



＜テーブル 12＞

日本のとるべき進路に関して、短期的な視点と長期的な視点から具体的な案を提示し、それに関する考察を行った。短期的な視点では、皆の意見が一致したが、長期的な視点では、現実主義か理想主義かで意見が異なり一致しなかった。

＜テーブル 13＞

テーブル 12 で意見が一致しなかった「長期的な視点から見た日本のとるべき進路」について話し合った。そこで、日本のとるべき進路について、二つのオプションを設けた。一つは、日本が「普通の国家」になるべきだというもの、もう一つは「交渉と援助を中心とする国家」になるべきだというものである。そしてそれぞれの利点、欠点について考察した。

＜テーブル 14＞

テーブル 13 の続きで、「日本のとるべき進路」に関するディスカッションを行った。その後、午後の横須賀基地でのフィールドトリップに関する説明を受けた。

＜テーブル 15・16＞横須賀米軍基地へのフィールドトリップ

(安全保障問題テーブル p.15 参照)

### 考察

日米安全保障条約を中心に、憲法 9 条、自衛隊と日本人でもきちんとした知識を持った人間が少ない分野だけに、米国側参加者の一部には少々知識の点で苦しい側面があった。また、憲法 9 条、自衛隊と日本でも大きく議論が分かれる分野だけに、意見を一つにまとめるということが非常に難しく、理想主義と現実主義の間の壁を打ち破ることはできなかった。また、米国がどのように関わるかよりも、むしろ日本が今後どのような役割を果たすべきかということに議論が集中した。しかし、両者とも合意したのは、日本はより積極的に国際社会の中で何らかの役割を果たさなければならないということであり、また、日米が共同でアジア太平洋地域の安定を促進しなければならないということである。このような議論がより広く日米双方で行われることの必要性を強く感じる。

### 航空自衛隊基地にて



## プロダクト

長期的視点において、日米関係がとりうる方向性はいくつか存在する。その中で最も可能性の高い二つの選択肢は、日本が交渉役的国家の役割のみを担うことか、あるいは、「普通」の国家の役割を担うことである。交渉役となる国を目指すならば、平和維持活動あるいは、他の信頼醸成活動における役割を拡大する一方で、自衛隊の持つ後方支援活動等の非戦闘分野での活動という制限を維持する。この場合、日本は自衛隊員等の日本人の生命を比較的危険にさらさず、日本は信用を創造することができ、周辺諸国を敵に回すことを防ぐことができる。だが、日本が世界の安全に関して持つ影響力は小さいままであり、米国に依存し続けることとなる。よって、日本が積極的に国家間の紛争を共同で実力により終結させる能力は低くなる。交渉役的国家になるのであれば、周辺有事が起こった際、日本がとりうる唯一の選択肢は、新ガイドラインに基づき、すばやくかつ十分に米軍と協力体制を築くことである。

可能なもう一つの選択肢は、「普通」の国家になることである。「普通」の国家になることは、日本国憲法の見直しを伴う。その見直しは、集団的自衛権を認め、武力を伴う紛争を終結させる行為に参加できる軍隊を保持することを可能にする。前者と同様に平和維持活動や信頼醸成措置への積極的参加及び、具体的行動を行うことにより世界有事を解決させる際により大きな影響力を発揮することができる。またそれと同時に地域の安全においてよりこれまで以上の大きな責任を持つこととなる。この場合米軍の駐留のあり方も変化してくるであろう。「普通」の国家になることの否定的側面は、日本の再軍備化が、日本国内のみならず、アジア太平洋地域での不安定さを引き起こす可能性があることである。また自衛隊を積極的に使用することは、自衛隊員等の日本人への生命への危険を増やすことにつながる。しかしながら、もし危機が起こったならば、必要と思われるいかなる役割をも担うことができる。

これまで、日米安全保障条約はアジアにおける不安定要素に対処する役割を担ってきた。このような安全保障の同盟を維持することは、不安定なアジア地域にとって今後も非常に重要である。なぜなら、米軍の駐留は、日本の防衛を保証し、アジアにおける米国の影響力を維持させ、貿易ルートの自由な利用を可能にするからである。これは、日米双方の利益に合致する。日米関係がどのように変化するかは、日本がどのような役割を今後担うかによる。しかし、その役割は、日本国民及び日本周辺の国が支持するものでなければならない。日米安全保障条約が危険にさらされる時、アジア地域はより不安定化する可能性が高い。そのような事態は避けねばならない。日本は、どのような国になるのかを自主的に選択し、主張しなければならない。そして日本と米国の相互協力は、双方の国の将来の繁栄のみならず、アジアの国々の発展にも重要な役割を果たす。



## ビジネス *Business Practices*

### テーブルメンバー

糸永洋三\*：慶應義塾大学商学部  
 大島陽介：東京大学経済学部  
 田中大樹：立命館大学政策科学部  
 Edward Papabathini\*：Depaul University  
 Chazara Clarke：Howard University  
 Deepa Madhavan：Mills College  
 Sarah Richter：University of Nebraska  
 \*はコーディネーターを表す



### テーブル設置当初の目標

80年代以降、自動車や半導体、フィルムと行った様々な分野において貿易摩擦が表面化し、日米の企業間関係は必ずしも良好なものではなかった。それに伴って浮き彫りとなった日米両国間の商慣習の違いは、日米の企業間で提携や資本参加が相次ぐ現在においても依然存在し続けている。このテーブルでは、金融や流通、保険など 21 世紀に向けてより一層日米間の商取引が活発化するであろう分野を中心に商慣習を具体的に検証し、ビジネス界における日米のよりよいパートナーシップの創造を試みることを目的とした。また、テーブルでの議論以外にも、各開催サイトにおける実地研修を重ねながら、不況の日本、好況維持への不安が強まるアメリカのビジネス・金融界に独自の提案をしていきたいとも考えた。

### スケジュール

＜本会議中＞

テーブル 1	日米貿易摩擦概略についてのインターテーブル
テーブル 2	田中大樹：“Management System for the Future-Kyocera”
テーブル 3・4	京セラ、堀場製作所へのフィールドトリップ
テーブル 5	Sarah Richter：“The Extension of Cultural Values in Business Practices”
テーブル 6	Chazara Clark：“Corporate Loyalty：Suicide and Executive Resignations vs Golden Handshakes and Platinum Parachutes”
テーブル 7	糸永洋三：“Rethinking the Japanese Management System”
テーブル 8	北海道大学経済学部金井一頼教授勉強会
テーブル 9	大島陽介：“Will the Japanese Banks Strike Back?”
テーブル 10	Deepa Madhavan：“The Causes for the Crisis in Japan's Financial System”
テーブル 11	Edward Papabathini：“Flaws in the Conventional Wisdom”
テーブル 12・13	フォーラムの発表の準備
テーブル 14	アメリカ大使館へのフィールドトリップ
テーブル 15・16	フォーラムの発表の準備
Forum 準備	プロダクトの最終構成 12日：アメリカンファミリー生命保険株式会社、通商産業省へ訪問

## テーブルの流れ

本会議におけるビジネステーブルに課された責務自体、非常に議論を喚起するものとなってしまった。世界経済がボーダレス化、企業益が「国益」に直結するような時代ではなくなったとされる現状の中、ビジネステーブルは「国家国益の視点から検証、創造する」という総合テーマを掲げている第 51 回の会議に対し、どのような役割を果せばよいのだろうか、という問題である。

「お互いを比較して、知り合う」を越えた議論ができるように、テーブルで議論を呼ぶトピックを恣意的に限定しテーブル内での話し合い、またぶつかりあいから創造される学生の発想を大切にしたいと考えた。更に、机上の論理に留まらないために、テーブルに深く関係した実地研修先を各開催サイトにて選出し、フィールドトリップを実行した。

まず、深刻な複合不況に陥ってしまっている日本経済を考えるために「日本的経営とは何か」という議題を基本の軸に据えた。そして、ローカル企業がグローバルマーケットを制している京都企業の代表格である京セラ独特の「アメーバ経営」について、田中がペーパー発表を行ったが、これは議論において日本的経営と米国式経営の相互比較を行う際の好材料を提供した。糸永はペーパーで、日本的経営の、特に終身雇用制度の是非について述べた。その後のテーブルの議論では「CEO（最高経営責任者）の責任は株主と社員のどちらに向けられるべきか」といった日米経営比較から、両国の教育問題、社会問題、国民性を問われる文化問題などにまで話題は発展した。テーブル発表後に行われた京セラ実地研修においては、京セラ広報担当者に対し、突っ込んだ質問も多くみられた。特にアメリカ側参加者にとって、世界有数の製造業の技術力を誇る日本の一企業の歴史、展示資料などを見学できたことは、いい経験となったであろう。午後からは、堀場製作所を見学させていただいた。会社案内の説明を受けた後、経営理念に関する日米間の大きな差異、またアジリティー経営を実践している堀場のマネジメントスタイルなどに関して、議論が盛り上がった。

次に、米国側参加者の Richter と Clarke が、今回のテーブル目標に直接関係する課題である商慣習を取り上げた。Richter は、両国のビジネス習慣と国民性、文化価値観での差異に注目したペーパーを発表した。議論では、特に男女の労働雇用の問題が扱われ、セクハラに関する感覚の違いに日本側参加者男 3 名は驚きを隠せなかった。一方 Clarke は、それぞれの文化の影響を受けている両国の CEO の役割の違いや、労働者の価値観、特に企業への忠誠心などを取り上げ、議論した。

北海道では、北海道大学経済学部の金井教授にコメントをいただいた。また、90 年代のビジネス経済界最大の懸案である日本の金融再生問題について日米それぞれの参加者（Madhavan、大島）から発表があり、日米金融問題を二つの観点から吟味した。一つは、日本の金融危機そのものであり、もう一つは日米の金融形態である。その中で、日本の金融危機は日本における規制のあり方や経済構造に起因するということが議論された。具体的には、護送船団方式、系列、直接・間接金融などの事項を扱った。

最後のペーパー発表では、米国側コーディネーターの Papabathini が総論として日本的経営・日本経済に対しての処方策を提議した。彼は、90 年代の日本の不景気の原因を大きく分けて、80 年代のバブル経済、規制の多さ、マクロ経済政策の失敗の三つと考えている。その回復の方法としては政府主導による規制緩和、企業文化の変革を実施し、利益（収益）重視の経営への転換を図るべきだと主張した。例えば、政府の規制に守られてきた金融界と異なり、国際的に競争をしてきた任天堂、セガ、ソニー等は、不況下でもそれなりの業績を出している。その後は、実務をあまり教えない日本の大学教育に対する批判や、日本的経営は、終身雇用から起業家・報酬型、株主重視型経営に転換すべきだという彼の主張を中心に、活発な議論が展開された。



東京では、テーブルの議論以外に以下3カ所のフィールドトリップを実践した。

①通商産業省：大臣官房秘書課企画調査官の齋藤健氏に『日本側交渉当事者からみた日米自動車交渉』と題されたブリーフィングを行っていただき、学生会議参加者からの質問を受け付けるというスタイルで行われた。本当に伝えたい思い、事柄は母国語で、という齋藤氏の御要望により、本会議のテーブル活動では初めて日本語を中心とした活動時間となった。ブリーフィングでは、ボランタリー・プランと言われるいわゆる数値目標を要求してくる米国の不合理的な貿易経済外交に対して、他産業への影響も考えた上で、日本の国益を死守できるかという、近年ヤマ場となった日米通商交渉の過程についてお話していただいた。会議参加者、とりわけアメリカ側の参加者からの質問が議論を盛り上げたようだ。今回の会議は日米の二国間関係を国益という視点で考えるという総合テーマを掲げていたが、齋藤氏は、結論として二国間関係の限界を指摘、日米関係を軸とした多国間の枠組みを持つことの重要性を述べていた。WTO（世界貿易機関）などの国際ルールに身を委ねるということ、そのWTOの公正、健全な運営のために、日本が果たすべき国際的役割の大きさ等にも言及された。

②米国大使館訪問：最初にアメリカから見た世界における日米関係の重要性について話していただいた。その中で、貿易摩擦の原因は日本側の過度な規制、あるいは不当な経済行為などによって生じるという見解が述べられた。これは、既述の通商産業省へのフィールドトリップの際に獲得した見解と幾分の食い違いを見せる部分があり面白かった。また、自由貿易は消費者の便益をもたらすというアメリカ側の主張が強調されるが、アメリカ側の自動車、半導体における対応をみるにつけても説得力のないものであった。経済テーブル参加者の平林、ビジネステーブルの大島の両者は、その説得力のない御都合主義的自由貿易に対し、果敢に大使館高官と議論を交わしており、非常に頼もしかった。

③アメリカンファミリー生命保険株式会社（以下、AFLAC）：AFLACは金融ビッグバンを進める日本の金融界において、順調な業績をあげ、健全な経営を行っているといわれている。AFLACでは、日本における保険産業とその規制緩和について話していただいた。外資系の商品開発は、これまで第三分野という生損保以外の保険に限定されており、AFLACはその中でガン保険を中心に売上をのばしてきた。AFLACは今回の規制緩和を日本系の保険会社によってその収入源であった第三分野を食われてしまう危機としてではなく、事業拡大のチャンスと捉えていた。

## 考察

●第51回会議総合テーマとの兼ね合い、関係性を念頭に置いて進めたテーブル運営を行うことを怠ってしまった。やはり国益概念との連携を思考することは困難であったように思う。

●「相互比較を検証」の前に、相互理解を十二分に行うことが大事である。問題点、現状についてお互いに知らない。それを乗り越えて初めて建設的な議論ができるとすると、1ヶ月という時間はあまりにも短すぎた。

●会議準備活動時に作成したテーブルの目標を少なからず実践し、テーブル参加者全員の積極的な議論への参加が毎テーブルに見られた。日本側のトピックに偏りがちだという批判も受けたが、日本の不況への光を見い出そうというテーブル、分科会におけるゴールへ向かった議論を展開できたことは大きな収穫であった。

●4つの分科会、8つのテーブルという構成を十分には活用しきれなかった。

●テーブルの一つ一つの内容を越えた全体的な視点、バースアイを持ち合わせていなかったため、各論ごとの議論の展開がテーブルの中心となり、会議後半のプロダクト作成が総括的なものとなってしまった点は否めない。

## プロダクト

ビジネステーブルのプロダクト作成においての最大の論点は、「日本経済は、いかにして不況から回復するか」という命題にある。日米学生会議の歴史を振り返ると、ほぼ毎回、会議を支える主要なテーブルと位置付けされているビジネス・経済分科会において、第 51 回のビジネステーブルは、大きく分けて以下の 4 点において議論を重ねた。

### ●日本の経営の是非とその終焉

日本の経営の基本概念、終身雇用制度の是非、CEO の統治責任、日本のプラス米国的経営の賜物である京セラのアメーバ経営について

### ●金融再生問題

護送船団的規制による停滞、系列・メインバンク制度の形骸化を原因とする日本金融の危機、金融手段・形態の日米間の違い、日本金融界での「メガ・バンク」出現の可能性について

### ●ビジネス習慣と国民性

男女の労働雇用格差の問題、企業文化・風土、経営理念、大学教育問題、実務と研究の両立について

### ●日本経済・ビジネス界への処方箋

政府主導による規制緩和、企業内競争原理導入などの企業文化変革の実施、キャッシュフロー経営・新会計原則・株主重視型などの利益重視経営への転換、アングロサクソンの価値観に対する「日本的なるもの」は何か？

ビジネス・経済テーブル合同フィールドトリップに関する総括

### ●通商産業省齋藤氏

国益のぶつかり合う最前線ともいえる日米自動車交渉の検証を通し、通商問題における、二国間関係の限界、WTO に代表される国際機関の重要性を主張。企業益における「国、官僚」の関与の限界も指摘された。

### ●米国大使館通商担当の方々

日米貿易摩擦原因は、日本の規制と不当な経済行為という担当者の主張に対し、本当の原因はアメリカの「御都合主義的自由貿易＝ダブルスタンダード」ではないかという日本側参加者からの反論が出た。

多様なトピック、課題を様々な方向から検証することを試みた結果を踏まえ、一つにまとめられる結語をつくることをここでは避けた。そして、上記の議題以外にも日米のビジネス界の主要アジェンダは多く存在する。来年度以降も設置されるであろう日米学生会議のビジネステーブルで、残された課題解決を引き続き行って欲しい。



## 経済政策 *Economic Policy*

### テーブルメンバー

- 浅野容子：早稲田大学政治経済学部  
 鍵田亜基：慶應義塾大学総合政策学部  
 粕谷浩和\*：慶應義塾大学商学部  
 平林優：筑波大学医学専門学群  
 Beatriz Ramirez：Campbell University  
 John Bechtold：Thunderbird  
 Karen Clarke：Howard University  
 Wright Meyer\*：University of NC, Chapel Hill  
 \*はコーディネーターを示す



### テーブル設置当初の目標

日米間の貿易紛争や協調関係、そして文化慣習の相違や政策決定機関とそのプロセス、企業戦略の違いなどを、過去から現在まで多角的かつ詳細に見ることにより、日米間の貿易・通商関係を検証していくことをテーブルの目標とした。そしてそこから得られるであろう相互理解と解決策が、通商のみならず今後の日米関係をよりよいものにしていくと考えた。

### スケジュール

<本会議中>

テーブル 1	鍵田亜基：“How to Ease the Trade Friction Between the U.S. and Japan?: Look Back the History and Move on to Our Better Future”
テーブル 2	浅野容子：“Japan-U.S. High-Technology Trade Friction”
テーブル 3・4	京セラ・堀場製作所へのフィールドトリップ
テーブル 5	粕谷裕和：“Trade Dispute with U.S. Automobile Industry”
テーブル 6	勉強会
テーブル 7	John Bechtold：“Problems in the U.S. Trade Policy and How We Can Create a Prosperous Relationship”
テーブル 8	北海道大学経済学部金井一頼教授勉強会
テーブル 9	Beatriz Ramirez：“Benefits of the Japan-American Trade Relationship”
テーブル 10	平林優：“The U.S. and Japan Should Control the Genetic Business?”
テーブル 11	Karen Clarke：“The Effect of Japan’s ‘Big Bang’ on Deregulation of its Insurance Market: Boom or Spark?”
テーブル 12	Wright Meyer：“Trade Solution to Systemic Inefficiencies due to Cultural Characteristics”
テーブル 13・14	米国大使館へのフィールドトリップ
テーブル 15・16	フォーラムの発表に向けての準備
Forum 準備	プロダクトの最終構成 12日：アメリカンファミリー生命保険株式会社、通商産業省へ訪問

## テーブルの流れ

### <テーブル 1> ペーパー発表 1

テーブルメンバーの日米経済関係に関する基本的な考えを確認するために様々な問題点を提案した。日米どちらの国が公正な貿易を行っているのか、果たして両国の関係は良好なのか、両国の政策に正当性があるのか、これからの日米関係はどうあるべきか。これらの点に基づく議論により、今後のテーブルで、メンバーが偏った意見を持たず、多角的な視野で考察していく素地ができたように思う。(鍵田)

### <テーブル 2> ペーパー発表 2

日米経済摩擦について、80年代後半の半導体協定をめぐる双方のやり取りを取り上げて考察した。対日貿易赤字の拡大に脅威を感じた米国議会と生産者団体が結びつくことで、アメリカの貿易政策が保護主義へ傾斜していった過程に特に焦点を当てた。その後の議論では、産業間の相互依存が深まる今日において政府が特定産業保護を行うことは市場経済を混乱させるといふこと、日米双方が多国間ルールに基づく経済政策をとるのが望ましいことを確認した。(浅野)

### <テーブル 3・4> 京セラ・堀場製作所へのフィールドトリップ

(ビジネステーブル p.22 参照)

### <テーブル 5> ペーパー発表 3

自動車分野における貿易摩擦について。オイルショックに伴うアメリカ車生産の不振と日本車躍進の理由を話し合う。日本が採用した輸出自主規制、政界と産業界の関係における日米間の相違などを説明した。

### <テーブル 6> 勉強会

アメリカ側参加者が持ち寄った資料をもとに、様々な経済指標やニュースについての勉強が行われた。

### <テーブル 7> ペーパー発表 4

アメリカ貿易政策決定の政治メカニズムについて。議会の行政府への圧力、米議会における法案形成過程、利益団体の政治献金を通じた議会に対する影響力を説明。結論として、議員の特定産業保護を防ぐための選挙資金改革の必要性を訴えた。(Bechtold)

### <テーブル 8> 金井一頼教授による勉強会

(ビジネステーブル p.22 参照)

### <テーブル 9> ペーパー発表 5

貿易における日米関係摩擦が起こる原因を探り、解決策を話し合った。(Ramirez)

### <テーブル 10> ペーパー発表 6

遺伝子ビジネスをテーマとした発表。遺伝子ビジネスが発達してきた背景を考察した。議論では、遺伝子に特許を許可することで受ける利点と、弊害を話し合い、遺伝子への特許はある程度規制されるべきだという結論に達した。(平林)

### <テーブル 11> ペーパー発表 7

公正、自由、グローバルを掲げた日本の金融改革、ビッグバンについて。具体例として保険業界を取り上げて市場における政府規制の現状を考察した後、規制緩和後の競争加熱を予想しながら、外資参入のための企業戦略について議論した。(Clarke)

### <テーブル 12> ペーパー発表 8

日米の市場構造の違いは各々の文化の違いに起因すると指摘。グループ志向で合意形成を重視する日本社会は、経済力をもつこと自体が重要と考える一方で、個人志向で開拓精神旺盛なアメリカ社会は、経済活動を通じて個人の利益を追求することが重要とみなす。市場には理論では説明できない部分があることを確認した。(Meyer)

### <テーブル 13・14> 米国大使館経済部へのフィールドトリップ

(ビジネステーブル p.23 参照)

ビジネステーブルと合同で米国大使館へのフィールドトリップを行う。大使館でこれまでの



テーブルディスカッションで持ち上がった問題点をぶつけてみたが、実際にはやはり限られた範囲での答えしか得られなかったのは残念だった。しかしそうした限界の多い現場の状況を把握できたことは大きな収穫でもあった。

〈テーブル 15・16〉

フォーラム準備が行われた。今まで議論が重ねられてきた日米の政策プロセスの相違や文化慣習などの様々なトピックを、テーブルのプロダクトとしていかにまとめていくかを考えた。

〈フォーラム準備〉 8月12日：通商産業省へのフィールドトリップ

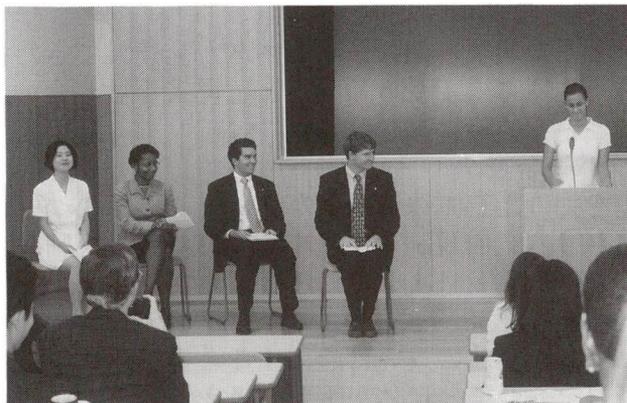
(ビジネステーブル p.23 参照)

日米自動車交渉で最前線に立たれた通産省の齋藤健氏に勉強会を開いていただいた。最も困難であった日米貿易交渉—自動車交渉での実体験を伺うことで、私たちなりに国際社会における交渉の難しさを実に鮮明に学ぶことができた。これまでのテーブルセッションにおいて議論してきたことが、齋藤氏のお話によって包括され、一つのストーリーとなって、メンバーの経済政策に関するさらなる理解につながったと思う。

## 考察

日米貿易関係について多角的に考察を行うというテーブルの目標は、概ね達成されたと言える。はじめに、日本側より過去の大きな貿易紛争が二事例提示されて皆で検証を行ったことは、メンバー全員が問題点を確認し合いそれらを共有するのに役立った。その上で、日米双方のメンバーが互いに知識を補完し合いながら、日米の経済構造や通商政策決定のメカニズムについて積極的に討議を行うことができた。各方面へのフィールドトリップも充実していた。プロダクトとしては、私たちは両国の貿易に関わる様々なレベルにおける改革を提案し、特に今日の世界的市場統合時代における WTO（世界貿易機関）の強化を訴えた。しかし、WTO の機構改革については知識が不十分で、徹底した議論を行うことはできずに終わったことが反省点として残る。また、同じ分科会下のビジネステーブルとの関連性には欠ける内容の提言であったのは、仕方のないことかもしれない。

フォーラム発表の様子



## プロダクト

米国と日本は経済的に密接にリンクしている。日本にとって米国は最大の貿易相手国であり、また一方で米国にとって日本は NAFTA(北米自由貿易協定)に次ぐ第二の貿易相手国である。貿易関係を特徴づける相互依存は、貿易紛争を引き起こす反面、世界経済に安定をもたらすという両刃の剣である。そしてその貿易関係を論じる際に重要な要素となるのが文化やコミュニケーションの問題、産業界の関心、通商政策決定と政治システムの問題である。

日米間の貿易紛争の多くが、文化や慣習・コミュニケーション手法の違いにより発生している。そしてそれらの相違が、貿易交渉の際の誤解につながっているのである。

また、産業界の関心についていえば、産業界・企業の圧力団体は米国においては議会の政治指導者に対し多大な影響力をもっており、日本においては官僚に対し同様の影響力をもっている。そしてそこで問題なのはそういった活動の不明瞭さであり、企業が自産業の保護を政府に求める際、その不明瞭さゆえに政府が関わった場合には貿易紛争を引き起こし、貿易障壁をも生み出してしまうのである。

我々のゴールは未来に向けて日米関係をよりよいものにすることであり、それはコミュニケーション手法の改善や政治・経済システムの二つの改善によってもたらされる。

第一にコミュニケーション手法の改善についてであるが、これは学生や社会人の交換プログラムをより活性化し、米国により多くの日本の情報機関を開設することで達成されるであろう。

そして第二に政治・経済システムの改善についてである。これについては政府の代表者に対する一般の人々の働きかけをより活発にすることが最も重要であると考えられる。そのため、とりわけ日本においては更なる情報公開が求められており、保護主義や制裁措置といった通商政策に対する我々の意見を双方の政治指導者に知らせることで、我々は両国の官僚や政治家の考えを交換することができるであろう。日本と米国の一般国民は、官僚や政治家が実際に政策を発動する前に意見できるよう、監視すべきである。

現代社会において産業は国家の枠組みを越えて活動しているため、貿易交渉における各国政府の役割は小さくなりつつある。それゆえ WTO(世界貿易機関)はより公平かつ効率的に、貿易協定に対し強力な力を発揮すべきである。我々は過去の日米の貿易関係と其中での紛争に焦点を当て、様々な改善が必要であることを痛感し、国家レベルの貿易紛争解決には個人レベルでの意識改革が重要であることで一致した。



## 人口と医学 Population and Medicine

### テーブルメンバー

川添奈津子：筑波大学第二学群人文学類  
 小林美和子\*：筑波大学医学専門学群  
 林徹郎：東京大学理科I類  
 Tamar Brown：Smith College  
 Samiya Edwards：University of Maryland  
 Larry Rosales：New York University  
 Jodie Roussell\*：Georgetown University  
 \*はコーディネーターを表す



### テーブル設置当初の目標

近年の医療技術の進歩にはめざましいものがあるが、一方で新たな課題も突き付けてきた。このテーブルでは高度医療社会の一員として少子高齢化問題を中心とする「人口問題」と、「医療技術問題」という二つの大きな側面から日米の来し方行く末を問い直し、あるべき高度医療社会の姿を検討することを目的とした。

### スケジュール

<本会議前の準備活動>

7月13日 厚生省保健統計室訪問

<本会議中>

テーブル 1	イントロダクション
テーブル 2	川添菜津子：“Existing Paradox of the ‘Life Controlling’ Technology”
テーブル 3	林徹郎：“Life-Sustaining of the Sunset Empire” Jodie Russell：“Fertility Changes in Japan: The 1940’s to the 1990’s”
テーブル 4	Larry Rosales：“One Step Back to Take Two Steps Forward” 小林美和子：“Rising Health Care Costs: Seeking Approach for the Future”
テーブル 5・6	明治鍼灸大学フィールドトリップ
テーブル 7	札幌市在宅福祉サービス協会フィールドトリップ
テーブル 8	Tamar Brown：“From Outsiders to Everyone: Dealing with AIDS in Japan” Samiya Edwards：“On the Fringe of Japanese Society: The Plight of the Homelessness in Japan”
テーブル 9・10	東札幌病院フィールドトリップ
テーブル 11・12	札幌医科大学・北海道立小児総合保健センターフィールドトリップ
テーブル 13	フォーラムに向けての総括
テーブル 14	国立国際医療センターフィールドトリップ
テーブル 15	フォーラムに向けての総括
テーブル 16	厚生省フィールドトリップ
Forum 準備	プロダクトの最終構成

## テーブルの流れ

＜本会議前の準備活動＞

●7月13日 厚生省訪問

保健統計室室長瀬上清貴氏にお会いする。テーブルに関連するテーマについて、豊富な資料を用意して下さり、興味深いお話も多く伺うことができた。

＜本会議＞

＜テーブル1＞ イントロダクション

各自のペーパーピックの紹介と1ヶ月間のテーブルの進め方の話し合いを行った。

＜テーブル2＞ ペーパー発表1

先進国における生殖医療と第三世界への医療援助に関して。生殖医療を例として高度医療技術の意義について扱った。発展途上国で初歩的な医療でさえ十分に享受できずに命を落とす人々が多くいる中で先進国の人工受精、体外受精のような高度技術の利用に意義はあるのか、本当に有効に活用されているのか、といった議論がされた。(川添)

＜テーブル3＞ ペーパー発表2・3

少子高齢化と労働力不足について。少子高齢化社会を迎える日本の現状とそれに付随する諸問題、特にマンパワー不足の打開策について。アメリカでの介護問題や高齢化に対する意識の違いなど、日米の比較により興味深い議論が進められた。(林)

日本における避妊法の変遷と社会的背景について。日本における避妊法の変遷とその社会的背景について。米国との比較や日米の性教育の違い、女性の社会進出についてなど、多岐にわたる議論がされた。(Roussell)

＜テーブル4＞ ペーパー発表4・5

代替医療について。現代西洋医学に代わるものとして最近注目を集めている代替医療について、アメリカにおける普及度や認識における日米比較、今後の可能性についてなどをメンバーが記入したアンケートを用いながら話し合った。(Rosales)

医療費の高騰と日米での医療保険制度の比較。二国の医療保険制度の相違点や、医療費の高騰が特に問題となっているアメリカの医療現場の現状について議論した。両国の医療保険制度の比較にあたり、それぞれあまり自国の医療費の制度に関する知識を持ちあわせていないことに気づかされた。(小林)

＜テーブル5・6＞ 明治鍼灸大学フィールドトリップ

日本で唯一の鍼灸大学である明治鍼灸大学を訪問した。鍼灸を科学的に研究されている先生にお話を伺ったり、また実際の治療の場を見学させていただくなど、様々な角度より鍼灸について学ぶことができた。実際に鍼灸体験もさせていただいた。

＜テーブル7＞ (財)札幌市在宅福祉サービス協会フィールドトリップ

チーフコーディネーター松羅研二氏に「ホームヘルプサービスの現状とヘルパーの役割」というテーマのもとお話を伺った。氏の身近な例を用いた多くの問いかけにより、私たちも一緒に考えながらお話を伺えたので、高齢者介護の問題をより身近なものとして理解を深めることができた。

＜テーブル8＞ ペーパー発表6・7

日本におけるエイズ感染とその文化的背景について。日米のエイズ感染の現状比較、感染における文化的背景などが論じられた。また、意識の違いや性教育の違い、それらが今日の状況にどのように影響しているかなど、二国を比較しながらの活発な議論がなされた。

(Brown)

日本におけるホームレスと社会的地位について。日本ではホームレスを社会の一員から排除する傾向がある一方で、アメリカでは積極的に支援活動が行われている。両国の現状比較や人々の意識を中心に議論を行った。(Edwards)

＜テーブル9・10＞ 東札幌病院フィールドトリップ

緩和ケア病棟を持つ東札幌病院を訪問した。午前中は病棟見学と病院ボランティアの方に混



じってのボランティア体験、午後には院長や婦長をはじめ、職員の方々とのディスカッションを行った。一般の病棟とは異なる雰囲気を持つ病棟や、熱心な職員の方の姿に触れ、参加者全員にとって大変有意義な時間となった。

〈テーブル 11・12〉 札幌医科大学・北海道立小児総合保健センターフィールドトリップ  
はじめに伺った札幌医科大学では、まず日本国内でも有数の「標本館」を見学した。解剖された人体や奇形児、さまざまな腫瘍や皮膚病の標本の見学はメンバーの印象に強く残ったようであった。午後には臨床棟に周産期学講師の遠藤俊明助教授が人工受精について、ビデオや実際に使用される器具の説明を交えつつお話して下さった。限られた時間の中、メンバーからの多くの質問にも丁寧に答えていただいた。

その後北海道立小児総合保健センターを訪問した。主に札幌周辺からの未熟児が外来で運ばれてくるということで、小さな命が一生懸命に呼吸している様子がとても印象的であり、見学の時間が限られていたのが残念であった。

〈テーブル 13〉 フォーラムに向けての総括  
各テーブルメンバーによる発表も一通り終わり、いよいよ今回よりフォーラムに向けてのまとめに取り組み始めた。

〈テーブル 14〉 国立国際医療センターフィールドトリップ  
国立国際医療センターのエイズ治療・研究開発センター医療情報室青木真氏にお話を伺った。これまでの議論をもとに、参加者からは積極的に質問が出された。青木氏の意見が取り入れられた病棟は、患者の方が落ち着いて過ごすことができるような工夫が随所に施されていた。

〈テーブル 15〉 フォーラムに向けての総括  
引き続き、すべてのテーブルを総括して一つのプレゼンテーションにする作業の試行錯誤が続いた。

〈テーブル 16〉 厚生省フィールドトリップ  
マイクやスクリーン等を備えた本格的な会場で、質疑応答とディスカッションを行った。1ヶ月のテーブルディスカッションを通じて生じたさまざまな質問を聞く絶好の機会となり、それらの質問に対し、各種統計資料などを豊富に用いて丁寧に答えていただいた。最後にテーブルのプロダクトに対する御意見を伺ったが、その後のフォーラム準備に向けて大いに役立った。

〈フォーラム準備〉 8月12日～14日 最終プロダクト構成  
この期間、本格的にフォーラムの発表の準備に取り組んだ。

## 考察

このテーブルの特徴は二つある。一つには人口と医学の分野に関する実に多様なトピックを扱うことができたこと。そして二つ目には数多くのフィールドトリップを実施できたことである。特にフィールドトリップに関しては多くの方々の御協力により、大変充実したプログラムを組むことができた。会議でのテーブル活動はメンバーにとって人口と医学の諸問題に対する関心を広め、さまざまな視点から物事を考えてもらうきっかけとなった。こうした意味において、会議の一面である「学び」においては成功であったと考えるが、一方会議のもう一つの側面である「成果発表、提言」においては不十分であった点は否めない。会議中中学んだ貴重な経験のすべてを一つにまとめるためには、得た知識を消化し、更なる議論を積み重ねる時間が必要であった。人口と医学に関する諸問題は今後ますます社会において重要な位置を占めるようになることであろう。その際にこの会議で得た知識や考え方が活かされれば、個人レベルではあるが、これらの残された課題は達せられたと言えるのではないだろうか。

## プロダクト

高度医療社会の一員として、日米が共通して抱える課題は数多くある。人口と医学テーブルでは約1ヶ月の間、エイズ問題から少子高齢化問題、医療費問題、生殖医療、代替医療や緩和ケア医療など実に多様なテーマを扱った。数多く行ったフィールドトリップを通じて得た貴重な体験や情報とあわせて、1ヶ月の成果をフォーラムに向けて一つにまとめる作業は大変な困難を伴ったが、最終的には "Health Care in Japan and the U.S.: Examining each other's systems to prepare for future challenges" というテーマのもとに集結させることができた。1ヶ月の多岐にわたる議論を通じて、しばしば日米間の問題意識や対処法における相違点に直面した。フォーラムでは両国の比較検討が将来におけるヘルスケアの問題解決に役立つという考えに基づき、エイズと高齢化をその例として取り上げながら発表した。構成は次の通りである。

### ①日米の医療システムの違い

日米両国の基本をなす医療システムの違いや、その背景の理解を狙いとして手がかりとなるキーワードをいくつか挙げる。

日本：国民皆保険制、公的医療保険の普及、価格の均質性、政府の介入、価格調整。

アメリカ：市場原理の重視、個人保険、マネージド・ケアシステム。

### ②直面する課題の例－エイズ問題と高齢化

エイズ問題と高齢化を例として取り上げ、これらの問題解決において日米が双方より学ぶことが有用であると説明した。日本のエイズ感染の状況はまだアメリカほどの広まりは見せていないが、積極的な予防対策が実施されていないのが現状である。今後は感染者の増加が頭打ちの状態にあるといわれるアメリカの予防対策をより学んでいくべきであろう。

高齢化に関しては、アメリカにおける進行は日本に比べ遅い。しかし近い将来、ベビーブーム世代が高齢者層に突入することにより、より大きな高齢化の波が訪れ、その及ぼす影響はより大規模なものとなる。高齢化に対する意識に関して、アメリカは日本から学ぶものがある。例えば個人の貯蓄率を比較すると日本に対するアメリカは著しく低く、「老後への貯蓄」という考えもあまり浸透していない。現行のままでは高齢者への社会保障は資金的に成立が危うくなり、破綻も予想される。従ってアメリカの低貯蓄率は極めて危険な状態と言えよう。また、介護人員の不足や、労働力の不足も考慮しなくてはならない重要な課題である。

### ③互いから学ぶ－解決のための提案

上に挙げた例について問題解決のための具体的な提案をいくつか取り上げた。

エイズ：教育の普及、AIDS患者への関心を高める。そのためのカリキュラムの改革、ポスター等の広告、マス・メディアのより積極的な利用など。

高齢化：介護人員の不足解決のために学生のボランティア制度を整える、移民労働者の受け入れ、家庭での介護負担を減らすためのデイケアシステム等の充実。

互いの国から学ぶことの重要性は言うまでもないであろうが、この1ヶ月間を通じて実感したことは、自国の医療制度に関する理解不足であった。制度の複雑さや説明不足にもその一因はあるかもしれないが、これまで取って知らずともしなかつた私たちの姿勢にも反省点がある。両国において更なる医療の質の向上を図るためには、各人の医療に対する関心を高める必要がある。特に代替医療や緩和ケア医療などの新しい取り組みの受け入れは、今後高齢化が進むにつれますます増える傾向にある慢性的な疾患への対策として役立つであろう。フォーラム発表などを通じて、少しでも多くの人々がこれら人口と医学に関する諸問題に関心を抱くようになることが私たちの願いである。



## 環境問題

### Environmental Issues

#### テーブルメンバー

- 今井真琴：同志社大学経済学部  
 須賀川朋美：慶應義塾大学法学部  
 西平奈々子：青山学院大学文学部  
 原田曜平\*：慶應義塾大学商学部  
 Christine Ely：University of Missouri  
 Shira Fisher：Harvard University  
 Aindree Sircar\*：University of Maryland  
 Colin Warner：Stanford University  
 \*はコーディネーターを表す



#### テーブル設置当初の目標

このテーブルでは日本とアメリカが直面している最も差し迫った環境問題を取り上げ、それらがどのように両国に影響を与えるかを議論することを目的とした。日米両国がそれぞれの立場に基づいて環境政策を主張している側面もある、という現実を目を向けながら、いかにして日米が将来の環境に対してよりよい政治的、経済的、社会的決定を行うことができるかを明らかにしたいと考えた。

#### スケジュール

＜本会議前の準備活動＞

7月3日 慶應義塾大学商学部教授 和気洋子氏による勉強会

＜本会議中＞

テーブル 1・2	須賀川朋美：“Environmental Management in Japan and in the United States”
テーブル 3・4	Christine Ely：“Global Warming” 今井真琴：“Japan’s Domestic Responses to the Climate Change” Shira Fisher：“Money and Science”
テーブル 5	Colin Warner：“The Implications of Endocrine Disruptors for Human Health” 西平奈々子：“The Action for the Brighter Future”
テーブル 6	Aindree Sircar：“An Analysis of the Effectiveness of the Regulations over the Chesapeake Bay and Tokyo Bay”
テーブル 7	原田曜平：“Toward the Conservation and Sustainable Use of Biodiversity”
テーブル 8	札幌市役所廃棄物団地フィールドトリップ
テーブル 9・10	支笏洞爺国立公園フィールドトリップ
テーブル 11・12	北海道大学リサーチデー
テーブル 13・14	IGES（地球環境戦略機構）へのフィールドトリップ
テーブル 15	JICA（国際協力事業団）へのフィールドトリップ
テーブル 16	フォーラムに向けての準備
Forum 準備	プロダクトの最終構成

## テーブルの流れ

<本会議前の準備活動>

●7月3日 慶應義塾大学商学部教授 和気洋子氏による勉強会

環境テーブル日本側メンバー4名で和気教授を訪れ、環境問題全般に関してのお話を伺った。環境と経済との密接な結びつきを強調されていた。予定していた時間を大幅に越えての大変有意義な勉強会であった。

<本会議>

<テーブル1・2> ペーパー発表1

日米両国の環境問題の歴史と政府の対応について。始めに、日米の学生が議論を行う際の土台づくりとして、日米双方が取り組んできた環境対策、また環境理念を紹介した。論文によって、日本と米国が経てきた環境問題の歴史の相違が、現在の環境政策及びその理念の違いにつながっていることが示された。日米の違いを確認した上で、環境問題とは二国間という枠組みの中で限定して語ることでできない問題であり、アプローチの違いは存在していたとしても、長期的に住みよい環境を作るというゴールは、ほとんどの国によって共有されていることが再確認された。地球規模で取り組まなくてはならない課題として、環境問題そのものを解決するための政策はどうあるべきかという議論に発展した。環境問題への対処として、政府、個人、社会的団体(NGO等)といった各レベルのアクターが、異なる手法で環境対策に取り組んでいることを話し合った。更に、環境問題に対処するには、既存の社会構造のといった経済的な手法を使用した短期型解決策と、人々の環境認識の変革し、社会構造を少しずつ変えていくという長期的な解決策の双方が必要であることが議論で確認された。

(須賀川)

<テーブル3・4> ペーパー発表2・3・4

地球温暖化の全般的知識、COP3(気候変動枠組み条約第三回締約国会議)の内容についての説明を担当。(Ely)

COP3の取り決め内容を受けて日本の環境政策とその功罪について。(今井)

主に米国政府のCOP3に対する態度について。(Fisher)

三者による発表後のディスカッションは、日本、アメリカ政府の対応策についての検証から、国際的取り組みとして導入される排出権取引についての是非にまで発展した。

<テーブル5> ペーパー発表5・6

「環境ホルモン」を扱った日米双方の参加者が合同で一つの発表を行った。環境ホルモンは日本でここ数年注目を集めている問題であるが、一方アメリカでは活発な議論は行われていないようだ。従来の環境問題とは異なり、人間の体内機能について知識が少ないと問題点が見えてこないため、この発表では基礎知識を確認する「検証」の時間を多くとった。我々の体内の内分泌系システム、すなわちホルモンの働きについての説明の後、環境ホルモンの具体例(DES、DDT、ダイオキシンなど)を織り交ぜながら人間・動物への悪影響について考えた。「創造」の部分では、企業が、自社が生産している恐れのある環境ホルモンに対して、どのような責任ある行動をとるべきかということに着目した。商品に安全ラベルあるいは成分表などを表示し、消費者に情報公開を行うべきという提案が出された。(Warner、西平)

<テーブル6> ペーパー発表7

水辺の保全に関する発表。東京湾とアメリカ・メリーランド州に位置するチェサピーク湾の保護・管理体制の効果・有効性を軸に、水辺の保全について話し合った。水辺は生態系を守る側面と商業機能を兼ね備えている。よって水辺の保護が十分に行われていないと生態系のバランスが崩れ、動植物の数が異常に増加・減少し、あらゆる産業に支障をきたすことになる。我々の提案として水辺の保護を積極的に行っている企業、自治体、学校などに対して報酬を与えるということが挙げられた。その報酬は水辺の保護を持続させるために使用されることが前提である。(Sircar)



〈テーブル 7〉 ペーパー発表 8

生物多様性に対する日本政府の国家戦略とその問題点について。生物多様性についての意識、悪化の影響、現在とられている政策等を整理し、認識を深めた。また多様性は日本よりもアメリカによく普及されている問題意識であることにも注目した。(原田)

〈テーブル 8〉 札幌市役所廃棄物団地フィールドトリップ

産業廃棄物、特に建設系廃棄物の不法投棄、不適切処理の防止と札幌市の埋立地の延命を目的とし、減量とリサイクルを推進するために建設した産業廃棄物の中間処理施設群を訪問した。まずリサイクルセンターの歴史、システム、概要等の説明を受け、実際に建設系廃材リサイクルセンター、廃コンクリート再生処理施設、資源物選別施設を見学して回った。ここでは最大限効率よく循環させており、次世代における都市の見本、企業のゼロエミッション計画(各種廃棄物をゼロにしようという計画)の先端を感じさせられる光景であった。

〈テーブル 9・10〉 支笏洞爺国立公園へのフィールドトリップ

環境問題を考える時に忘れてはいけないキーワードがある。それは「自然」である。自然に触れ、さらにそれがどのように保護されているかを検証するために支笏洞爺国立公園へと出かけた。支笏湖は札幌市からバスで 1 時間 30 分の所に位置し、湖の周囲約 41 キロ、そして秋田県の田沢湖に続き、日本で二番目に深いカルデラ湖である。はじめに支笏湖ビジターセンターを見学し、支笏湖の概要を知り、その後ボランティアスタッフの方にバード・ネイチャーウォッチングに連れて行っていただき、ツバメの巣、湖畔近くにある珍しい葉を持つイチョウの木などを紹介していただいた。また私たちは水質汚染や公園内のゴミ問題についても興味があったため、そのことに関しても積極的に質問をした。昼食後は支笏湖に面している野鳥の森を散策したり、実際にボートに乗って湖の水質を確認した。今回のフィールドトリップで学んだことは自然の雄大さ、自然が我々に与える安らぎである。更にフィールドトリップ前日に生物多様性問題について皆で考えていたため、国立公園内における生態系の保護の重要性を再確認した。

〈テーブル 11・12〉 北海道大学リサーチデー

インターネットを使って、今回扱った三つのトピック(地球温暖化、内分泌攪乱物質、生物多様性)を国・ビジネス・NGO・個人レベルの各方向から検証していった。具体的にどういった政策が行われているか、企業や NGO はどういった活動をしているのか等をブレインストーミングする形でリサーチを進めた。また、北海道大学学生の、環境に対する意識調査を昼休み前後に行い、個人レベルでの意識の実態を掴むよう努めた。

〈テーブル 13・14〉 IGES (地球環境戦略機構) へのフィールドトリップ

ジャパン・プレスセンタービルにある IGES の東京事務所で、副所長代行(当時)である松下和夫氏の講演を伺い、議論を行った。講演は、温暖化問題を解決する際に IGES が掲げる 6 つの戦略研究プロジェクトの説明を中心に行われた。これらの研究が焦点を当てる 6 つの項目は、気候変動、都市環境管理、森林保護、環境教育、環境ガバナンス、新開発パターン(ニュー・ディヴェロップメント・パターン)である。6 つ目の新開発パターンでは、温暖化のみならず、環境問題を解決するためには、新たな社会構造が必要であることが強調された。しかし、社会構造の変革とは段階を経て長期間にわたって行われるものであり、そのためには私たちの認識の変革が不可欠であると再確認した。議論は、環境教育のあり方が中心となった。松下氏は、いくつかの具体例を挙げつつも、環境教育に関しては、何を、誰に、どのように教えるべきなのかという質問に明確に答えるのは困難であり、それは、問題の複雑性と規模の大きさによるものであると説明して下さった。

〈テーブル 15〉 JICA (国際協力事業団) へのフィールドトリップ

新宿にある JICA 本部を訪問した。日本の発展途上国に対する援助規模、日本の ODA 学などを通して、JICA の役割を学んだ。JICA は主に人材交流を通して技術・知識の交換・共有を行っている。JICA の環境問題への取り組みの一例として、インドネシアにリサーチセンターを建設し、インドネシアのさらなる技術・研究革新に貢献していることを紹介して下

さった。また、JICA が現在、途上国が経済発展を重要視しているため、環境政策を先送りしているという問題を抱えていることを知った。一時間という短い時間ではあったが、非常に有意義なフィールドトリップであった。

＜テーブル 16＞ フォーラムに向けての準備

最後のテーブルセッションである。我々のディスカッションの集大成であるフォーラム準備を進めるため、発表の内容を考える班と渋谷にある地球環境パートナーシッププラザでリサーチする班とに分かれ、活動した。

## 考察

アメリカ側実行委員長、かつ、環境問題テーブルコーディネーターであった者が病気のために急遽参加不可能となった。また、このテーブルには専門的に環境問題を普段から学んでいる学生がいなかった。そして、事前活動においてアメリカ側とのコンタクトもうまくとれていなかった。つまり、我々のテーブルは最初から、テーブルの方針を立てる上で、また、テーブルで議論を重ねて行く上で、非常に困難な問題を抱えていた。当然、手探り状態で議論は進んでいった。

以上の経験から思ったことは、まず、環境問題や人口と医学のような専門的知識を要するテーブルを設置した場合、それを専門的に学んでいる学生が数人いる必要があるということだ。人口と医学テーブルは、医学部の学生がいたので、少なくともテーブルの方針を決めるスタート地点では環境テーブルよりも順調であった気がする。

次に、「環境問題テーブル」「人口と医学テーブル」両テーブルと「国家・国益の視点」を重視する本会議テーマとの間のギャップである。これら二つのテーブルはテーマと密接にリンクしているとは言えず、よって必然的に他のテーブルから浮いた状態になってしまった。つまり、全体テーマを越える、もしくははずれる可能性のあるテーブルを設置する場合は矛盾解決のために全体テーマを再考しなければならないということである。

最後に前述の二つと矛盾するようではあるが、たとえ専門性に欠如していても、学生同士が集まって一生懸命議論すれば、それなりの結論は出るということである。それが日米学生会議の魅力かつ問題点であるとも言えるのだろう。

## プロダクト

「環境問題」という非常に膨大で、困難な問題に取り組むために、まず現在注目されている以下三つの大きな課題に焦点を当て、検証した。

①地球温暖化 ②環境ホルモン ③生物多様性

それぞれの問題を調べていく過程で私たちは政府、NGO、企業、そして一般市民の間で環境の基礎知識、環境問題に対する取り組みなどの情報交換がうまく進んでいないことに気がついた。

今後、環境を守りつつも持続可能な開発を進めるために、我々は今ある膨大な量の知識を整理し、必要な情報が瞬時に入手できる環境問題のデータベース作りを提案する。更に学校や企業、地方自治体の環境教育の導入を提案し、人々の環境に対する意識が高まり、データベースがますます活発に利用されることを期待する。



## オフィシャルメモリー Official Memory

### テーブルメンバー

金子彰一郎：法政大学法学部  
 木田悟史：慶應義塾大学環境情報学部  
 嶋田浩子\*：慶應義塾大学文学部  
 矢野こずえ：筑波大学科目等履修生  
 Tori Barber：Wesleyan University  
 Courtney Crean：Georgetown University  
 Eiko Maruko：Harvard University  
 Athena Pantazis\*：University of NC,  
 Chapel Hill

\*はコーディネーターを示す



### テーブル設置当初の目標

「検証そして創造へ」という第51回の総合テーマに対し、私たちのテーブルでは、歴史を今までどのように語ってきたか、そしてこれからどのように語り継いでいけばよいか、という二つの点から取り組んだ。前者は、資料を使って過去の「語り方」を検証し、後者に関しては、教育やメディアのあり方を具体例として、国が歴史を語るとはどのようなことか考えていくことを目指した。

また、近年はメモリーブームと呼ばれているように、記憶や歴史に関する様々な議論が展開されているが、このような状況がなぜ今起きているのか、ということを考え、「現代の心理」を探ることも目標とした。

### スケジュール

<本会議中>

テーブル 1	テーブルの目標確認
テーブル 2	矢野こずえ：“Globalization and Its Effect on Official Memory”
テーブル 3	Eiko Maruko：“Remaking History: The Pacific War in Japanese Historical Memory”
テーブル 4	Athena Pantazis：“Internal Official Memory in the United States”
テーブル 5	木田悟史：“Recognizing the Atomic Bomb”
テーブル 6	広島勉強会に向けて準備活動
テーブル 7	Tori Barber：“Battling A War Within: Amerasians in Japan”
テーブル 8	Courtney Crean：“The First Nixon Shock and Its Effects on Japanese-American Relations”
テーブル 9・10	北海道開拓記念館へのフィールドトリップ
テーブル 11	金子彰一郎：“History Textbooks and Nationalism”
テーブル 12	嶋田浩子：“Controversies over Memories”
テーブル 13・14	まとめと質問構成
テーブル 15・16	横須賀米軍基地へのフィールドトリップ
Forum 準備	12日：東京大学教育学部藤岡信勝教授勉強会 昭和館及び靖国神社見学 13日：日本経済新聞伊奈久喜氏勉強会

## テーブルの流れ

近年は「メモリーブーム」と呼ばれ、教科書論争を始めとする歴史や記憶に関する議論が盛んであり、また、世界各地で歴史博物館やモニュメントが建造されている。私たちのテーブルでは、まず、なぜ今このようなことが話題になるのか、国という視点から歴史を語るといのはどういうことか、という地点からスタートした。日本側参加者は、参加者からの提案で『グローバルな記憶、ナショナルな記述』（「思想」1998/8）、『鎮魂と祝祭のアメリカ』（青木書店 1997年）を読み、本会議に臨んだ。

最初に矢野が「グローバル化とそのオフィシャルメモリーへの影響」と題して発表を行った。このペーパーは、オフィシャルメモリー、すなわち「国」が語る歴史、が近代国民国家の発展と密接な関係にあること、そして現在グローバル化の進展とともに国民国家が危機にさらされ、オフィシャルメモリーの在り方の問題も浮上してきたことを示した。

続いて Eiko Maruko が「歴史を作り直す：歴史的記憶の中の太平洋戦争」という発表の中で、オフィシャルメモリーの限界を示し、それに代わる「集合的記憶」という概念を提案した。そこで私たちは、オフィシャルメモリー、集合的記憶、個人的記憶の三つの概念を定義付け、後のディスカッションの土台とした。（定義に関してはプロダクトを参照）

次に Athena Pantazis が「アメリカのオフィシャルメモリー」について発表した。ここでは、アメリカがいかに政治行動を正当化しているかという点が明確に示された。それと同時に、オフィシャルメモリー自体が時代に応じて変遷していることが話し合われた。例えば、戦前プロパガンダが盛んな時にはオフィシャルメモリーの影響が強く、また 60 年代以降マイノリティーが権利を主張していく過程においては、むしろ反オフィシャルメモリーを求める傾向が強い。さらにこれは矢野の発表で示されたことだが、近年はグローバル化との絡みで、反オフィシャルメモリーへの反動が出てきている。例えば、『戦争論』（小林よしのり著）のような本もこの例の一つと言える。

大まかな抽象論が済んだところで、具体的な個々の事例を取り上げ、オフィシャルメモリーについて考えることにした。

まず、木田が「原爆への認識」として、スミソニアン博物館のエノラゲイ展について発表した。ここでは被害国と加害国との関係が話題となった。次に、Tori Barber から一人の「アメラジアン」（アジア+アメリカ）が、自分の個人的な記憶をいかに人々に認知させ、それを集合的記憶の一環としていくかという過程を発表した。Courtney Crean は「ニクソンショック」を取り上げ、新聞が政府の論調と同調し、世論を変えていく様子を示した。金子は日本の「歴史教科書とナショナリズム」を取り上げ、いかに記述するべきかということ論じた。また、これらの国際関係への影響も議論された。嶋田は「記憶をめぐる論争」というペーパーから、公的な博物館、記念碑が誰のために、何のために建てられるべきなのか、という問題を東京都平和祈念館と昭和館の例を取り上げ、発表した。

フォーラムの発表では、総括としての抽象論と、具体例として日米両国による第 2 次世界大戦の記述の仕方を分析した。更に、集合的記憶の重要性とオフィシャルメモリーそのものの存在に気づくことこそ、私たちが「国」というバイアスがより少ない歴史観を持つ上で重要だということが話し合われた。

実施研修では、藤岡教授、伊奈氏に歴史の認識の問題について何うことができ、非常に興味深かった。藤岡教授は、歴史教科書の問題を取り上げ、愛国心教育の重要性を説かれた。また、伊奈氏はジャーナリストの視点から、外交と歴史認識の問題について話された。両先生とも、『ザ・レイプ・オブ・ナンキン』について言及され、参加者一同、改めて歴史認識が社会の中で大きな問題となっていることを実感した。



## 考察

まず、私たちにとって一番の問題は、オフィシャルメモリーという新しい概念を定義づけることであった。これは時代や地域と共にその意味も異なってくるので、全員が納得できる定義を得るまでには時間を要した。しかし、一度方向性が決まると、中身の濃い議論が展開され成果があったと自負している。

苦労したことは、歴史とは何か、私たちは何を歴史から学び取っていくのか、ナショナルアイデンティティーは必要か等、短期間では答えが出せない問題に取り組んだことだ。

意外だったのは、最終段階で明らかになると予測されていた「現代の心理」というものが、早い段階で、グローバリゼーションとの関連が指摘され、明確になったことである。この指摘によって、私たちが最終的に考えていかなければならないのは、グローバリゼーションと国家の問題である、という目標が定まった。

当初、このテーブルでは、感情も入りこんだ議論が展開されると思っていたが、むしろ冷静で、どのような問題に対しても、学術的に取り組めたことを非常に誇りに思っている。またテーブルメンバー個人が問題意識と知識を持って議論に参加したことで、議論が大変充実し、全員で一つのものを創り上げていったという満足感がある。

## プロダクト

このテーブルでは、過去とは現在の産物である、記憶とは現在の状況に基づいて形成されている、という前提に立ち、現代と記憶の問題を検証した。まず、議論を進める上で、記憶を三つに分類する作業から始めた。一つ目の「オフィシャルメモリー」とは過去の政治的行動を正当化するために創られた、人為的、政治的な記憶を指す。二つ目は、ある集団によって共有される「集合的記憶」。そして個人的な体験に基づく「個人の記憶」がある。これら三つの概念の関係、あるいは記憶全体と歴史の関係が非常に複雑であるために、上記の概念の明確な区別はつけにくい。

しかし、オフィシャルメモリーに関してははっきりと言えることは、これが国民国家の成立やナショナルアイデンティティーの獲得と密接な関係にある、ということである。また、あらゆるメディアの発達も、同じ記憶を普及させるという点において重要な要素である。

更に、このオフィシャルメモリー、すなわち現公的機関が過去をいかに評価するかということ、国内外に大きな影響をもたらす。国内では、教科書論争や平和祈念館論争のように、何をいかに公的に記憶していくのか、そして個人の記憶はどう語り継がれていけばよいのか、という問題がある。そして議論は、これらの教育機関が、ナショナルアイデンティティー養成にどのように関わっていくのか、そのアイデンティティーと私たちはどのように付き合いしていくべきなのか、ということにまで及んだ。国外の問題では、各国がそれぞれのオフィシャルメモリーに基づいて、歴史的事件を記憶しているため、各国民間で歴史認識が異なり、これが相互の不信感を招いていることが挙げられる。例えば日米関係において、原爆投下の是非にはもちろんだが、テーブル内では原爆の象徴するものについて話題になった。アメリカ人学生に一番よく知られている「サダコ」の話は、日本人にとって数多い悲劇の中の一つの話題に過ぎず、ここに重点を置くアメリカの教育に対し、少なからず疑問が生じた。またアメリカ側からは、広島資料館やフィルム館の根底に強固な反核のメッセージが流れていることに対して、プロパガンダではないかという意見が出た。

さて、私たちは、これらの認識のギャップをいかに埋めていけばよいだろうか。集合的記憶がオフィシャルメモリーに取って代わる、というのが一つの結論だ。例えば原爆投下に関して、その是非を問うのではなく、人類の痛みとして捉える集合的記憶に重きを置くということだ。

しかし、国家が存在する限り、オフィシャルメモリーは存在し続けるとされるし、また、それによってナショナルアイデンティティーを形成しようとする動きも止まないものである。

今、私たちが言えるのは、まずオフィシャルメモリーの存在に気づき、そしてそれを批判的に見る目を養うべきであるということだ。現代にはオフィシャルメモリーを自由に解釈す

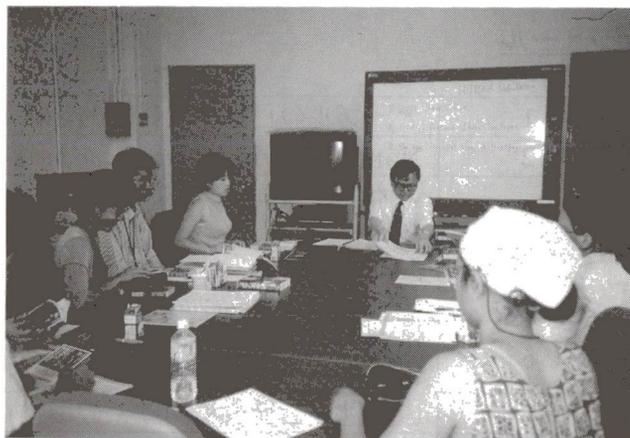
る自由がある。私たちの身の回りにあるもの—政府の公式見解から国立博物館、教科書まで—はオフィシャルメモリーの文脈の上にあることを意識すれば、私たちは、国という枠組みだけにとらわれずに歴史の検証方法を模索できるのではないか。そしてそれこそが、個と国、国と国の新しい関係を創造する際の土台となるのではないだろうか。



伊奈氏による勉強会



横須賀米軍基地訪問



藤岡教授による勉強会



米国大使公邸にて



## 歴史的事実と利害関係

### *Impact of Historical Events on the Relationship*

#### テーブルメンバー

大木愛\*：都留文科大学文学部  
 庄子薫：聖心女子大学文学部  
 田中耕一郎：富山医科薬科大学医学部  
 由尾瞳：Yale University  
 Naila McKenzie：Harvard University  
 Nancy Malvin\*：Howard University  
 Eileen Ryan：University of NC, Chapel Hill  
 Jessica Wolf：Harvard University

\*はコーディネーターを表す



#### テーブル設置当初の目標

日米間の主要な歴史的出来事を「検証」することを通して、そこから普遍性を見出す。そして、その見出された普遍性から現在の、そして未来の問題において今後の日米関係が一体どうあるべきかを考察する。21世紀に向けて、揺るぎない安定した関係を築くために必要な両国の未来像を打ち出すことを最終目的とする。

#### スケジュール

<本会議中>

テーブル 1	テーブルの目指す最終目的を確認
テーブル 2	Nancy Malvin：“ <i>Japan and the U.S.: The Beginning of the Relationship</i> ”
テーブル 3	大木愛：“ <i>The First Strains in the Relationship between Japan and the U.S. from 1904 to 1914</i> ”
テーブル 4	Jessica Wolf：“ <i>The Road to Pearl Harbor? : Was an Armed Conflict between the U.S. and Japan Inevitable?</i> ”
テーブル 5	田中耕一郎：“ <i>Healthiness in Our Society: Could We Have Avoided the Pacific War?</i> ”
テーブル 6	広島勉強会発表に向けての準備
テーブル 7	Eileen Ryan：“ <i>Japan-United States Relationship and the Cold War</i> ”
テーブル 8	庄子薫の発表：“ <i>The Difference of Value from Nixon Shock</i> ”
テーブル 9・10	北海道開拓記念館へのフィールドトリップ
テーブル 11	由尾瞳の発表：“ <i>Vietnam War</i> ”
テーブル 12	Naila McKenzie：“ <i>Japan- America Relations in the Post- Cold War Era</i> ”
テーブル 13・15	テーブル 1～12 までの総括
テーブル 14	国際基督教大学教養学部 John Maher 教授勉強会
テーブル 16	横須賀米軍基地へのフィールドトリップ
Forum 準備	プロダクトの最終構成

## テーブルの流れ

〈テーブル 1〉 テーブルの最終目的を確認

今後、1ヶ月のセッションで結果的に何をプロダクトとして残したいのかを話し合う。また、各議論の終わりに評価シートを作成してその時間に扱われた歴史的出来事について随時、検証し直し、確実に消化していけるように努めることを決定。この作業は後に、最終的なプロダクトを作成する過程で役立った。

〈テーブル 2〉 ペーパー発表 1：ペリー来航について

日米両国がそれぞれ開国当時、どのようなアジェンダとお互いに対する印象を持っていたのかを議論した。米国は「明白な運命 (Manifest Destiny)」という外交上のキーワードを掲げてはいても実際は貿易や石炭、漂流民の対応などが目的であった。日本は恐怖を抱いていた一方で西洋の技術に関心があった、ということが結論として挙げられた。(Malvin)

〈テーブル 3〉 ペーパー発表 2：日露戦争後の緊張関係について

それぞれ対外戦争を経験し、軍事力・経済力ともに肩を並べるようになると初めて、日米は互いをライバルとして認識するようになる。日本が当時抱えていた複雑な状況—日露戦争による優越と従来から存在する欧米に対する劣等という二面性—は次第に太平洋戦争へと矛先を向けたナショナリズムへつながっていった、という結論に至る。(大木)

〈テーブル 4〉 ペーパー発表 3：太平洋戦争導入について

太平洋戦争直前における日米関係をテーマとし、実際の外交官、政府レベルでの **misunderstanding**、**miscommunication**、**misinformation** に着目して、それぞれの項目について、それは克服できないレベルのものであったかを検討した。(Wolf)

〈テーブル 5〉 ペーパー発表 4：太平洋戦争軍部台頭について

両国における国民性の特徴と物事の判断における影響を議論した。米国については介入と孤立の二つのバランスとこの時代の理性的判断を評価した。日本においては、地政学的影響に起因する現実主義と強烈な国粋主義の二つの側面を論じた。(田中)

〈テーブル 6〉 広島勉強会のための準備

この日の夜に行われる全体での広島勉強会で原爆について基本的事実を発表するため、準備を行う。インターネットからの情報、持ち寄った本、雑誌、新聞の記事などからレジюмеと発表の準備を整えた。どのような経緯で投下に至ったのか、どのような被害があったのかなどの歴史的経緯を全体勉強会にて発表する。

〈テーブル 7〉 ペーパー発表 5：冷戦中の日米関係について

主に戦後の民主化に焦点を当てて議論をした。論点は、なぜ日本は突如流入してきたアメリカンデモクラシーを何の疑問も抱かずに受け入れたのか、ということであった。日本は一般市民のレベルと政府レベルとの二つの側面から、国民の活力を復活させるのにアメリカンデモクラシーを受け入れることは必要不可欠であったという結論へ至る。(Ryan)

〈テーブル 8〉 ペーパー発表 6：ニクソンショックについて

繊維交渉とニクソンショックを例に、日米間における外交交渉スタイルの違いについて議論した。論点となったのは、日米間における認識・文化の相違である。互いの文化が全く異なる二国が交渉する際、互いの間に生じてしまう様々な衝突を少しでも減らすために、日本は国際社会では意見の主張は明確に行うべきであるし、また交渉する両国が互いの文化的背景を学んでいく努力をしなくてはならないという結論に至る。(庄子)

〈テーブル 9・10〉 北海道開拓記念館へのフィールドトリップ

北海道開拓におけるアイヌ民族と「日本人」の関係が、アメリカ大陸の開拓における移民とインディアンの関係と共通点があるのではないかと理由から、北海道開拓記念館へのフィールドトリップを行った。

〈テーブル 11〉 ペーパー発表 7：ベトナム戦争下の日米関係について

ベトナム戦争におけるアメリカの目的をまず議論した。対外的には「明白な運命」と「ドミノ理論」、そして実際には「信頼性 (Credibility)」がその目的であると意見が一致した。ま



た日米間の理解に大きな違いがあることがわかった。アメリカでは当事者として戦争の悲劇、政治的矛盾などに焦点を当てられるが、日本ではベトナム戦争を沖縄返還と結びつけて考える。両国の焦点の位置は異なっても、ベトナム戦争は日米関係において、また戦争ということに関する、重要な転機であるということがわかった。(由尾)

〈テーブル 12〉 ペーパー発表 8：冷戦後の日米関係について

今まで振り返ってきた歴史的事実の分析の総まとめをして、現代における問題を様々な角度から見つめた。特に、日米関係における力関係、国際的貢献を推測したこれらを考えることにより、それぞれの国の外交方針と内部の願望における矛盾が見えてきて、この「矛盾＝Contradiction」が他の面においても適用できることがわかった。(McKenzie)

〈テーブル 13・15〉 テーブル 1～12 までの総括

テーブル 12 までに全てのメンバーの発表が終了したため、ここからは総合テーマの「創造」の部分へと移っていくことになる。その第一段階として、今まで検証してきた日米間の歴史を今度は縦に見る作業を行った。140年の歴史を 1853-1868、1868-1929、1930-1945、1945-1960、1960-1989、1990年代の 6 つに分類し、それぞれの時代において日本側、米国側がどのような外交政策をとってきたのかを検証した。

〈テーブル 14〉 国際基督教大学教養学部 John Maher 教授による勉強会

言語学の視点から鎖国時代、18、19世紀、そして 20世紀における日本の外交を考えた。時代とともに日本は様々な西洋の影響を受けて、理想主義から国家主義へと動いていった。現在はそこから更に Culturalism (文化主義) へと移り変わっている。これは一見お互いの文化を尊重するという崇高な理念に思えて、実は文化間の差を強調し、より異文化同士の差異を大きくしてしまうという厄介なものである。グローバル化が進む今の時代、私たちが気をつけなければならないことは、個人の行動や習性を「文化」という言葉に縛りつけずに受け入れていくことである。

〈テーブル 16〉 横須賀米軍基地フィールドトリップ

(安全保障問題テーブル p.15 参照)

## 考察

これらのテーブルの議論、全ての過程を通じて、日米間の歴史における代表的な出来事に様々な視点から検証のメスを入れることができた。時代も出来事も主たるものをバランスよく取り扱うことができたのではないだろうか。これは日米の歴史を 140年という大きな枠として捉えて検証しなければならないこのテーブルにとっては、効果的であったと思われる。

「検証」においては、日米両国が今に至るまでの時代の流れを感じる事ができた。

この日米学生会議参加者の多くは政治、経済、法律に関連する学部在籍者で、とすれば議論が偏ってしまいがちである。しかし、このテーブルでは参加者のメンバーの学部を見ても国際政治・経済学部在籍者もいる反面、文学・医学・Religious Studies (神学) など様々な視点が揃っていた。このように、文化に対し異なる潜在的感觉を持って出来事や時代を検証できたことは、このテーブルの誇るべき点である。

日米の間でも国としてのあらゆる要素が相互に関わってくる「外交」をテーブルディスカッションの中心軸に据えたことは正解であった。日米間における差異を外交に対する議論を通じて認識できたことは、貴重な体験であったと思われる。今後は更にこの体験を各自の分野で活かしていくことが残された課題である。この残された課題は学生会議を終了してからこそできることであり、長い時間をかけてようやく解決し得ることである。その努力を惜しまぬことを私たちは約束する。

## プロダクト

日米関係は、様々な国が国益を意識しながらそれぞれの国際的な役割を担っている構造の中に、その一端として埋め込まれている。これは現在の関係と同様に歴史についても言えることである。

### I. 外交スタイルの相違

日米の異なった外交スタイルの相互理解が、より確固たる関係を促進するのに必要であるということが、両国間の歴史的衝突の分析からわかる。日本では直接的な表現があくまでも最低限に抑えられる。反対にアメリカ人は直接表現により重きを置いており、間接的なことを誠実さの欠如や回避とする。この教訓は、私たちにそれぞれの国の異なった外交スタイルを考慮に入れなくてはならないことを教えている。私たちはどちらの外交スタイルが優れているのかを決定するのではなく、両方のコミュニケーションのとり方を等しく尊重すべきである。

### II. 国益

- ①アメリカ側の見解：民主主義、資本主義、「明白な運命」のイデオロギー等がアメリカの国としてのアイデンティティを示している。アメリカは自身を「世界の警察、世界の平和維持者」として超大国のイメージを植え付けてきた。このイメージのもとでアメリカはここ 20 年間、国際平和維持におけるリーダーであり続けたが、それを行うのはアメリカだけではなくなくなった。
- ②日本側の見解：日本の国益は歴史的に、特にアメリカに関わる出来事に関しては受身であった。しかし、この傾向は日本が経済大国としての潜在性を発見してから徐々に変わりつつある。グローバル社会への安定した協力において日本は今、完全に独立し、アメリカやその他の国際的な共同体と平等なパートナーシップを築くことを切望している。
- ③互いへの見解の変化：日米関係は 140 年にわたって存在している。この関係の中で日本は被教導者、パートナー、好敵手、敵国と循環してきた。しかし、これらの循環を経た後、日本は経済大国へと急速に変化し、アメリカによる見方も被保護者から経済的なライバルの一国へと変化しているのである。

### III. 安全保障

第一次大戦以後の国際連盟に見られるように、アメリカは国際秩序を形成しようと努力してきた。第二次世界大戦後、国際連合が新しくよりよい国際秩序を形成するために設立されるが、アメリカはこの国際連合にも主要強国として貢献する。

一方、アメリカは占領において日本を非軍事化した。この時点で日本は国際安全保障に貢献するための財政力、軍事力を持ち合わせていなかったため、国際秩序の形成に日本が貢献するようになるのは更に後のことである。日本が安全保障上、アメリカの核の傘下にあるということが日米関係において重要である。冷戦体制崩壊以後、日米ともに国際社会の中で貢献するために安全保障上のより強い相互作用を求めている。

### IV. 総論

二国間関係は、国際社会の中で展開される多くの関係の一部分を担っている。また、一国の役割はその国の国益を反映するものである。今回の議論での日米間の刻々と移りゆく関係と国益の歴史についての検証から、私たちは確固たる関係を築くための効果的な方法を提言する。それは、ある国が自国の実質的な国益のみに目を向けるのではなく、国と国との繋がりがそのものの重要性を国益として認識する、ということである。この認識によって数多くの対立が減らせるであろう。万一、衝突が発生してしまっても両者は新たに関係を再構築するための強固な土台を既に持っているため、二国ともにお互いに歩み寄っていくことが可能となるであろう。



## 第 51 回日米学生会議総括フォーラム 1999 年 8 月 15 日

### 目的

このフォーラムは大きく分けて以下の三点を目的として設けられた。

#### ①各テーブルの会議成果の総括の場

各テーブルが、約 1 ヶ月間の議論やフィールドトリップを通じて学んだ成果を、発表する機会である。

#### ②第 51 回日米学生会議の総合テーマ「検証そして創造へー新たなる日米関係」再考の場

今回は二つの企画がこの目的を受けている。まずは共同宣言草案委員会（ドラフティングコミッティー）による共同宣言の発表である。各テーブルより 1 名ずつ選出された「共同宣言草案委員会」のメンバーが、各テーブルでの個々の議論を持ち寄り、総合テーマに沿って第 51 回日米学生会議の共同宣言を作成した。（共同宣言草案委員会 p.9 参照）

もう一つは講師による御講演である。フォーラムの第 2 部では武者小路教授にお越しいただき、今回の総合テーマに基づく御講演をいただいた。

#### ③外部との接触の場

約 1 ヶ月間に及ぶ日米学生会議の期間中、フィールドトリップその他の企画で会議参加者以外の方の声を伺う機会や、個人的に意見を述べる機会はあるが、日米学生会議として公式に発表する機会は非常に少ない。どうしても内にこもりがちになる日米学生会議の欠点を補うべく、このフォーラムにできるだけ多くの方に御来場いただき、「外部の目」というものに触れることを目標とした。今回のフォーラムでは日米学生会議の OB でもいらっしゃる富士銀行会長橋本徹氏に、フォーラム発表に対する御講評もいただいた。

### 当日の流れ

10:00 開会

<第 1 部> テーブルによる成果発表

10:10 歴史的事実と利害関係

10:40 人口と医学

11:10 環境問題

11:40 経済政策

昼食

13:10 ビジネス

13:40 日米安全保障条約

14:10 安全保障問題

14:40 オフィシャルメモリー

15:10 共同宣言発表

<第 2 部> 講演

15:30 橋本徹氏（株式会社 富士銀行会長）によるスピーチ

15:45 武者小路公秀教授（フェリス女学院大学国際交流学部）講演

"Japan-U.S. Relations at the Turn of Century"

17:00 閉会

## テーブルによる成果発表

### ＜歴史的事実と利害関係テーブル＞

日米の歴史を振り返るという意味で、最初に歴史的事実と利害関係テーブルの発表が行われた。これまでの日米 140 年の歴史を、外交を中心に安全保障、経済、文化など様々な側面から検証したプロダクトが発表される。そして、この検証を基盤として日米二国間の関係が今後の問題にどのように対処していくべきなのか、ということが総論として提言された。

### ＜人口と医学テーブル＞

"Health Care in Japan and the U.S.: Examining each other's systems to prepare for future challenges" 「日米のヘルスケア問題解決のための方法の両国の比較」というテーマのもと、将来のヘルスケア問題への取り組みに際し、日米が互いより学ぶことの有用性を「エイズ」と「高齢化」という具体例を用いながら説明した。

### ＜環境テーブル＞

今回環境問題の議論を進める過程で、政府、NGO、企業、そして一般市民の間での情報交換が円滑になされていないことが明らかとなった。今ある膨大な情報を整理し、瞬時に必要な情報を手にすることができるようなデータベース作りの必要性を訴え、環境テーブルによるホームページ作成を例としながら発表を行った。

### ＜経済政策テーブル＞

日米間の貿易関係の改善を目的としたサミットを開催する、といった設定のもと、スキット形式で発表を行った。

### ＜ビジネステーブル＞

ビジネスの場における文化・慣習の影響、日本のマネージメント形式、金融危機など日本のビジネスを中心とした内容について、パワーポイントを用いた効果的な発表がなされた。

### ＜日米安全保障条約テーブル＞

国際社会の中で、日本は「普通の国」と「交渉国家」のどちらを演じるべきかを中心に、日米安全保障体制の重要性を OHP を用いて発表した。

### ＜安全保障問題テーブル＞

一見とっつきにくい安全保障を楽しみながら理解してもらおうと、アメリカの Talk Show 形式での発表を行う。アメリカ国防長官、日本首相、中国代表、ASEAN 代表に擬したメンバーが「極東有事は日米にどのような影響を与えるか」という質問に基づくディスカッションを行った。

### ＜オフィシャルメモリーテーブル＞

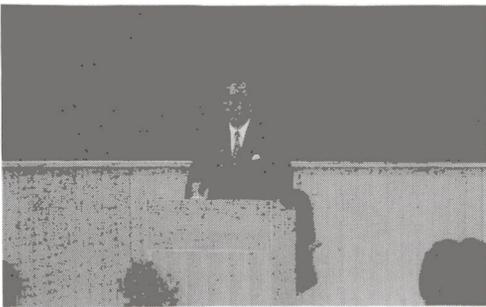
このテーブルでは、歴史的記憶をオフィシャル（公的）、集合的、私的の三つに分けた上で歴史の問題に取り組んだので、まずその定義を発表した。特に、「オフィシャルメモリー」が近代国民国家の中で創造され、流布されていく過程を具体的に検証した。最後にこれからの時代に、記憶とどのように関わっていけばよいのか、ということを示した。

### ＜ドラフティングコミッティー＞

第 51 回日米学生会議参加者が 10 年ぶりに再会する、設定のもと、スキット形式の発表を行った。（共同宣言作成からフォーラムでの発表に至るまでは共同宣言草案委員会 p.9 参照）



### 橋本徹氏（株式会社 富士銀行会長）によるスピーチ

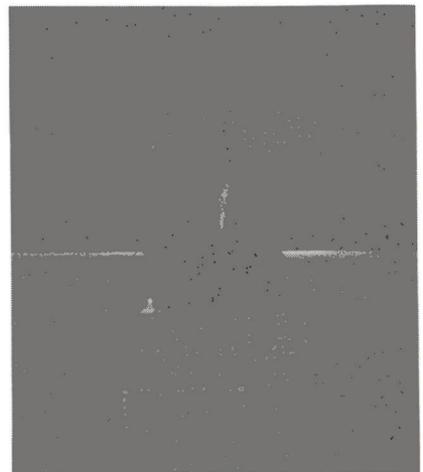


日米学生会議のOBでもいらっしゃる橋本徹氏が御自身の体験を交えながら今回のフォーラムでの発表の御講評と、総合テーマの焦点である日米関係についてのお話をして下さった。

### 武者小路公秀教授（フェリス女学院大学国際交流学部）講演

#### "Japan-U.S. Relations at the Turn of Century"

第51回日米学生会議の総合テーマ「検証そして総合へー新たな日米関係」に基づいて、日米関係の今後のあるべき姿についてお話を伺った。戦後の歴史を追いながら、日本における国際問題の焦点が日米の二国間関係から、現代のグローバルエコノミーに代表されるような多国間へと変遷していった模様が説明された。70年代に入り、従来の国際関係において排除されがちであった発展途上国の利害も、南北問題の浮上とともに、考慮していくことが緊急かつ重要な課題となった。日米両国には、限られた国家間の狭い国家関係にとらわれずに、第三世界も含めたより広い視野での問題解決への取り組みが求められている。その際のアプローチとして、人道的視点や環境保全も考慮に入れた取り組みが例として挙げられた。



### 会議参加者の声（抜粋）

田中耕一郎

まずとにかくやりとげたということに満足しています。特にテーブルに関して。議論をする上で必要な自分の語学力、知識量に対する新たな目標ができました。…ハード面に関して、特に個人的にはめったにお目にかかれない人に少しでも接することができ、その人となりを垣間見ることができて、自分なりに将来に対する心構えにも栄養をもらえたようにも思います。

ただこうしたハード面が充実している分、中身はどうなのか？フォーラムでは、テーブルによっては非常に面白いと思える発表が見られました。でも発表だけを見に来た方にとっては、結構「普通」の報告で、内輪に感じたのではないかと気掛かりです。私としては、もう少し、周りを取り込んで議論するような方法を取り入れてもいいのではないかと思います。形式的にテーブル別の報告は内部で共有してもいいですが、公開の場合は、大きなテーマを一つ決めて、聴衆に参加してもらおう。その中で、自分たちで議論してきた内容が反映されればいいと思います。

他にも、あまりにも要職にある人に会えてしまうだけに、それをミーハー感覚で喜んでしまう傾向があるように思いました。それはそれでいいのですが、個人の實力、看板、肩書きを持たない場合の自分がどのようなものであるのか、しっかり見つめ直して欲しいし、私もそうしていきたいと思います。そして、私自身も含め、見た目のカッコよさに惑わされず、しっかりものを見るようになって欲しいと思います。

## 一般参加者の声（抜粋）

- ・問題意識をそれぞれに抱いていることがわかった。
- ・内容がよくまとまっていた。学生ならではの着眼点が面白かった。
- ・各プレゼンテーションのテーマがはっきりしていて聞きやすかった。
- ・各テーブルの個性が出ていて、比較的面白かった。よく準備されていた。
- ・会議の成果が伺える素晴らしいものであった。
- ・いくつかの発表においてはテーブルの内容の導入がなかったので、外部からの参加者としては理解するのが少々難しかった。
- ・全体的に見て、盛り上がりにかけていた。
- ・日本語でのフォローアップを気遣って欲しかった。
- ・言葉の上でも内容の上でもかなりハイレベルであったので、よく飲み込めなかった。

## 考察

今年のフォーラムは、例年より多くのプログラムを一日に詰め込んだため、各テーブルの発表に与えられた時間は 20 分、という短い時間となった。1 ヶ月間の成果を限られた時間内にまとめて発表するというのはなかなか困難な作業であり、準備期間中は連日皆夜遅くまで準備に取り組んでいた。しかし、苦労したかいあって、どの発表もそれぞれに工夫を凝らした内容の濃いものになった。一方で自分自身の発表の準備に手一杯となり、「外」、すなわちフォーラムへいらした外部の方々に対する意識が不足していた点は否めない。これは「一般参加者の声」にもあった通りである。

残された課題は多いかもしれないが、私たちが当初目標として掲げた事柄は、不完全ながらもある程度達成することができたと信じている。このフォーラムに向けて準備を進めてきた参加者、実行委員、そして共同宣言草案委員会のメンバーが大いに努力をしたことを誇りに思う。

最後に御多忙中、御協力下さった橋本氏、武者小路教授をはじめ、多くの OB の方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

(小林美和子)



フォーラム会場にて（全プログラム終了後）



REPORT

英語

最前線

徹底した議論で相互理解を

——第51回日米学生会議が開催——



日米の医療問題について話し合う分科会。ホワイトボードは文字でびっしりと埋まっている

日本とアメリカの相互理解を深めるべく 日米の学生が経済や政治などさまざまなテーマを話し合う日米学生会議が今年51回目を迎えた。今回は日本とアメリカから合わせて60人が参加分科会やフォーラムを通じて 活発な意見交換を行なった

東京・渋谷区のオリンピック記念青少年総合センター。正面玄関から建物までの坂道を、益入り前の強烈な日差しに焼かれながら歩く。エアコンの効いたセミナールームに案内されて汗を拭き、一息つく。ところが室内では、外の熱気に負けないくらい熱い議論が交わされていた。

今年で51回目となる日米学生会議は、日米の相互理解を深めようと、財団法人の国際教育振興会が主催しているものだ。とはいっても、会議の企画・運営はすべて両国の大学生らの手による。会議は日本とアメリカで一年ずつ交互に開催される。去年はアリゾナ州、マサチューセッツ州、イリノイ州の3カ所が開催地。今年は東京・京都・広島・北海道の4カ所が舞台だ。今回は日本とアメリカから選考試験をパスした各30人の学生が参加。男女比はほぼ半々だ。学生たちは7月20日から8月20日までの1ヶ月間、全国を共に移動しながら、与えられたテーマについて議論を進めていく。テーマはビジネス経済、安全保障、科学技術、歴史の4部門に分かれ、各部門はさらに2つずつのテーブルに分かれる。合



日本側の実行委員会メンバー。左から副委員長の富士岡麻由さん(北海道大学経済学部)、委員長の山崎蘭加さん、広報の糸永洋三さん

計8つのテーブル、7~8人ずつのグループで分科会と称される議論が行なわれるのだ。使用言語はすべて英語。日本側の参加者には帰国子女も多い。学生会議とはいえ、議論のためにしっかりと下準備してきた人たちがほとんどで、レベルは高い。分科会で結論に達した内容は、8月15日の全体フォーラムでグループごとに発表される。

徹底した議論を分科会で

北海道から東京に移動してきたばかりの学生会議の分科会をのぞいてみた。このテーブルでは日米経済関係のあり方を議題にしていた。テーマは“Evaluating the Japan-U.S. economic relationship to shape our future”。議事進行役が

“OK, let's define 'prosperous future' as the main purpose of the bilateral economic relationship...”と言いかけると、

“Hey, but what do you mean by 'prosperous future'? That term contains a broad meaning. We have to specify the term.”

とすぐにはかのメンバーから指摘が飛ぶ。そして prosperous future についての定義が延々と続く。東京に来るまでに、各地を転々としながらすでに3週間も議論を行なってきた。疲労も溜まっているはずなのに、メンバーはみな辛抱強く、途中で議論を投げ出すことをしない。

今回の日本側の学生会議実行委員長、山崎蘭加さん(東京大学経済学部4年)

は、会議の主旨について

「まず学生として何ができるか、ということを考えてみました。(学生は)社会経験も何もないのですが、とにかく議論を徹底して実りあるものになろう、フォーラムで発表して恥ずかしくないものになろうと考えていました。アメリカ側は、『議論をしよう』というよりも『日本を知ろう』という考えで参加している人が多いので、そこでお互いのずれを感じましたが、その差も埋まってきているようですね」

と語る。学生会議の日本側の実行委員は8人。いずれも昨年の会議に参加したメンバーばかり。そこで個人が会議内容や運営方針に改善点を見出し、今回の実行委員になったという。広報を務める糸永洋三さん(慶応義塾大学商学部4年)は

「去年はあまり、マスコミや社会に対してオープンな感じがしませんでした。学生の内部にだけ閉じ込められていたような気がします。ですから、今年は外部へのPRをきちんとしてみたいですね」と話す。

■趣向凝らしたフォーラム発表

フォーラム発表当日。これまではTシャツにジーンズ姿で議論してきた学生たちも、この日はスーツ姿で緊張気味だ。

壇上に立ったのは、Security Treaty について分科会を行なったグループ。アメリカ人と日本人の学生が、日米のこれからあるべき安全保障関係を、フィールドトリップで訪れた米軍横田基地のスライドを見せながら述べる。

不安定な中国—台湾関係、不気味な北朝鮮の存在、それを守る在日米軍基地。その一方で、在日米兵が過去に起こした日本人少女暴行事件—。あらゆる面から問題を分析し、最後に

“U.S.-Japan Mutual Security Treaty should continue to play the role of dealing with instability in Asia. The maintenance of the secu-

rity alliances is essential.”

と締めくくった。

次に登場したのも安保関係を議題にしたグループ。こちらは、日本、米国、中国、北朝鮮、マレーシア各国の首脳に扮したメンバーが、テレビのトーク番組でサミットを行なうスキットで発表を進めた。各国首脳は活発に意見を述べるのに、北朝鮮の国家主席に扮した学生は一言も言葉を発さず、無表情で手を振るTV映像で目にする「例の」仕草をするだけ。会場からは失笑がもれていた。このグループも結論としては、アジアの政情不安を理由に安保関係の強化と維持を主張していた。

発表が終わった後は、日米学生会議のOBでもある富士銀行の橋本透会長がスピーチを行ない、

“I must admit that the level of discussion has quite improved since the last time I participated.”と学生たちの労をねぎらっていた。

学生会議アメリカ側の実行委員長ブレイン・ボールドウィンさん(カンザス大学を今夏卒業)は、会議に参加した感想を

“This experience has significant meaning to everyone. To bring Japanese and American students closer will foster the bilateral relationship in future.”と述べてくれた。

日米学生会議の実行委員会の顔ぶれは、一年ごとに総入れ替えされる。組織の鮮度を保ち、なるべく若い学生に試行錯誤の場を与えるためだ。新実行委員会のメンバーは、学生会議の最終日に承認される。1ヶ月にわたって、宿泊施設から、フィールドトリップの計画まで、すべてを自分たちの手で運営することは決して楽ではないだろうが、そこで得た経験は、社会に出てからの大きな糧となるはずだ。(稲垣)

■問い合わせ先

(財)国際教育振興会内 日米学生会議事務局 ☎・fax 03-3359-0563



全体フォーラムで、テレビ番組に出演する各国首脳に扮して、日米安全保障関係のあるべき姿について発表するグループ。ユーモアたっぷりの演出に、会場からは笑いも拍手が絶えない

# 第 51 回日米学生会議広島会議

## 広島会議を追う

- 京都サイトにおける事前準備活動（立命館大学衣笠セミナーハウスにて）

日本側事前準備活動：アンケート作成（7月21日）など

日米直前準備：広島勉強会（7月28日）

- ① アンケート結果調査・発表
- ② 歴史分科会メンバーによるブリーフィング
- ③ 日米学生会議参加者全員による千羽鶴の作成

- 広島会議当日（7月30日）タイムテーブル（平和記念資料館第一会議室にて）

### 午前の部 「広島を知る」

- 9：00～9：55 秋葉忠利広島市長 講演  
10：05～11：00 被爆者（ヒロシマ・平和リボンの会代表、渡辺美代子氏）の講演  
11：10～11：40 映画鑑賞（ヒロシマの原爆に関する実写写真、英語版）  
11：45～12：40 平和資料館見学（HIP ボランティアの方々からの説明）  
12：40～13：55 休憩・昼食（ボランティアの方・広島大学の学生も交える）

### 午後の部 「広島と交わる（広島メインディスカッション）」

- 14：00～14：05 日米学生会議日本側・米国側実行委員長より挨拶、基調講演者紹介  
14：05～15：10 広島大学総合科学部講師 大牟田稔氏による基調講演、質疑応答  
15：10～15：45 休憩・NHK（スタジオ）へ移動  
15：50～17：25 「広島メインディスカッション（基調講演をうけて何を考えたのか）」  
    テーマA 「原爆投下を中心とした歴史認識をどう考えるか？」  
    テーマB 「核兵器廃絶のために、何をすべきか？」  
    \*各テーブルごとにディスカッションの結果を発表  
17：30～17：45 移動  
17：45～18：45 広島平和記念公園において献花・碑めぐり



秋葉広島市長



原爆死没者慰霊碑の前で（平和記念公園にて）

**広島会議の意義****第51回日米学生会議の背骨となった広島**

広島会議担当 糸永洋三

**広島サイト決定まで**

私たち第51回は、改めて繰り返すまでもなく、「検証そして創造へ—新たなる日米関係」という総合テーマのもと、ますますグローバル化が予想される21世紀に入る前に、もう一度日本にとって最も重要な二国間関係を国家利益の視点から見直し、世界的潮流に流されない土台づくりを行うことを目標として掲げてきた。「日米学生会議は、時代相の鏡である」とはおこがましい表現にあたるかもしれないが、しかしながら、例えばこれまでの日米学生会議の総合テーマを振り返ってみても、各々の会議の特徴、差異は明瞭でわかりやすく、その当時の時代背景を学生なりにうまく映し出してきた歴史が今までにはあった。それでは、今回、1999年夏に第51回目を迎える日米学生会議が映し出すべき時代相と、それに伴う会議内容は、いかようなものにならなくてはならないのだろうか。

そこで私たちは考えた。「国家、利益を見つめ直す」という、学生が無理をしてでも行ってみようという壮大な実験は、戦後の日米関係を決定付けた「ヒロシマ」に行くことから始まるのではないか。分科会の枠にとらわれずに、第51回日米学生会議参加者全員で「(終戦8月15日=戦後の関係の始まりと捉えるとすれば)戦後の日米関係の始まりの始まり」であった「ヒロシマ」を見つめ直してみようか。日米学生間の歴史ある団体という社会一般のイメージに対抗し、「学生が国とは何かを再考する」という大上段に構えた総合テーマを置いた第51回会議では「現場に行き、生の声を聞く」必要があるのではないか。つまり、2日間という強行日程ではあるが、ヒロシマを開催地として選ぶことには必然性をも感じさせるほどの意義があるのではないかと。

**広島サイトにおけるマスコミの位置づけ****NHK 広島支局のスタジオにおける収録現場**

第51回日米学生会議広島サイトの成果として掲げたい壮大な実験の一つに、マスコミを会議へ積極的に誘致、導入したことがある。導入した理由は二つある。一つは私見となるが、第50回日米学生会議の参加後に感じた「日米学生会議が社会への発信の場をもつこと=直接的に社会と関わりを持つこと」の重要性を何としてでも第51回で再認識し、実践に移したかったのである。これは私が第51回の実行委員への立候補の際の公約でもあ



った。外部の目に直接さらされる機会を設けることによって、日米学生会議内部にも程よい緊張感が生まれるであろう。学生会議の新たなる方向性として社会性を追求した結果、本会議に対するマスコミ導入を目指し、自ら積極的に企画提案を行っていくということとなった。もう一つの導入理由は、第51回の総合テーマと密接に関連する。1999年夏、第51回日米学生会議では現代の若者たちにより、「国」の概念の再考が試みられる。感覚としてはグローバル、個人主義というものを身につけていながら、敢えて無理をして「国」について考える日米学生会議参加者の学生たち。国レベルの大きな理念を創り出すことができる人があまりいない現代の日本において、そのような大きな理念を語る意義の大きさは測りしれない。そして、第51回日米学生会議で国を考える日米の学生、または会議の影響を受けた人の中から「国レベル」の大きな理念を掲げてもらいたいという思い。ここにマスコミ(NHK)を通して日米学生会議の活動内容が幅広く報道され、認知される必要性、重要性が生まれるはずだと考えたのである。これが、マスコミ報道を重視した二つ目の理由となる。

## 広島サイトを振り返って

広島会議の本会議開催前の準備活動においては、2回の出張を含め、京都サイト運営との関連からも困難を極めた。企画の考案から関係各所への御支援、御協力をお願いなど至らないところが多々あったのだが、結果的に本当に信じられない程、御支援をいただいた。そのことを嬉しく思い感謝するとともに、「学生として十二分に甘えさせてもらい過ぎた」という反省の気持ちも、実行委員としての今の私にはある。詳しくは後述するが、広島会議は大きく分けて三つの部分から構成されたものになった。まず事前準備として「広島勉強会」を京都にて開催し、歴史分科会による原爆に関する歴史的事実、見解などについての発表によって、歴史知識の共有化を図った。また、広島原爆や平和観について問うアンケート（後述参照）を実施し、広島会議の意義、目的の先鋭化を行った。次に、広島会議当日（7月30日）は、午前を「広島を知る」、午後を「広島と交わる」というコンセプトを掲げて会議運営を行った。広島秋葉市長によるブリーフィングから始まった午前の部は、被爆者の体験談、映画鑑賞、平和資料館見学などが、午後の部では、大牟田氏による基調講演、NHKスタジオでの会議参加者と広島の方によるディスカッションの収録が行われた。このような詰め込み過ぎた内容に関し、もっとゆっくりとヒロシマを知る時間を設け、落ち着いた議論を展開させるべきであったという反省点が残るものの、何よりもNHK広島支局スタジオにて学生会議参加者を中心に、広島大学学生、広島HIPボランティアグループの方々とのディスカッションの場を共有できたことは、学生時代における得難い経験であった。

私見かつ蛇足になってしまうが、準備活動中を含め広島会議を企画、運営してきた過程において獲得した知恵を、これからの学生会議運営に携わっていく未来のJASCer（日米学生会議参加者）に伝えておきたい。それは、「ソフトとハードのバランス」である。実行委員の仕事である会議の箱、枠、仕組み、つまりハードを創り上げていく作業と、そのハードの中で参加者とともに会議の中身、アカデミックレベルの向上、すなわちソフトの充実を同時に実践していくバランスのよさ、取り組んでいく懸命さが、会議実行委員に求められているということである。残念ながら私は、全くもって実践できなかった。

最後になりましたが、今回の広島会議開催に際し、広島市国際平和推進室、NHK広島支局、HIPグループの皆様をはじめ、本当に数多くの方々、団体から御支援をいただきました。改めて感謝の意を述べさせていただきます。また、広島滞在の2日間のうち、初日の夜には会議参加者の鍵田亜基さんの実家にて盛大な「広島ウエルカムレセプション」を開催していただきました。鍵田基氏、民子氏、育枝氏、裕章氏に感謝申し上げます。ありがとうございました。



### 広島サイトの準備

広島サイトスタッフと歴史分科会のメンバーは、広島サイトでのディスカッションに向けて、本会議が始まると同時に準備を進めてきた。まず、ディスカッションを構成するにあたって、最もよい議論を進めるためには、何を中心テーマに据えればよいかを検討しなければならなかった。

そこで、7月21日の夜に、日本側参加者全員で「平和とは何か」というトピックで、実際にグループディスカッションを行った。これによって、平和という感覚が人それぞれ全く違うため、その人を取り巻く環境や背景を考慮しながら平和を議論しなければならないことがわかった。従って、事前に行うアンケートには、そういった要素が自然と反映されるような質問を用意するよう工夫した。

### 広島勉強会

広島でのディスカッションに向け、出発前夜広島に関する勉強会を開いた。今回は特に、二つの歴史テーブル（歴史的事実と利害関係テーブル・オフィシャルメモリーテーブル）が中心となって会を進めた。

歴史的事実と利害関係テーブルは原爆についての基本的事項を発表することになった。原爆投下について「投下までの経緯」、「原爆の威力」、そして「投下以後」の三つのパートに分かれて、それぞれの事実認識についての発表をした。どういった経緯で広島に原爆投下が決定的にされたのか、原爆そのものの威力やそれがもたらした実際の被害とはどんなものだったのか、また投下以後、現在に至るまで続く原爆病についてなどを発表した。

次にオフィシャルメモリーテーブルから、歴史認識について発表があった。このテーブルでは、現代に「いかに過去を語るか」ということに重点を置いているため、ここでは広島にまつわる近年の論争が紹介された。

まず、具体例としてスミソニアン博物館の例が挙げられ、原爆に対する意識の問題は過去ではなく現在の問題でもあることが示された。また、続いて一般的に議論されている6点が紹介された。まず、上記の例とも重なるが原爆投下の正当性の問題。原爆投下の理由の問題。また日本においては、被害者意識と加害者意識の問題、核兵器廃絶の問題がある。国際的には、謝罪の問題、ホロコーストとの比較などが指摘された。

また、最後に、「現実と神話」と題して簡単な議論が紹介された。例えば、私たち日本人はアメリカ人のいくつかの行動から、彼らは原爆の投下を正当化しているのではないか、という疑いを持っている。しかし、実際にはアメリカにおいても様々な意見があり、定説はなく、また学校でも議論されているという。日本の中で「何となく」考えられているアメリカ像は必ずしも正確ではない。

これらの発表は、広島でのディスカッションへの準備になると同時に、日米学生会議ならではの、偏見を除去していく作業の一つとなった。

### 千羽鶴

広島事前勉強会にて歴史分科会の発表が終了すると、参加者の全員で慰霊碑に捧げるために千羽鶴を折ることにした。まず、千羽鶴の由来である佐々木貞子さんの話をして、折り紙で千羽の鶴を折ることの意味を確認した。そして、日本側参加者が中心となって折り鶴を折り始めた。始めはたどたどしい手つきで折っていたアメリカ側参加者も、数を追うごとに実に美しい鶴を折るようになった。単純に計算しても一人当たり15羽以上折るのであるが、中には30羽以上折るアメリカ側参加者もいた。こうして一羽一羽、広島への思いが込められた鶴は、その夜、一本の糸で繋がり、慰霊碑に捧げられるのを待つこととなる。



## *Survey for Hiroshima Trip*

Q.1 What does "peace" mean to you? How would you define it?

<American Delegation>

- No war
- People empathizing and cooperating everywhere
- Boundaries of thought and practice are broken down
- Prosperous international relations in a world free from war and tensions
- Mutual understanding of those around you
- The ability to overcome differences between two people or countries in a civilized way
- A feeling of connectedness in a community which reduces violence
- It means that disagreements are solved without bloodshed.
- Solemnity
- A utopian feeling of trust, security, and solemnity around the globe
- The presence of justice
- Martin Luther King said that peace "is not just the absence of tension but the presence of justice" and I agree.
- A general term to describe a relationship in which there is coexistence without any conflict
- The absence of violence and violent intent---not just with military force, but also economically, socially, culturally, religiously, etc.
- Serenity, cooperation, quiet
- A state or time when people get along with each other and share ideas and values
- Understanding, love, respect and individual responsibility

<Japanese Delegation>

- Silence, freedom from fear, security, and safety
- When we don't have to think about it, then there is peace.
- Very artificial, something we can never achieve
- When you think about "peace" on a personal level, it is something that you would value the most.
- The true "peace" is the situation that meets both the social and the personal peace.
- To spend everyday normally, not having any problems that put those or myself I know in danger
- The situation where we can live the happiest life without severe conflict or mental problems
- Stability of life
- Peace supports our life even when we don't realize it or think about it.
- No war
- Not disturbing the calm daily life
- There is peace of the level of international relations, and in this case, military power becomes important. In this way, there is a paradox---in the modern world, peace can only be achieved by weapons.
- The circumstance where you can live safely and can have a normal daily life
- Comparing with the place where wars occurred (is when I feel "peace")
- Having strong confidence that you can avoid war.



**Q.2 Do you think your country is a peaceful country?**

*Yes-27 No-11 Both-7*

<American Delegation>

*Both-5 Yes-8*

- Democracy and liberty require peace.
- Because we attempt to gain peace through our actions in the long term.
- For the most part the U.S. is internally peaceful. Although there are some minor domestic issues, there is nothing that could radically change the country. Externally the U.S. acts as a kind of police force so they try to resolve disputes peacefully although there are issues, which may require non-peaceful methods.
- I think it is more peaceful than some western countries, but racism still exists.
- The ideology of America, and the ideas of its army even, are peaceful in the sense that they seek to avoid conflict and maintain relationships between countries.

*No-9*

- We have the largest military industrial complex in the world. We often use the threat of aimed action to others.
- There is a lot of violence and poor people often they have to steal from others in order to survive.
- We are too proud of being a conquering world power.
- No, because we have so many cultures all thrown together living under the same laws. However, the U.S. isn't too bad off.

<Japanese delegation>

*Both-2 Yes-19*

- I have never felt the threat of wars as a direct threat to my daily life.
- We live in "No war country" and we are not afraid of wars.
- I believe that we have too many problems such as the proliferation of guns, hate crimes, and massive inequality which prevent us from really feeling safe in our homes.
- We have a constitution, which has article 9.
- The crime rate is not very high.

*No-2*

- Many Japanese are not healthy physically and mentally because they have too much stress in their busy and stressful lives.

**Q.3 What do you associate with Hiroshima?**

<American Delegation>

- End of WW2
- 200,000 deaths
- Confusion, guilt, pain, fear, forgiveness, tension, shame, tragedy
- Confusion and misunderstanding
- Ruins and cancer
- A lesson to be learned by and for the rest of the world
- Rebuilding
- Confusion and frustration between two countries
- Question of moral acceptability and remorse
- The devastation and mass destruction that had so little to do with Japan, but rather with international politics
- Loss of hope, shame, guilt, radiation (illness, physical pain, birth defects years later),

struggle, paper cranes  
-Bombing of Nagasaki, Pearl Harbor

<Japanese Delegation>

- Atomic bomb
- Okonomiyaki, Hiroshimayaki
- The place that symbolizes peace, a place where people remember WW II
- Blue sky, red flowers.
- Education focusing on war
- Nothing much. It was an event that took place in order to end the war, and every war action is controversial.
- An enormous recovery
- Hiroshima Carp
- Aug.6
- Japanese Mafia
- Sorrows of war
- Anti-atomic bomb movements

**Q.4 Have you ever had an opportunity to think deeply about peace?**

<American Delegation>

*Yes*

- Church
- Holocaust Memorial in Boston
- Racism in the U.S.
- Kosovo and India-Pakistan has made me more aware of the violence, death, and distress a war can cause
- At Japanese temples
- I think about "peace" everyday
- In elementary school (during the Cold War) there was much discussion about peace.
- In Israel
- In my classroom at the university

*No*

- Fortunately, I have never been in a situation that makes me truly appreciate peace, or think deeply about that matter.

<Japanese Delegation>

*Yes*

- When I went to the country where the war happened and heard the stories of people who experienced the war.
- In Japan, students must study about war and peace in regard to WW II, and after Japanese "peace education" from elementary to high school.
- When I read the Japanese comic "Hadashi-no-Gen" in my elementary school.
- From a movie
- Yes, when I talked about it with my friends from a different country.
- Whenever I am alone
- There is a Memorial Day for Okinawa; June 23-this is called "irei-no-hi". This is the day when the land-war in Okinawa was over in WW II. We usually watch TV programs or have a lecture on this day.
- Yes, my parents, my grandparents and teachers in elementary, junior and high school taught me about peace. Also some TV programs and movies helped me think about it.



- We discussed "peace" and "war" in religion and ethics.
- Previous navy base
- Always, when going abroad (U.S.A., Thai)
- Yes, when I feel my family's love.
- TV program

### 広島会議 「平和に関するアンケート調査」の考察

第51回日米学生会議では、広島会議を開催するにあたって、会議参加者が平和についてのどのような意識をもっているのか、日本側とアメリカ側の認識の差異は存在するのかということアンケートを通して調べた。これにより、我々が広島へ行くことの意義、並びに今平和について考えることの意義を改めて考えた。

「平和」と一言に言っても各人の認識は多様である。アンケートの第1問目に、「平和とはあなたにとって何ですか。」という設問を置いたが、アメリカ側で、差異の克服、他者との共生または正義が存在すること、といった定義づけをしている回答が多い一方、日本側は、日常生活が脅かされない状態や、安全に普通の暮らしができる状態、平和について考えなくてもよい状態との回答が多かった。このことから、アメリカ側参加者にとっての平和は他者との対立や葛藤の反対概念であるのに対し、日本側にとっての平和は「他者」という外部の視点よりも、日常の普通の生活が守られている状況という視点に重きが置かれていることがわかる。このように、「平和」認識に関して、両国の違いが顕著に見られ、大変興味深かった。この違いの背景には、それぞれの国の社会状況や文化が存在すると言えるだろう。

第2問目は、「あなたの国は平和な国であると思いますか。」という設問で、「はい」と回答したアメリカ側参加者が22人中8人で、日本側は23人中19人であった。日本側のほとんどの参加者が自国を平和だと考えている理由として、戦争や戦争の脅威が現在ないことや、犯罪率の低さを挙げた。また、日本が平和でないとする少数意見は、日本人が精神的に不健康であることを理由に挙げ、多数意見とは違った「平和」観を示唆した。「はい」と答えたアメリカ側参加者が少数であったのは、「どちらとも言えない」と回答したものが5人いたことも大きく、日本側と違い、彼らにとって即座に答えられる問題でないことを実感した。また、アメリカ側で「いいえ」と答えた参加者は9人と、日本側よりはるかに多かった。巨大な軍事力を抱える国ならではの複雑な思いが感じられた。

第3問目は、「広島と聞いてあなたは何を連想しますか。」という設問で、アメリカ側及び日本側共に、原爆に関する事柄の答えが圧倒的であった。このことは、今なお広島が原爆や平和について考える機会を与えてくれる土地であることを示唆しているだろう。その意味で今回の広島会議は学生が平和について真剣に考え、議論する上で最適の場であったと私は思っている。

最後の設問である第4問目は、「平和について熟考する機会を持ったことがありますか。」という設問で、アメリカ側、日本側双方で、テレビの戦争報道や博物館、映画といった様々なメディアによって平和について考える機会を得ている点で共通していた。また、日本側の回答では、日本の平和教育の影響を挙げたものもいて、日本の場合メディア、教育の両面で多くの「平和」について考える機会が存在すると感じた。

最後に、広島サイトスタッフとして、このアンケートの感想を述べようと思う。参加者各々の平和に対する思いを見通すと、両国ないし各人の特徴が顕著に現れることが大変興味深かった。それぞれが、それぞれのバックグラウンドを反映した平和観を持っているということは、他から与えられた平和の定義を無批判に受容しているのではなく、それぞれが自分の頭で平和とは何かを考えている証拠であると言えるのである。

(金子彰一郎)

## 広島サイトスタッフの感想

7月29日早朝京都を出発し、バスに揺られること5時間余りで、第二次世界大戦中に原爆投下が行われた広島に到着した。初めて訪れた広島はとても美しい街で、50年以上も前に原爆がこの地に投下されたのが信じられなかった。翌日、秋葉広島市長の講演で我々第51回日米学生会議広島会議が本格的にスタートした。講演終了後、広島市が制作した広島原爆投下についてのフィルムを見た。スクリーンの中に描かれているものは原爆投下後の荒れ果てた広島姿であった。それと同時に被爆した市民の映像も映し出された。目がえぐられているもの、瀕死の状態のもの、まさに地獄絵そのものであった。しかし私はそこで「このフィルムは非常にセンセーショナルに作られているのでは？」と疑問を感じた。確かに広島に原爆が投下されたことは周知の事実である。しかしあまりにも衝撃的な映像を集めて、「広島」＝「悲惨」という構図を作り上げている。つまり「広島」という一つの歴史的事実に他の解釈は認められていないのである。またこの目を思わず伏せたくくなるような映像を、戦争を体験していない人々に見せることは、果たしてどれほどの影響力があるのだろうか？この映像の使命は人々に原爆の苦しみを伝え、今後二度と同じ過ちを繰り返さないようにすることであるはずなのに、いつのまにか映像を観ている側にもトラウマを生み出している。我々がすべきことはトラウマの継承ではなく、これからどのように平和な社会を作っていくかを考えることだと思う。

広島を訪れて、改めて「歴史の語られ方」の重要性を感じた。歴史は言葉や映像など記号で語られる以上、様々な意味解釈が可能である。そして記号への意味付けは決して同じになることはなく常に形を変え、再生産されている。だからこそ歴史を語る時には細心の注意を払い、どのような視点から語るのかを明確にしなければならない。そしてある歴史を物語る資料を見る時、ただそれを受け入れるのではなく、常に何が映し出されていて、何が排除されているか考えるべきだと思う。広島サイトは私に批判的思考の大切さを教えてくれた。

(西平奈々子)

広島での2日間は、その期間が極端に短いということもあって朝から晩まで時間をフルに活用した盛りだくさんのサイトだった。

初日はフェリーに乗って宮島へ行き、世界遺産である厳島神社を見学した。海岸に構える朱い鳥居には、刻々と移り変わる人間の歴史を海の入り口から無言で見守り続けた歴史の重みを感じた。夕食の広島焼はまさに絶品だった。カウンターに敷かれている長い鉄板の上には、広島焼きが忙しい手つきで焼き上げられていく。おじさんの腕によって何層にも積み上げられていって、東京の二倍は厚い広島焼が、私の胃も心も満足感でいっぱいしてくれた。

2日目は、NHKの取材が入り、原爆ドームを見学し、その後で広島市の学生や市民も交えて原爆の残した意義について討論会が開かれた。日米の学生と広島市民が語り合うことによって、狭い範囲にとらわれることのない視野から原爆が私たちに残した意義を考えることができたのは、非常によい機会だったと思う。原爆資料館には、原爆投下に至る詳細な記録から被害者の残した記録、遺品や絵画にわたるまで様々な資料が残されていて、一緒に見学するうちに一同、口数が次第と減り、それぞれが展示されている生々しい遺品の中にある戦争の戒めを胸に刻んでいた。もちろん戦争に一方的な被害者というのではないのであって、原爆に関しても投下したアメリカを加害者、日本を被害者と割り切ることはできない。私が感動したことは、少数ではあってもアメリカの学生が広島・原爆という傷に純粹に心を痛めて、深い悲しみを覚えてくれたことである。ある日本側参加者は、資料館は日本の被害者意識が強すぎてアメリカ人には受け入れがたいだろうと懸念していた。もちろんそう感じた人もいると思うが、アメリカ側参加者の中には被爆者の体験談に心から耳を傾け、資料館の遺品を眺めながら涙を浮かべて日本人と肩を抱き合っているものもいた。私はそういう心を大切にしたいと思った。特に国際的に日本の軍事的貢献が世界に必要とされていく中で、過去の過ちを深い悲しみとして受け止め、日米の両国を生きるこれからの学生がその意義を共に分か



ち合うことこそ、私がこの広島サイトから学び得た最高の収穫であったと思う。最後に、皆で一晩かけて折り上げた千羽鶴を奉納して日米学生会議参加者 62 名が碑に向かって短い黙祷を捧げた時、平和を願いともに祈るといふことの尊さを改めて感じた。

憲法 9 条をめぐって活発に議論が交わされているこの時期に、戦争を経験していない私たちが次世代を引き受けるに先立って、この企画は改めて過去を見つめ直すきっかけとなった。第 51 回日米学生会議のコンセプトでもある「検証そして創造へ—新たなる日米関係」をメディアを通じて訴える上でも非常によい方法となったのではないだろうか。

(庄子薫)



広島会議前日（厳島神社にて）



広島のお好み焼きを前にして

# 第3章

本会議までの準備活動

本会議の日程

本会議中の活動



## 本会議までの準備活動

### 都留文科大学講演会

11月12日、都留文科大学の英文学科・英文学会共催秋季講演会において第51回実行委員のメンバーが、自分たちの経験に基づいて「日米—今、私たちができること」という演題で講演を行った。100名近い都留文科大学の学生が聴講し盛況であった。

### 春合宿

5月3日から5日にかけて、初めて日本側参加者が国立オリンピック記念青少年総合センターに会した。初日は自己紹介と日米学生会議についての説明を行った。2日目は、前もって読んだ「現代民主主義の病理」(佐伯啓思著)をもとに、「自分の国に誇りを持てるか」ということについて討議した。その後、分科会・テーブルごとに集まり、テーブルの方針を話し合い、更に、ここで話し合われたことを全員の前で発表し、質疑応答を行った。この合宿は、本会議前の最初で最後の全員で集まる機会であったが、お互い、本会議に向けての意気込みを確認し合うことができ、第51回日米学生会議の素晴らしいスタートとなった。

### 勉強会・講演会

本会議での議論を充実させることを目標に、テーブルごとの勉強会に加え、参加者全体に向けての勉強会及び講演会を開いた。講演会は一般公開とし、OBをはじめ多くの方に来聴していただいた。

#### ①寺島実郎氏勉強会 6月18日

講師：寺島実郎氏

三井物産情報室長(当時)

寺島実郎氏出演のNHK特集「トライアングルクライシス」を見た後、勉強会に臨む。寺島氏は20世紀の日本の外交、日本社会の見ていたものがアメリカに集中していたことを指摘。またミーイズムに陥っている現在の状況を憂慮、公共心を養うことの重要性を示された。更に、現在の小林よしのりに代表されるようなナショナリズムに代わる、世界に通じる愛国心を育て、諸国が互いに愛国心を尊重し合う社会を目指すべきだと主張。最後に学生へのメッセージとして「自分をプロデュースする」方法を教えて下さった。



#### ②栗山尚一前駐米大使講演会(日米会話学院にて) 6月24日

講師：栗山尚一氏

平成4年より駐米大使、平成8年退官、外務省顧問。現在、第一勧業銀行顧問、早稲田大学法学部客員教授、国際基督教大学客員教授



前半は3部に分かれており、順に、戦後の日米関係の検証、世界の変化、日米関係に求められることについて話していただいた。

戦後の日米を結び付けてきたものとして、両国が共通の利益を持つ冷戦と自由貿易を挙げ、現状との関連を指摘。更に現在の世界を把握する上で三つのベクトルが提示された。それらは、グローバリゼーション、多元化、多極化であり、現在の流れを形作っている。グローバリゼーションとは、

国境の垣根が低くなり、ルールを国際基準に合わせていくこと。競争が激しくなると同時に相互依存が強まる。つまり国際協力と、競争・相互依存の両方の共存を許すルールが必要になる。多元化とはグローバル化の中で人々の価値観の多様化が進んだことを指す。多極化とは、アメリカ一極の世界の対であって、不安定の要素を内蔵するために短期的には安定しない状態を意味する。このような中で、日米関係のできることは、多元化をスムーズに促進することである。

後半は「新たな日米関係」の課題について、質疑応答を交えつつ話していただいた。歴史認識に関しては、謝罪の有無よりも、歩んだ道を反省し、繰り返してはならないという今後の生き方を示すことの重要性を述べられた。また、予防外交という言葉が挙げられ、外交力や理念を持った主張が求められていると示された。

### ③防衛大学校訪問 6月25日



毎年恒例になっている防衛大学校訪問。まず、全校生徒が一堂に会する食堂にて、防衛大学生の代表たちと向かい合って昼食をとる。その後構内にある展望台で、学校の全体の説明を柳川三佐(当時)にしていただく。地上では防衛大学生が昼の行進をやっており、壮観な眺めであった。午後はまず6グループに分かれて4年生のゼミに参加。北朝鮮、大量破壊兵器、シーパワー問題などのゼミがあり、専門的に研究している姿を目の当たりにした。その後、防衛大学校生とディスカッション

を行った。議論は日本の教育、思想から有事法制、国歌・国旗問題など多岐にわたり、日本について真剣に思いを寄せる防衛大学校生の姿に感銘を受けたものも多かった。日本の教育は防衛問題を敢えて避ける傾向があるだけに、このような機会は非常に貴重かつ重要であると考えられる。

### ④岡本行夫氏講演会(国立オリンピック記念青少年総合センターにて) 7月10日

講師：岡本行夫氏

株式会社 岡本アソシエイツ代表

外務省にて安全保障課長、北米第一課長を務めた後、1991年退官、現職へ

第51回日米学生会議のテーマである「検証そして創造へ—新たなる日米関係」というタイトルで岡本行夫氏に講演をしていただく。主に安全保障に関する問題を話していただいた。

日本にとってアメリカは唯一の条約上の同盟国、つまり間違いなく最も重要な国である。今までには経済的理由が日米同盟の実質的基盤となってきたが、その経済すらアジア通貨危機では無力さを露呈、信頼を失いつつある。将来、日米同盟破棄の可能性もあるだろう。また「日本はアジアの雄である」との議論がしばしば聞かれるが、現状はと言えば、日本はアジアの中心どころか自分で自分を守ることもさえできない魅力のない国でしかない。これからの日本は国内事情を言い訳に使って責任を回避するような子供っぽさを捨て、「自由か平和か」の選択を冷静に議論し、自らの道を切り開いていく成熟さを持ち合わせる必要がある。そして成熟した国になれるかどうかは現代の若者たちの肩にかかっているのである。

氏の講演が終わると次々と質問が飛び交い、活発な講演会となった。





### ⑤井上敏之氏のディベートスクール 7月11日

日米学生会議のOBで、ディベートスクールの校長をしていらっしゃる井上敏之氏に本会議での討論に向けて英語ディスカッションの仕方を指導していただく。これまで様々な形でディスカッションを練習してきた参加者が多かったが、「お互いにフィードバックをしながらよい議論を目指していく」という井上氏の独特な指導は初めてであり、効果的であった。アメリカ側とのディスカッションへの意気込みが膨らんだ一日であった。

### ⑥北岡伸一教授（東京大学法学部）によるペーパーの講評

私たちが本会議に向けて作成した英文ペーパーの講評をしていただいた。偏りのある意見や勉強不足な点を指摘していただき、参加者一同改めてペーパーを作成することの難しさを感じた。

先生方、関係者の方々には大変御親切にいただき、参加者一同非常に多くのことを学んだ。改めて深謝したい。

### メーリングリスト

春合宿の後メーリングリストが情報提供に使われた。それと同時にメール上で、脳死、グローバルイゼーション、ナショナルアイデンティティー、などについても盛んに話し合われた。本の紹介や時事問題への意見も出され、会議前から非常にアカデミックな雰囲気が参加者の間に広まった。

### 機関誌発行

春合宿後、参加者の一部が中心となって、機関誌『これからドナル？』を発行した。中身は、勉強会の報告から個人的な話にまで及び、また表紙から編集後記まで手の込んだ、思い出に残る冊子となった。参加者の間ではメーリングリストを使った活発な議論も進んでいたが、機関誌はまた別の側面から参加者を結びつけた。

### 参加者の感想

#### Mission: To Reconstruct Myself

吉村光歩

日米学生会議に参加し心に残っていること、得たものの具体例を挙げると、準備活動中のメーリングリスト上の議論や防衛大学校へのフィールドトリップ、広島での体験が挙げられる。そこに共通するのは、「未知」への出会いや自分が今までにいたところとは全く異なる環境に触れることである。そしてそれはひいては、生身の人間同士のぶつかり合いにつながるものだと思う。

この会議を通して、私を成長させてくれたものはこのような自分とは異なる「他」に触れる経験であったと思う。メーリングリスト上では、自分の考えをぶつけ、それに対し数々の反応をもらい、そこから更に考えを深めてゆく。また逆に、新しい視点から問題に切り口を与えてくる他者の考えから、独りよがりになりがちで自分の意見を再考することもできた。時にはこの議論が白熱するあまり鋭い言葉の応酬になったこともあったが、ともすれば物事を他人事として捉え、シラけたムードの漂いがちな風潮の中、各自がそのバックグラウンドというフィルターを通し、物事を「自分のもの」として真剣に捉え、他者の投げかけに真摯に答えていた姿勢は、私の今後の人生に深い示唆と啓蒙を与えてくれたように思う。

しかし、この会議を通し「未知」そして「他」への出会いは、巷で相互理解と簡単にいわれている様には決して容易にいかないということも発見した。私自身が、日米安全保障条約テーブルにいたこともあり、防衛大でのフィールドトリップや広島であの街が漂わせている一種独特の雰囲気に圧倒され、自分自身がわからなくなような感覚も味わった。自分が今まで生きてきた世界とは全く価値観が異なり、身に染み付いてきたものから訴えかける声な

き声には抗し難い力があるということ。そのようなものに包まれた時の、自分の今現在立っている足下が崩れ去るような何とも言えない複雑で、どうしてよいかわからないような感覚をまだ覚えている。自分が持っていた意見が、相対的であることを身を持って感じた。そして自分の考えに確証が持てなくなった。「他」の存在があまりにも大きかったから。「他」を踏まえた上で「自分」を構築していくということ、これがこんなにも難しいとは、と正直言っていた。

逆に言えば、今まではそういう「他」を軽視し、またはぶつかり合いを避けてきたのではないかとすら思う。「他」と真剣に向き合ったこの1ヶ月、自分を深く見つめ直した。

このようなきっかけを与えてくれた会議や参加者皆の大きなやさしさに包まれた期間を振り返る時、これに価値を付与し続け、その価値を自分の中で終わりのないものにしたいという思いを強くするのである。

読売新聞 PRのページ ぴーぶる 1999年2月8日(月曜日)より



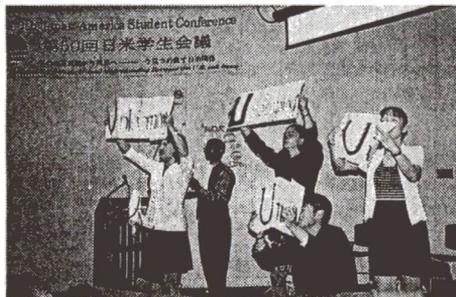
夏の「日米学生会議」を控えて、ミーティングを重ねる実行委員たち。先輩の小林、杉山さんもアドバイスに駆け付けた

「就職活動しながら準備を進めているので、一般的な大学生活とは一味違う忙しさです」アメリカ力の若者に向かって堂々と主張出来るメンバーの参加を望みたい――。『日米学生会議』の開催に向けて全力投球中の実行委員たちは、7月20日～8月20日の期間中、京都を皮きりに国内4会場で開催される各サイトを前に、こんな感想や抱負を語る。すでに半世紀の歴史と実績を刻む国際的なイベントを企画する一方、就職活動にも余念のない大学生にスポットを当て、その実像に迫ってきた。51回目を迎えた日米学生会議の目的は①両国の学生が約1か月の共同生活と知的交流を通じて相互理解を深め、友好・信頼関係を築き上げていく②現代の諸問題に取り組み、解決の糸口を探察していくの2点にある。満州事変後の1934年

## 就職活動と「足のわらじ」きついで「実社会を知る貴重な体験」

### 今夏、京都などで開催 第51回日米学生会議 実行委員が奮闘中

日米関係の悪化を憂慮した日本の学生の申し出をきっかけに発足した同会議の過去の参加メンバーには元首相の宮沢喜一蔵相(第6、7回)の名前も。今は財団法人「国際教育振興会」(東京・四谷)の全面的な支援を受けているが、実施内容については日米双方の学生が活発に話し合ったうえで、毎回選ばれる新たな実行委員が企画・運営しているのが特徴だ。



シカゴで行われた昨年の第50回大会での様子

今年のテーマは「検証そして創造へ」新たななる日米関係」。昨年50回会議に参加した山崎加奈さん(東大経済学部3年)を実行委員長に、原田暁平(慶応大商学部2年)小林美和子(筑波大医学専門学群2年)軍土尚篤臣(北大2年)大木愛(都留文科大学2年)さん8人の実行委員が綿密なミーティングを重ねて



#### 山崎委員長の話

「個人的にはコンサルタント会社を目指していますが、就職活動に関しては、いまさらどうこうでなく、身につけたものを出し、やるだけのことをするだけ。学生時代にこそ、今回のテーマのように国の視点で考えることも必要だと思う」

### 社会的慣習や交渉術 人脈作りなど勉強できる

「こうした学生に対して、既に就職先を決めた先輩からは「アメリカとの交流を通して全く新しいものが見えてくるはず。個人的にはいい勉強になった」(50回会議実行委員の杉山洋平さん、東大・経済)「財政を担当したが、物事の決定などで参考になった」個人的なつながりも出来た」(同じく小林大祐さん、慶大)「商」と温かいエールが送られていた。

「三関係の志望だが、こんな活動をしていると、会社訪問などの時間は確かに少なくなる。でも、就職は他人との競争ではなく、自分の売り込み方次第で思っているより、今は日米関係をテーマにした問題に関心の高い仲間とともに、学生の視点で良識を持って取り組みたい」という。また、財団法人や企業からの資金集めに奔走している相谷浩和さん(同)は「いろいろな人たちに会えるのがとても勉強になる。将来は外資系企業に在社して自分の実力を試みたい」と意欲的に取り組んでいる。



第50回会議参加者の記念スナップ

同会議の連絡先は〒100-0044 新宿区四谷の21、国際教育振興会内「日米学生会議」事務局(電話03-3366-9000)。インターネットのホームページは<http://www.jasc.org/>



## 本会議の日程

- 7月20日 日本側参加者京都立命館大学到着  
7月21日 日本側オリエンテーション第1日目  
大西広教授勉強会・広島会議日本側勉強会  
7月22日 日本側オリエンテーション第2日目  
アメリカ側参加者到着  
7月23日 ジョイントオリエンテーション第1日目  
佐伯啓思教授勉強会  
7月24日 ジョイントオリエンテーション第2日目  
アカデミックオープニング・レセプション  
7月25日 テーブル0  
京都散策・スペシャルトピック1  
7月26日 テーブル1、2  
嵯峨野セミナーハウス泊  
7月27日 テーブル3、4・スペシャルトピック2  
7月28日 テーブル5、6・広島勉強会  
7月29日 広島へ移動  
7月30日 広島会議  
7月31日 フリーデー  
8月1日 札幌へ移動  
8月2日 スペシャルトピック3  
合同講演会・レセプション  
8月3日 テーブル7、8  
札幌ビアパーティー  
8月4日 テーブル9、10  
8月5日 テーブル11、12  
札幌レセプション  
8月6日 ホームステイ  
8月7日 ホームステイ  
東京へ移動  
8月8日 Cultural Day—お香席・歌舞伎  
8月9日 テーブル13、14・タレントショー  
8月10日 横田米軍基地訪問  
8月11日 テーブル15、16  
8月12日 フォーラム準備  
8月13日 フォーラム準備・小淵首相との対面  
8月14日 フォーラム準備  
8月15日 第51回日米学生会議総括フォーラム・レセプション  
8月16日 新実行委員選挙  
8月17日 新実行委員ミーティング  
米国大使主催大使公邸レセプション  
8月18日 新実行委員ミーティング  
8月19日 新実行委員ミーティング  
クロージングセレモニー  
8月20日 米国側参加者帰国  
日本側参加者解散

## 本会議中の活動

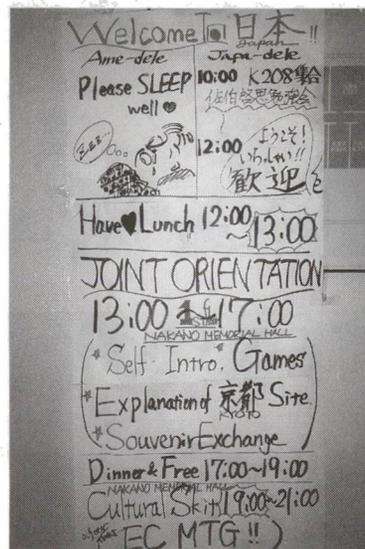
### 大西広教授勉強会・広島会議日本側勉強会（7月21日）

京都大学の西大広教授に "Polite Retreat – difficult but challenging" という演題で、講演をしていただく。日米の経済に関するマクロ的な分析が説明された。午後は広島会議に向けて勉強会が開かれ、「平和とは何か」という題材でディスカッションを行った。

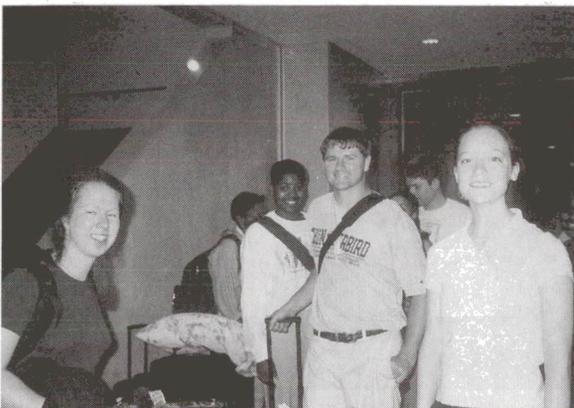


### アメリカ側参加者到着（7月22日）

アメリカ側参加者を歓迎するための体制が日本側参加者によって徐々に整えられ始める。



アメリカ側参加者が遂に到着。夜中の到着ということもあって、荷物を衣笠セミナーハウスに運び込む際は一言も話すことができなかった分、セミナーハウス内での歓迎振りは賑やかであった。アメリカ側参加者は長時間のフライトでかなり疲れていたようだが、出会いの瞬間は素晴らしいものであった。



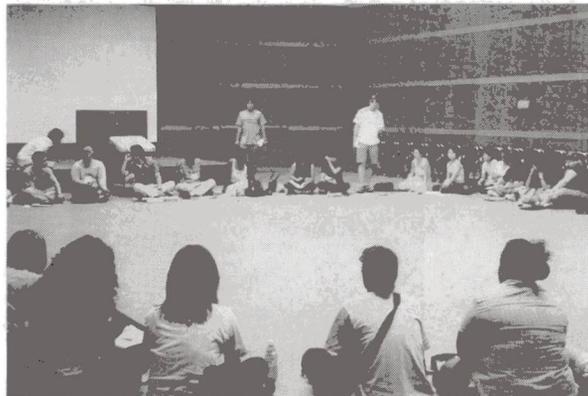


**佐伯啓思教授勉強会 (7月23日)**

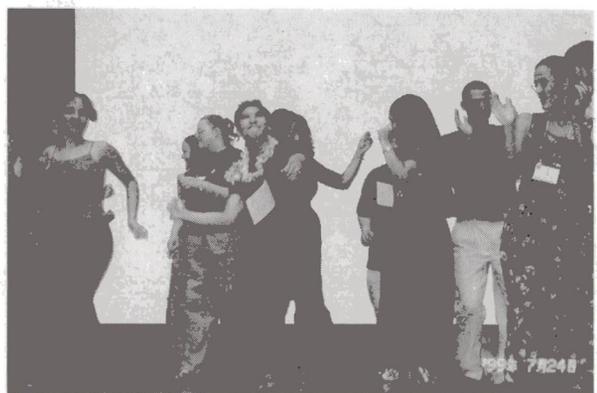
午前中は参加者のために京都大学の佐伯啓思教授が講演をして下さる。アメリカ側参加者は自由参加であったが、前日の疲れをものともせず参加するものも数名いた。



**ジョイントオリエンテーション (7月23日~24日)**



中野記念ホールに集合し、自己紹介やゲーム、お土産交換をする。お土産交換では、それぞれの国柄、地方柄、学校柄の反映されたお土産が多く、お互いのバックグラウンドを垣間見ることができた。24日の午前中には日米の参加者による文化紹介、Cultural Skitが行われる。日本側はニュース報道形式で日本の現代風景をコミカルに描いた。アメリカ側は "Most sexy guy's election show" と題して様々な有名人の物真似、ダンスを取り入れたユニークな show を繰り広げた。



## アカデミックオープニング・レセプション（7月24日）

立命館大学において京都大学の中西両教授をお招きしてアカデミックオープニングが開催された。これからの日米関係を考えていく上で必要不可欠となるであろう経済関係と安全保障問題についての両氏による御講演は、テーブルでの議論を中心とする会議の幕開けとしてふさわしいものであった。



アカデミックオープニングの後、国立京都国際会議場でレセプションが開催された。立命館大学長、京都市長、両国首脳及び多くの後援者の方から激励の言葉をいただいた。OBの方々との交流を通じ、この会議に対する熱い期待を受け、会議本番に向けて更なる意欲を高めることができた。



## 京都散策（7月25日）

日本側参加者の主導で嵐山コースが設定された。常寂光寺、亀山公園、渡月橋周辺を歩き、京都の自然に触れる。この散策を通してアメリカ側とのより密な交流が生まれた。

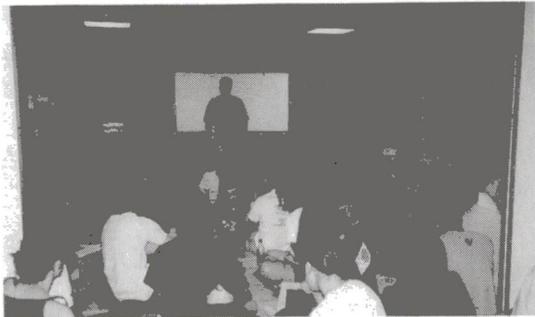




**広島 Day (7月29日~30日)**

広島会議 p.50 参照

**スペシャルトピック (7月27日)**



夕食後、スペシャルトピックが行われた。テーマは、Pop Culture や教育制度の相違等広範囲にわたり、議論が白熱した。

**合同講演会・レセプション (8月2日)**

午後は札幌国際プラザの主催で '99 北東アジア・米国集中講座の学生とともに村上隆氏（北海道大学スラブ研究センター教授）による講演会に参加した。内容は極東アジアのエネルギー問題。極東地域のエネルギーの将来性とそれを運用する際の北海道の地理的重要性を強調されていた。その後、先の講演会に参加していた学生並びにプラザや北海道サイトの実現に御尽力をいただいた方々を囲んで、レセプションがとり行われた。在札幌総領事館広報アドバイザーの本堂藤昭氏、札幌アカシアライオンズクラブ会長齋藤嘉久氏からお言葉をいただき、前衆議院議員の荒井聰氏から記念スピーチをしていた。



**札幌ビアパーティー (8月3日)**

午前、午後と分科会のあった後、札幌大通り公園のビアガーデンでビアパーティーを行った。札幌は例年になく暑さのため、ビアガーデンも非常に混んでいた。ステージ等が設置されており、日本の夏を満喫するひとときとなった。

### 札幌レセプション (8月5日)

北海道大学でレセプションが催された。北海道大学学長、在駐札幌米国総領事にも駆けつけていただき、また北海道在住のOBの参加もあり、盛大な会となった。



### ホームステイ (8月6日~8月7日)



はじめに、札幌国際プラザでホスト・ファミリーとの対面式がある。アメリカ側と日本側参加者1人ずつで、ホスト・ファミリーと対面。対面式の後には、それぞれのホスト・ファミリーと土砂降りの中を各家庭へと急ぐ。他のメンバーとはしばしの別れである。

### Cultural Day—お香席・歌舞伎 (8月8日)

開催地を東京に移した翌日、日本側参加者もおそらく体験したことのないであろう、お香席に参加した。次々と香炉が回され、その香の組み合わせを当てる。お香そのものは意外に難しく、なかなか当たらなかったが、勝敗の結果よりもむしろその雰囲気素晴らしかった。

夕方は、歌舞伎座で観劇。アメリカ側は、歌舞伎についての基本的知識を持っていたものが多く、評判が良かった。日本側は日本側で、有名な役者も出演していたため、かなり興奮した。日米双方とも歌舞伎の説明が流れるイヤホンガイドを借りたため、十二分に楽しむことができた。





### タレントショー (8月9日)



参加者全体でまずジェスチャーによる伝言ゲームをした。盛り上がった後、続いてタレントショーを行った。各自日頃隠れた才能を披露。美しい歌声、ダンスやジャグリング、human-blowfish、ギター演奏…。思いがけない人があつと驚く芸を披露し、会場が沸いた。

### 横田米軍基地訪問 (8月10日)

早朝に出発してバスで横田米軍基地へ移動。町中に突如として現れる基地は、非常に不思議な空間であった。モノトーンの建物、また、レストラン、スーパーマーケットは、外観も店内も店員もアメリカそのものであり、アメリカ側参加者はしばしの間、懐かしい気持ちにひたりながらはしゃいでいたようである。



#### 午前

- 在日米軍の基本戦略に関する講演
- 横田米軍基地の空軍のバンドコンサート

#### 午後

- 基地内の施設、旧日本陸軍の遺跡塔を一時程度程度のツアーで見学



### 小渕首相との対面 (8月13日)

参加者の中から代表として日本側参加者5名、アメリカ側参加者5名の計10名が小渕首相と対面した。

日本経済新聞 1999年8月14日



**記者手帳**

「皆さんと握手するので将来、米国の皆さんは大統領、日本の皆さんは首相になつて下さい」と小渕首相は十三日、首相官邸で第五十一回「日米学生会議」に参加している両国の大学生の表敬を受け、高校生だったクリントン米大統領が政治家を志すきっかけになったというケネディ大統領と握手している写真を見せながら激励した▼米国の大学生らには「富士山を見たか。富士山は富と志の山だ。富と徳のある国、まさに日本はそういう国にならなければならない」と切り出し、持論「富国徳一」をアピール。「いいねえ、若い人と話すのは、一番の楽しみだ」との感想も漏らした▼首相はこの後の通常国会閉幕に際する記者会見でもパネルを何枚も使って重要政策への理解を呼び掛けるなど、気分は上々のよう。七カ月に及んだ国会と懸案だった自由党との連立維持を無事に乗り切った解放感からか、久々のリラックスモードに浸っていた。(伸)

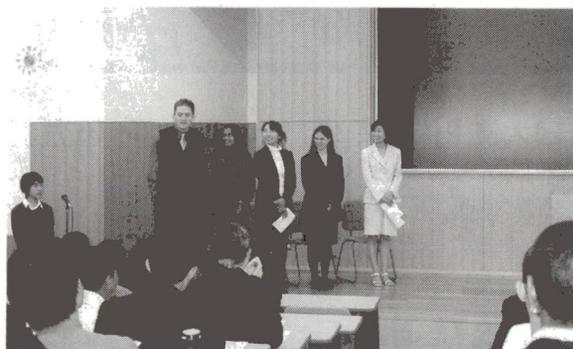
**「未来の首相」と握手**

### 第51回日米学生会議総括フォーラム・レセプション (8月15日)

夕方から新宿小田急サザンタワーでレセプションを行う。お世話になった方々をお招きしての盛大な会となった。また多くのOBにお越しいただいた。

フォーラムとレセプションを終え、一つ山を越えた、という気持ちだった。

(第51回日米学生会議総括フォーラム p.45 参照。)



### 新実行委員選挙 (8月16日)

選挙の形式を事前に全員で話し合う。日米合同で選挙を行った方が良いという意見もあったが、結局は日本側とアメリカ側に分かれて実行委員を選ぶこととなった。





立候補者のスピーチと投票はアメリカ側は午前中にあっさりと決まったが、日本側は予想通り難航した。最終的に投票したのは夕方であった。夕食後、合同で全体ミーティング。第52回実行委員が紹介された。



**米国大使主催大使公邸レセプション (8月17日)**

米国大使公邸でのレセプションに出席した。素晴らしい公邸での、大使御夫妻をはじめとする大使館関係者の温かいおもてなしに、一同感動した。フォーリー大使から様々なお話を伺い、また国際教育振興会理事長の山室氏、日米学生会議創始者の田端氏とも親しくお話しでき、大いに盛り上がった。



**クロージングセレモニー (8月19日)**



夜には会議を締めくくるクロージングセレモニーが行われた。第2弾のタレントショーでは8月9日のものとは違って、しみりした歌などが多く、別れのおいが少しずつ漂っていた。紙皿に寄せ書きをした後、一人一言ずつ会議の感想を述べた。涙で言葉に詰まる参加者もいて、改めて会議が終わってしまうのだということを実感した。

## 第4章

**第51回日米学生会議を振り返って**  
**第51回日米学生会議を経て**  
**実行委員の目で見えた第51回日米学生会議**  
**第52回日米学生会議概要**



## 第 51 回日米学生会議を振り返って…

### 参加者の声（抜粋）

●会議の間、自分が担うべき役割というものを常に模索し続けたけれども、時に自分の能力の限界を感じて焦燥感にかられた。それでも今振り返ってみて、この会議が私にとって実りの多いものであったと思えるのは、私を取り巻く全ての人々のおかげと言えるだろう。

（浅野容子）

●JASC は私にとって、見上げるごとく高くそびえ、かつ長い壮大なトンネルでした。…しかし私はそこに入る前と出た後ではまるで方程式にかけられたように、気がついたら X が Y になっていたような感にとらわれてなりません。その方程式はトンネルのブラックボックス性ゆえ問いのまま残しておくとしませんが、ただかけがえのない友人たちがそこに加味していることだけは確信しています。

（今井真琴）

●でこぼこ道でブレーキをかけることも、徐行することも許されなかった実行委員としてのこの1年と1ヶ月間、とにかくハンドルを必死に握って真っ直ぐ進むだけで精一杯だった。…自分の中に存在していた制限速度を大幅に越え、アクセルを思いっきり踏み込んで、そして行き着いた先は新しい自分だった。

（大木愛）

●今年の JASC は、自分の学生生活における最後の夏休みを締めくくるものとしては最高のものだった。

（大島陽介）

●7月20日から始まった会議は「本当にあっという間に終わってしまった」という一言で片づけてしまうのは嫌だという気持ちがある一方で、これ以外の何ものでも表現できないくらい私の全集中力を捕らえてしまった。…それはこれまでの21年間という私の人生を凝縮してしまっただけくらい濃いものだったとって過言ではない。

（鍵田亜基）

●一番の収穫は「こいつはすごいな。」と思わせる人間に出会ったことだ。学術的水準に関しては、やはりというか限界を感じた。…またアメリカ側の日本と向き合う姿勢にやや幻滅したのも事実である。

（粕谷浩和）

●日米学生会議が僕個人に与えてくれたものは、僕以外のすべての他者との人間的、学術的コミュニケーションを営むチャンスであった。僕はこのことを通じて、自己を見つめ直すこともできたし、アカデミックな分野での新しい視点を獲得することもできた。

（金子彰一郎）

●自分という人間が一体どういう人間であるのか考える機会が与えられ、少しわかってきたような気がする。人間として尊敬できる人と多く出会い、影響を受けた。

（川添菜津子）

●会議前も会議中も、自分の役割が何なのかよくわからないまま過ごしてしまった時も多かったと思う。…ただ62人という大組織の中でいろいろな感情に触れることができたのは、月並みだけど、一生消えない記憶になるんだろうと思う。

（木田悟史）

●日米学生会議に申し込み、果てには実行委員まで務めたことに自分でも驚いているのであるが、本当に恐れずに飛び込んでみてよかった、と思う。…人は人との関わり合いの中で磨かれていく、ということを実感した。

（小林美和子）

●無我夢中。この1年を振り返ると、まずこのような言葉が頭に浮かぶ。夏の本会議に向けて、とにかく JASC にどっぷりと浸かった1年。遠回り、行き違い、迷子、行き止まり。様々なレベルで、色々なことがあった。しかし、今の私は素直に、これらの経験は全て私の人生にとって不可欠な要素なのだ、と断言できる。

（嶋田浩子）

●自分と全く異なった価値観を持つ人々と、1ヶ月間の共同生活を送ることによって新たな視点を取り入れながら、自分の価値観を再構成することができたことが一番の収穫である。…また、自己反省も含めてであるが、会議全体としても反省すべき点が二点ある。一点目は、社会生活における最低限のルールが守れていなかったということである。…そして二点目は全体的に他人の考え方を理解しようとする努力が欠けていたことである。この努力不足によって失われたものは結構大きいかもしれない。

（清水道成）

●それぞれ全く違うバックグラウンドを持った人達との1ヶ月間にわたる集団生活、異文化との接触、公式なフォーラムやレセプション…。学生だからこそ持っている可能性を最大限に追求しようとする人々に囲まれて、私は今までにないカルチャーショックを受けました。

(庄子薫)

●私はまだ 51<sup>st</sup>JASC という「乗り物」から降りたばかりであり、今後新たな環境の中で自分自身に挑戦していく時に、ふつふつと自分の変化、そして JASC で出会った人々、体験してきたことの意義を再確認していくのだと思う。

(須賀川朋美)

●1ヶ月の集団生活、時には嫌になることもあった。けれど本会議を終えて心から「参加してよかった」と言える。

(田中大樹)

●The 51<sup>st</sup> Japan-America Student Conference has, by far, been the best experience that I have had since I came to Japan a year ago. On top of that, I can say that it has been my most academic experience since I became a college student for numerous reasons...

(Brett Dohnal)

●私が日米学生会議で最も感じた「快感」といえばグループワークの楽しさであろう。60人強の人間が一つの目標に向かって突き進む、そのパワーと達成した時の充実感。その快感に目覚めさせてくれたのが日米学生会議であった。

(夏目高平)

●JASC の1ヶ月間は私にとって実践の場であったと思う。大学でパブリック・スピーキングやディベートのクラスをとり、ゼミでコミュニケーション批判を学んでいる私にとって JASC という一つな大きなテキストを多角的に、かつ批判的に分析することで現代社会の一部を垣間見ることができた。

(西平奈々子)

●何も武器を持っていない自分にできることは、まず相手と議論する以前にアカデミックではない部分で互いに信頼関係を築くことだったのだと思う。…従って、結果的にはこの会議で提供された「交流」という側面は、自分にアカデミックな議論をするための基礎を築くチャンスを与えてくれたようだ。

(林徹郎)

●本当に中身の濃い1ヶ月だった。普通の社会生活が凝縮したような1ヶ月だった。こんな機会を与えてくれた JASC に感謝し、JASC にもっと関わりたいと思い、実行委員に立候補した。

(平林優)

●1ヶ月前、みんなのことを知らなかったことが不思議に思えるほど、いろんなことを語り、ともに成長していった。考えてみればたったの1ヶ月。人生で最も濃い1ヶ月だった気がする。…その濃い1ヶ月の中で、確実に自分の中で変化があった。

(由尾瞳)

日本側参加者のメンバー





## 第51回日米学生会議を経て

### 全体の評価—日米学生会議の社会的意義を考える

矢野こずえ

日米学生会議に参加したことは、私にとって、1999年の夏の最高の過ごし方であった。個性的な参加者たちとの出会い、更にフィールドワークの中での社会人との出会い。これらの出会いが人生の中で、最も得難いものとなるに違いない。また、更に学生会議の経験は社会と自分自身の関係性を考える上で、またとない経験であったように思う。内部的な批判があることは事実であろう。学生会議を行う社会的意義が喪失しているように感じているものも多くいた。しかし、日米両国の学生が対等な立場で、率直な意見を述べ、交歓することは、大変ユニークであることは間違いなく、今後も是非このような機会を設けることを期待したい。

これから第51回のテーマ「検証そして創造へ—新たなる日米関係」に即して、学生会議の社会的意義を考察することにしたい。

第51回のテーマの趣旨は、国家、国益の視点から日米関係を検証することであった。「国家」とは何か、という大変重要でありながら、定義さえも難しい概念から議論を立ち上げることは、参加者にとって非常に挑戦的であった。現在、多くの言説は「グローバリゼーション」という言葉に流され、現実の社会は国家機構なしには機能できないにも関わらず、各個人は国家を越えた世界的視野を持つことが切望されている。しかし、世界的視野とは、すなわち一体どういう世界に自分が生きているのか、という問いに真摯に答える試みによって獲得できるものではないだろうか。すなわち、自分自身がいかなる社会システムによって活かされているのか、ということを考えることである。これは自分でも気づかない「国家性」を浮き彫りにすることが要求されるだろう。国家は、決して内側からは見えてこない。自分自身のパーソナリティーを自分で認識するのが難しいのと同様である。学生会議のプロセスの中で、様々なバックグラウンドを持つ個人が自らの世界観を相対化し、そこから新たな視野を獲得する方法論が試されたはずである。日本の歴史的な経緯、米国の文化的な背景、共有できる問題（もしくはすべき問題）、各国が個別に解決すべき問題などが明白になった。この意味で「国家性」を検証するという目的はある程度達成されたと言える。そして、我々が今後、どのような視点を置くべきかという議題も曖昧であるが見えてきたに違いない。

私は、上に指摘した点が学生会議の社会的意義を問う時、更に私たちが何をなしたかという問いへの答えになるものであると思う。なぜなら、政治力も経済力もない学生に社会が求めていることは、現在の社会を的確に認識し、未来の処方箋を考える機会を持ち、それに取り組むことであるからである。残念ながら私たちの意見が、現在の社会に反映されることはほとんどあり得ない。私たちの見識が政治的な力を持つには、私たちは未熟すぎる。学生という立場を的確に、そして謙虚に考えれば当然と言える。しかし、私たちが将来何らかの問題領域で、具体的な解決を見出し、実行する社会的責任を負うことは間違いがない。その時に、1999年に行われた日米学生会議が糧となって、実行力のある個人が誕生することを信じた。

## 残された課題

木田悟史

今、会議が終わって1ヶ月経った後に冷静な目で振り返ってみると、良かったところも悪かったところも見えてくるように思う。まずこの会議がこれから先も続いていくことを考えた時に何が一番重要なことなのかを考えてみたい。会議に参加する前も、参加している間も、果たしてこの会議は何のためにあるのだろうか、という疑問が絶えずあった。この疑問は、会議前に、参加者の中の何人かの間で議論がなされることはあったが、会議が始まってから、日本側、アメリカ側、両参加者を巻き込んでの本格的な議論がなされることはあまりなかったように思う。そうしたことが初めて議論され始めたのは、次期実行委員を選ぶ時になってからだったように思う。

終わってから言うのは非常に無責任なことだとは思いますが、私個人としては、もっともっとこのことについての議論がしたかったし、またこれからもなされるべきだとも思う。そうした議論には時間がかかるものだし、しんどくもある。ただ全員が何故自分はここにいるのか、ということを理解しようとする努力もしないまま、誰かに勝手に作られたコンセプトに沿って流されていってしまうということになっては非常に危険だし、それでは学生という、どのイデオロギーからも自由であるという存在価値も薄れてしまうと思う。

会議は何のためにあるのか、この単純な疑問を忘れずに、これからの参加者にもがんばっていてもらいたい。

第51回に集まった参加者全員は一人一人本当に素晴らしい能力と可能性を持った人たちだと思います。こうした人たちに会える機会を作ってくれた実行委員のみんなと、それを陰で支えて下さった方々に改めて御礼を申し上げたいと思います。

## 日米学生会議批判―「破」の心がけ

大島陽介

僕は日米学生会議（以下 JASC）中、本会議について積極的に批判をしなかった。だから、何を今更と思う人もあるかもしれない。しかし、これからの JASC / JASCer に意見を最後の機会でもあるこの場を借りて、自分の考えを述べてみたい。

まず、JASCに参加する前に自分が思ったことを箇条書きにすると、

- 1 国を主体とした「国際」交流はもはや時代を創造することはできない
- 2 現在の日本人は深い考察を行わずに、グローバルスタンダード崇拝あるいは日本特殊論などといった極端な自己否定、自己肯定に走りやすい
- 3 我々学生は既成概念、既成事実を打ち破るほどの活力を持ち合わせていない

の三点があった。つまり結論を先にいうと、JASC は所詮過去の踏襲に終始する限りにおいて、未来を変えるほどのものにはならないと。日米という国に捕らわれた議論、西洋 vs. 日本という二項対立的な考え方、反社会的な気骨をもっていない学生、そういったものを集めれば、それはもうありがちな結論しか望めないだろうと。そういった偏見をもって会議に臨んだのである。

もちろん、過去の JASC の形式を尊重するような会議に意味がないわけではない。日米学生の交流を通じた相互理解、また優秀な他学生との共同生活による友情、相互啓発など、その意義は計り知れない。グローバル化といわれながらも世界認識に乏しい。あるいは、大学の形骸化が極まりアカデミックな交流がほとんどない。このような日本に JASC のような会議がある。それだけでも満足すべきことではある。しかし、本会議をこの満足だけで終わら



せてしまって良いものだろうか。与えられた「日米」、「国家」などの概念を疑問もなく使い、教科書通りの議論を繰り返すような状態で満足すべきなのだろうか。

昔、ものごとを極めるのに必要なのは「守」、「破」、「離」だと聞いたことがある。

「守」：最初は既存の良いと思われる手本に習い、それを真似る

「破」：ある程度習熟したら、その手本に敢えて逆らう

「離」：次第に自己流を獲得し、手本を越えるものを創造する

この時、「守」にのみ終始するものは、所詮猿真似の域を出ることはなく結局その手本を越えることはできない。つまり、より良いものを目指そうとする限り、敢えてリスクをとってその手本に逆らうこと、「破」が大事なのだという。手本に意識的に反逆することによってその手本の改善すべき点が明らかになる。そして思考錯誤の結果、最終的に手本を「離」れ新しい境地に至ることができるのだ。

残念ながら、現在の我々にはこの「破」の部分が欠けていたような気がする。何故「日米」。何故「国家」。何故？一通りの議論が成立する以前にも疑問を投げかけなければいけないことがあまりにも多い。もちろん、高度なレベルでの議論を1ヶ月という短期間で実現させるためにはこれらは常識として納得されなければいけないのかもしれない。

しかし、これでは新しいものは生まれてくるはずもない。これまで交わされてきた議論の枠組みを受け継いでそのまま議論するような態度では、結局これまでの議論を越えるものは生まれてくるべくもない。そしてその結果、JASC はただただ居心地の良い空間として、学生の交流を促す場として継続されていくのである。

そこで、これからの JASC / JASCer へは、「破」を心がけることを期待したい。そして今まで築き上げられてきた既成概念に対してチャレンジして欲しい。例えば、JASC に言及するならば、日米学生以外の学生を招待したりして日米以外の観点を盛り込んだり、実行委員を日米の分け隔てなく選挙したりすることなどが考えられる。あるいは、全く日米に関係のないような事象について日米双方の考え方の違い、対応などを検討してみることも面白いかもしれない。もちろん、これらは全て実験的な事柄でそれが果たして良い結果をもたらすかどうかは定かではない。しかし、これまでの慣習を「破」らずして、今までの自分たちを越えることは不可能なのである。異なったことを試してみる。その過程を経て初めてより良い結果が得られるものだというのを私は確信している。ずいぶんと長くなってしまったが、以上が今回の JASC に参加して考えたことである。

振り返ってみると、今回の JASC は予想以上に充実していた。防衛大をはじめ、色々な場所を実際に訪れたり、様々な方の貴重な話を直接聞くことによって他では全く得られないような経験の連続だった。そして、そのような実体験は今までの机上のみの勉強よりもはるかに大きいインパクトをもっていた。また、JASCer との良き出会い、深夜の語らいを通じて自分というものを見つめ直し、少しは人間的にも成長できたような気もしている。それだけに、このような素晴らしい機会を作ってくれた第 51 回の実行委員、JASC の先輩方に改めて感謝したい。ただ、最後に一つ欲を言わせていただくのならば、もっと形式に捕らわれない JASC があっても良かったのではないかと思う。常識を破って、破って、破りまくる。「えっ？」と思わせるものを実行してみる。このような気概があつて初めて新しい、面白いものが生まれるような気がする。

## 日米学生会議を通して見たアメリカ

夏目高平

学生会議で私が痛感したのはアメリカの多面性と多様性である。私はアメリカに3年間住んだ経験があり、多少なりともアメリカ人の認識があったが、その認識を一変させ得る多様性をこの会議の参加者で見た。それは様々な文化が織りなすアメリカ文化であり、様々な人種が溶け合うアメリカ人であった。

私のアメリカ3年間の経験はシアトルに2年、ワシントンDCに1年である。前者は小学校2から4年の時、後者は大学生3年に交換留学生としてであった。そこで得たアメリカの認識というのは単純明快であった。俗に言われるWASP(White, Anglo-Saxon, and Protestant)が中心となりその周辺をマイノリティー文化(アフリカン・アメリカン、ヒスパニック、アジア、ネイティブ・アメリカン)が交わることなく並存しているといういわゆるサラダボウル(トマト、レタスのように混じることなく同じ容器に入れられている状態を指す。同様にサンドイッチとも言われる)状態であった。大学でFamily and Societyという授業を取ったが、そこでも各人種ごとに家族と社会環境は違うと度々強調されていた。例えばアフリカン・アメリカンではこういった問題・ケースが多いがヒスパニックは違う、といったことである。また比較文化を勉強しているクラスが行った劇を観る機会があったが、そこでも同様の傾向が見られた。アメリカ文化が多様な文化の集合体であることを認識し、そこから一つの文化として練り上げることをその劇は唱えたものだったが、劇の参加者はそれまで自分の人種(Their own kind)以外の人と親しく付き合ったことがなかったようだ。よって私のアメリカの認識は、サラダボウルで最も大きな位置と影響力を持つWASPと結び付いた。つまり他のマイノリティーを意識しつつも、アメリカ人と文化はWASPというイメージが幸か不幸か私に定着したのである。

しかし、会議の参加者と彼らの行動を通して、このイメージを多少なりとも改めなければならなかった。まず驚いたのはアメリカ参加者の人種の多様性である。肌の違う人種間で生まれた混血児(以降ハーフという)が4人いた。私の3年間のアメリカ生活で見たハーフの人数は五指にも満たない。これは少なくとも私にとって驚異的な数字だ。その上マイノリティーが多く参加者のマジョリティを占めた。アフリカン・アメリカン、ヒスパニック、インド、アジア、ユダヤ系がいた。イメージしていたアメリカ人と全く違った陣容に私は最初言葉もなかった。

更に驚いたのはそのマイノリティーの文化を彼らは色濃く残していたことだった。特にユダヤ系の参加者は食事・宗教儀式に厳格(彼女は普通だと言っていたが日本側の参加者の間では厳格と見えた)に追従している様は私にとって非常に新鮮であった。金曜の夜から土曜の夜にかけて、その参加者は宗教上の理由から一切の行動をとれなくなる。厳密に言えば考えてもいけないようだ。次の日曜日に控えている発表に向けてその参加者がいるテーブルは大わらわであった。私はテーブルメンバーに同情する以上に、その宗教の伝統がアメリカに息づいていることに驚きを禁じ得なかった。

もちろん会議の参加者を見ただけでアメリカ人と文化の認識を一変するのは早計である。それは会議の特殊な環境にもよるだろう。つまり日本というアメリカではマジョリティでない対象に興味を持ったアメリカ人は、やはりそういった背景をもちうる可能性が強い。また一部のアメリカ人によると、アメリカ人自身もこういった自分たちと違う人種が多い環境は初めてという人もいたようだ。

日米学生会議という限られたフィルターを通してアメリカを見たのは、しかしながら有意義であったと思う。そこで私は、まだ弱い勢力ながらもMixed Cultureが確実に台頭していることを感じ取った。それを目の当たりに体験できたことが日米学生会議で得た数々の素晴らしい経験の一つとして特筆すべきことだろう。



## 実行委員の目を見た第51回日米学生会議

国際交流のプログラムとは異なる日米学生会議

富士岡篤臣

日米学生会議は日米双方の参加者の中から実行委員を選ぶ。そして、その選出された実行委員が、次の会議の実施に向け活動を行う。今回の会議の実行委員として感じた問題点をここに書きたいと思う。

日米双方の実行委員が一堂に会することができるのは、会議前には一度、前回の本会議最後に設けられる新実行委員ミーティングしかない。その後、本会議開催までは、日本側、あるいは米国側というようにしか集まることはできない。よって、日本側、米国側は電子メール、FAX、電話でしかやり取りすることはできない。そこで、新実行委員は次の会議開催のために新実行委員ミーティングにおいて3日間ぐらい寝る間を惜しんで議論をし、テーマ、テーブル等を決定し、大まかな方向づけをする。この時には、自分たちの目標は同じで、実行委員全体が一つに感じられる。しかし、これは幻想である。一年間活動を行うにつれ、個々人の意識、考え方の違い、日米という環境の違い等から、大きく目指すものは同じだとしてもさまざまな意見の対立が生じる。

今回の会議で一番大きく目立った違いは、会議をどのようなものとして捉えるか、である。日米学生会議の目的は、日米双方の学生の知的交流を通じた相互理解の促進にある。この大枠では一致している。しかし、日本側では、日米学生会議という名前が示すように、「会議」であるとみなして参加する。だが、米国側は「会議」ではあるが、それよりもむしろ国際交流プログラムであるという意識の方が強いように思われる。つまり、日本側の参加者は議論を目的として参加するが、米国側参加者は、日本に興味があって参加する。

日本という国は、多くの米国人にとっていまだ極東にある小さな島国の一つでしかない。よって、日本に興味を持つ学生の数も少なく、その知識も限られていることが多い。だが、日本にとって米国は常に一番最初にあげられる外国である。米国に関する情報はどんなものであれ日本中あふれかえっている。また、特に当会議に応募する日本の学生は、好奇心が旺盛であり、一般の学生と比べてもその知識量は多いと言えよう。このように、最初の時点から日米の参加者間には、一般的に互いに対する理解度の差が大きくある。更に、日本側参加者は、事前に合宿を行い、本会議開始まで学ぶ。米国側は地理的な問題等を含め事前に合宿等を行うことはできず、主に電子メールのみを使い連絡が取られる。しかし、米国ではすぐに休暇にはいってしまうため、連絡がとれなくなることもままある。このような状況では、日米間の知識、勉強量の差は拡大する一方である。議論というのは互いにある一定以上の知識があった上で成立する。そうでなければ、どちらかが知識を相手に教えるということになる。これでは議論はできない。今回の会議はよりアカデミックな会議にすることで日米双方の実行委員は合意していた。しかし、結果的には互いの目指しているものに大きな差があった。

この実行委員会内における意識の違いは、日米の実行委員会が置かれている環境からも生じているように思われる。日米学生会議が設立された当初、1934年にはこのような学生団体は日本には他に存在しなかった。第二次世界大戦以前に、海外に行くということは非常に難しかったはずである。そのような状況下で、日米双方の学生が会議を行う、あるいは互いに交流するということはそれだけで大きな意味があった。しかし、現在は状況が異なる。大学生の大多数が海外に行った経験があり、また、留学自体がそれほど珍しいものではなくなった。そのような中で少なくとも日本においては、国際交流というものだけを存在意義とするならば、日米学生会議が存在する必要はない。他にも類似の団体は多くある。日本側実行委員は、会議運営のため財務活動を行うのでそのことを特に強く感じる。米国側実行委員は財

務活動を行うスタッフが他にいるため強く意識することはなく、また社会にこのような会議を受け入れる土壌がある。

日米学生会議には国際交流だけではない何かがある。これは、日米双方の参加者とも感じることである。日米学生会議として、会議の参加者として、社会に対して何ができるのかを本気で考える、これこそが日米学生会議を日米学生会議たらしめているものではないだろうか。会議の創設者の方々は、戦前の日米関係をよいものにしようと真剣に考え会議を行っていた。その精神を受け継ぎ、夢や理想を語り、それを実現するような会議であることが、日米学生会議を存続させていく根拠となるのである。

## 第 51 回日米学生会議を実行委員として振り返って

原田曜平

今回の第 51 回会議の特筆すべきポイントを二つ挙げる。

第一点目に、自分たちの方から積極的に働きかけて「マスコミ」を会議にしばしば入れたことである。昨年、NHK の 1 分間ニュースで第 50 回会議のシカゴでのフォーラムの様子が映されたが、第 51 回会議ではよりたくさんメディアを利用した。広島では「原爆」について日米の学生・広島市民で議論した。その様子が 1 時間番組となって NHK で放送される予定だ。また、北海道では北海道テレビの「ディベート北海道」という番組に出演した。東京では首相官邸で小淵総理を訪問してお話しをした。その様子が小さいながらもほとんどの新聞で掲載された。

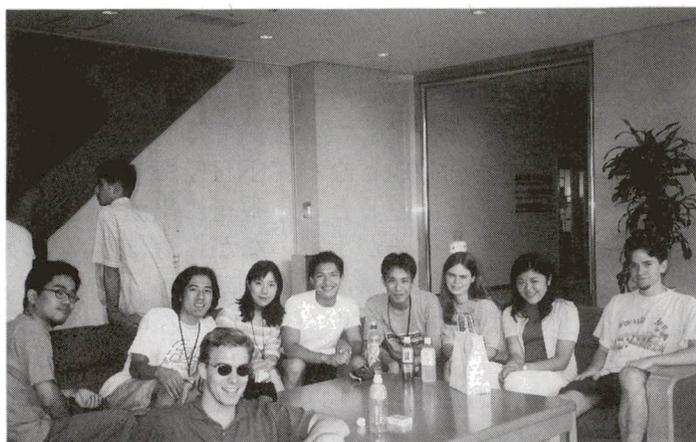
「メディアを入れると学生の純粋な議論が捻じ曲げられて世間に伝えられる可能性がある」…そういった意見が主流であった時期もあるだろう。しかし、僕たちはメディア利用に積極的にチャレンジした。理由はいくつかある。一番の理由は、「日米学生会議は学生の自己満足で終わってはいけない」という考えに基づくものである。つまり、我々は多くの賛助団体から資金援助をいただいている以上、ただ内輪でフォーラムや報告会を開くだけでは学生の自己満足に終わる、という考えである。メディアを通じて学生の活動している様子や意見を世間に発するべきだ、という考えである。

二点目は、あくまで議論をベースとした「アカデミック」な「会議」であることを意識したことである。JASC は「交流」の場か？純粋に「会議」をする場か？この議論は毎年必ず行われる。ここからは私見になるが、JASC は結局は「交流」の場になると思う。3 ヶ所もサイトを周り、いろいろなイベントを行いながら 1 ヶ月という長い時間を過ごす。これでは「JASC は純然たる会議」とは到底言えない。また、学生が学問的に素晴らしいプロダクトを出す」ということは可能であろうか？専門家に考えつかない学生なりの視点などあるのだろうか？おそらく答えは「ノー」であろう。しかし、結果から見ればアカデミックな会議になることは不可能であったとしても、それを目標として努力することの意義は非常に大きいと思う。学生時代とはどんな時代か？僕は「結果にとらわれずに自分の将来を模索したり、自分の能力・人間性を高める最後の自由な時間」と定義する。「結果にとらわれずに」というのは、裏返して考えると、つまり、天才ではない僕たちには「結果」なんて出せるわけがないことを意味する。社会に出たら「結果」が全てかもしれない。しかし、学生時代はむしろ「過程」が全てなのである。「結果」を出そうと全力で努力して、それで自分の将来への道が切り開けたり、能力的・人間的に成長できたらそれでいいのである。賛助して下さる団体も「所詮学生のすること…」と思いながら、一方では、「おっ、意外にがんばっているな。」と微笑んでくださっているのだろう。だから、僕たちのできる精一杯のことはあきらめずに必死にもがき苦しむこと。それが支えて下さる全ての人々に対する僕たちの誠意の示し方だと思ふ。つまり、JASC は「結局は交流の場で、素晴らしいプロダクトなんて出せるわけがないのだが、めげずに努力し、その過程で参加する学生が能力的にも人間的にも成長する場」



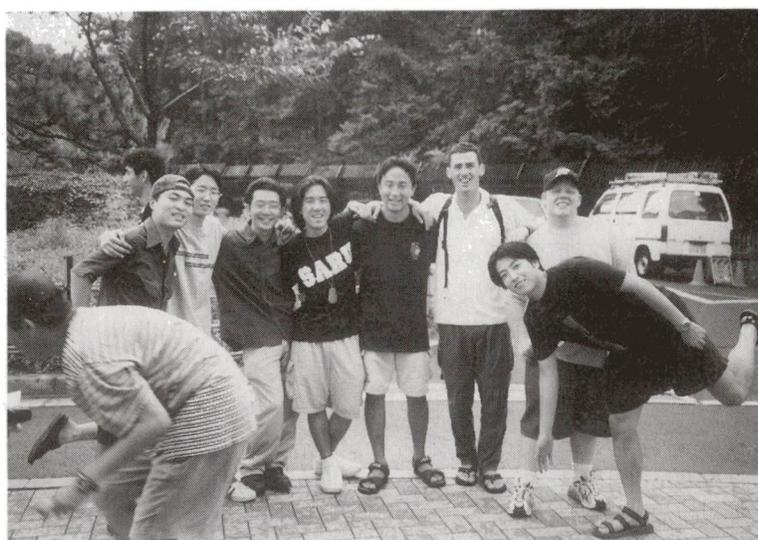
と定義付けられるだろう。僕の定義に従えば、アカデミックな会議であろうと意識してがんばった第51回会議は大成功だったと言えると思う。

以上は第51回が強調した点である。今後の会議もそれぞれの会議の特殊性アイデンティティー・持ち味を持ってくれることを望む。会議のマンネリ化だけは避けてもらいたい。実行委員はおおばか者になって「俺たちは過去にない会議を作ってやるー!!」と意気込んで進んでいってほしい。



立命館大学衣笠セミナーハウスにて

国立オリンピック記念青少年総合センターにて



# 第52回日米学生会議概要

(1999年11月1日現在)

## 1: 総合テーマ “Developing New Approaches to Promote Social Change”

「次世代社会を構築する新たな方法論の創出」

21世紀を目前とし、変貌を余儀なくされている日米関係が、次世代の社会の中でいかなる役割を果たすことができるのか。日米学生会議が当初から掲げる理念「世界平和の実現」を構築していくためには、現在の混沌とした世界のシステムを客観的に分析し、何が、なぜ、求められているかを見出し、そうした検証のもとで多国間及び多様なアクターとの対話・協調体制を可能とする方法論を創出することが求められている。社会の現状を長い歴史から掘り起こし、我々の将来を現在の利害関係の延長線上から分析するとともに、自由な発想及び柔軟な構想力を持つことができる学生という立場で、改めて今後の日米両国及びその二国間関係のあるべき姿を検討していきたい。

## 2: 日程 2000年7月23日～8月21日

### 3: 開催地 (予定)

7月23日～7月27日 Honolulu, Hawaii (Tokai University)

7月28日～8月 5日 Chapel Hill, North Carolina (University of North Carolina, Chapel Hill)

8月 6日～8月 7日 Washington D.C.

8月 8日～8月 9日 New York

8月10日～8月21日 Cambridge, Massachusetts (Harvard University)

## 4: 参加者 日本側32名 (実行委員8名を含む) 米国側32名 (実行委員8名を含む) 合計64名

## 5: 本会議内容

「新たな方法論」を創出するために、私たちは多角的な分析を行う必要性を感じ、16の議題を設けた。うち、8つの議題は分科会として、会議を通じて議論される。残りの8つはスペシャルトピックとして取り上げられ、参加者全員によって議論される。

更に、ボランティア活動及び、フィールドトリップを行い、机上の議論にとどまらないための現状把握にも努める。52回会議の最終的な目標は、それぞれの議題から導き出されるソリューションをフォーラムという場で結集し、次世代社会を担う我々が、今後の日米関係さらには国際社会をどのように形作っていくべきかという方法論を創出することとする。

### <分科会>

1. 日米関係の変遷
2. 異文化間コミュニケーション
3. ビジネス
4. 通商政策
5. 開発政策
6. 環境
7. 国際法・国際政治
8. 多国間関係(主に日・米・中)

### <スペシャル トピック>

1. 偏見・差別
2. 日系人強制収容所
3. 宗教と哲学
4. マス・メディア
5. 芸術
6. 国際連合
7. 政策過程
8. 歴史認識(太平洋戦争)



＜コミュニティーサービスデイ＞

日米両国の学生が協力し合い、現場に出て実際にボランティア活動を行うことで、アメリカ地域社会への理解を深める。

＜フィールドトリップ＞

各テーブル及び、いくつかのスペシャルトピックにおいて、その議題に関連する現場検証を目的としたフィールドトリップを行う。

6：第52回日米学生会議実行委員

＜日本側実行委員会＞

鍵田亜基	慶應義塾大学総合政策学部
金子彰一郎	法政大学法学部法律学科
田中大樹	立命館大学政策科学部政策科学科
Courtney Crean	筑波大学文部省研究生
塩崎哲也	青山大学法学部法学科
須賀川朋美	慶應義塾大学法学部政治学科
林徹郎	東京大学教養学部
平林優	筑波大学医学専門学群

(計8名)

＜米国側実行委員会＞

Chazara Clark	Howard University
Colin Warner	Stanford University
Eileen Ryan	University of North Carolina
John Bechtold	Thunderbird
Larry Rosales	New York University
Martina Martin	Howard University
Naila McKenzie	Harvard University
Sarah Richter	University of Nebraska

(計8名)

7：第52回日米学生会議への抱負

第52回日米学生会議実行委員会  
日本側実行委員長 須賀川朋美

20世紀最後の年。それは世界中の人々が注目する年であり、私たちは何か新たなものが生まれてくるという漠然とした期待と不安のようなものを抱いている。

第51回の会議を通して、私たちは自らの将来やより広い視野に立った未来を改めて確認することができたのではないか。51回行われてきた日米学生会議の歴史は、そうした両国学生の確認の積み重ねであったと思う。

こうした新たな千年紀を迎える年に第52回実行委員会が結成された背景には、次の時代を担う立場にある学生がこれからの社会をどのようにしたいのかを「確認」とともに、今後どのように行動すべきかを発信する場を提供していきたいという大きな期待が込められている。

学生ならではの理想を掲げながらも、次世代を担う個人としての責任と行動力をもてる人材を、第52回日米学生会議で生み出していければ幸いである。



第52回日米学生会議実行委員会

# 第5章

第51回日米学生会議日本側参加者  
第51回日米学生会議米国側参加者  
会議開催に御協力下さった方々



## 第 51 回日米学生会議日本側参加者

安里周悟	琉球大学	法文学部法政学科 4 年
浅野容子	早稲田大学	政治経済学部政治学科 4 年
糸永洋三	慶應義塾大学	商学部 4 年
今井真琴	同志社大学	経済学部 3 年
大木愛	都留文科大学	文学部英文学科米文学専攻 3 年
大島陽介	東京大学	経済学部経済学科 4 年
鍵田亜基	慶應義塾大学	総合政策学部 3 年
粕谷浩和	慶應義塾大学	商学部 4 年
金子彰一郎	法政大学	法学部法律学科 3 年
川添菜津子	筑波大学	第一学群人文学類 2 年
木田悟史	慶應義塾大学	環境情報学部 4 年
小林美和子	筑波大学	医学専門学群 3 年
塩崎哲也	青山学院大学	法学部法学科 2 年
嶋田浩子	慶應義塾大学	文学部人間関係学科社会学専攻 4 年
清水道成	京都大学	総合人間学部人間学科 2 年
庄子薫	聖心女子大学	文学部国際交流学科 2 年
須賀川朋美	慶應義塾大学	法学部政治学科 2 年
田中耕一郎	富山医科薬科大学	医学部医学科 4 年
田中大樹	立命館大学	政策科学部政策科学科 3 年
夏目高平	早稲田大学	政治経済学部政治学科 4 年
西平奈々子	青山学院大学	文学部英米文学科 3 年
林徹郎	東京大学	教養学部理科 I 類 2 年
原田曜平	慶應義塾大学	商学部 3 年
平林優	筑波大学	医学専門学群 4 年
富士岡篤臣	北海道大学	経済学部 3 年
Brett Dohnal	大阪外国語大学	日米関係研究生
矢野こずえ	筑波大学	第三学群国際総合学類科目等履修生
山崎繭加	東京大学	経済学部経済学科 4 年
由尾瞳	Yale University	Literature, Sophomore
吉村光歩	大阪大学	法学部法学科 3 年

## 第 51 回日米学生会議米国側参加者

Blaine Baldwin	University of Kansas	Business / East Asian LC
Tori Barber	Wesleyan University	Cultural Anthropology
John Bechtold	Thunderbird	International Management
Tamar Brown	Smith College	American Studies
Chazara Clark	Howard University	International Business
Karen Clarke	Howard University	Management
Jennifer Connelly	Mount Holyoke College	Asian Studies/Politics
Courtney Crean	Georgetown University	Japanese
Holly Drygas	University of Alaska	Japanese Studies / Business
Samiya Edwards	University of Maryland	Journalism / Japanese
Christine Ely	University of Missouri	Biology
Shira Fisher	Harvard University	Biochemistry
Brian Hagenhoff	University of Kansas	Accounting / Japanese
Deepa Madhavan	Mills College	Computer Science
Nancy Malvin	Howard University	International Business
Martina Martin	Howard University	Political Science
Eiko Maruko	Harvard University	History
Naila McKenzie	Harvard University	East Asian Studies
Wright Meyer	Univ. of NC, Chapel Hill	Economics / Int'l Studies
Lakisha Mitchell	University of Missouri	Marketing / EAS
Edward Papabathini	DePaul University	Business & Admin.
Athena Pantazis	Univ. of NC, Chapel Hill	History / Math
Joshua Pople	Sacred Heart University	Chemistry
Beatriz Ramirez	Campbell University	International Business
Sarah Richter	University of Nebraska	Marketing
Larry Rosales	New York University	Economics / EAS
Jodie Roussell	Georgetown University	Chinese / Linguistics
Eileen Ryan	Univ. of NC, Chapel Hill	Religious Studies
Aindree Sircar	University of Maryland	Psychology
Jason Totten	West Chester University	Computer Science / History
Colin Warner	Stanford University	Human Biology
Jessica Wolf	Harvard University	East Asian Studies



## 会議開催に御協力下さった方々

### 第51回日米学生会議主催・後援

主催 財団法人 国際教育振興会

後援 外務省、文部省、米国大使館、国際教育交換協議会 (Council)、日米文化センター

### 会議開催協力 (敬称略)

#### ●第51回日米学生会議全般

財団法人 国際教育振興会 理事長  
理事・事務局長  
総務広報部部长  
総務広報部  
国際教育振興会賛助会 事務局長  
事務局

JASC Inc. 理事長  
専務理事

米国大使館 文化事業部 一等書記官

日米学生会議 OB 会  
京王観光 株式会社  
株式会社 日本エアシステム  
株式会社 実業広報社

#### ●講演会講師

前駐米大使 現国際基督教大学 早稲田大学客員教授  
株式会社 岡本アソシエイツ 代表

#### ●本会議前フィールドトリップ

文部省 初等中等教育局教科書課 教科書企画官  
学術国際局国際企画課 庶務係長  
厚生省 大臣官房統計情報部 保健統計室長  
三菱商事 株式会社 会長  
秘書室長  
総務部秘書室  
三井物産 株式会社 業務部 総合情報室長  
株式会社 岡本アソシエイツ 代表

サンコーコンサルタント 株式会社 取締役  
防衛大学校 陸上防衛学教室 二佐  
教授 一佐

東京大学 法学部 教授  
慶應義塾大学 商学部 教授

#### ●事前その他

デービーソフト 株式会社 代表取締役

山室勇臣  
鈴木堯  
稲田脩  
相澤初恵  
伊部正信  
北原聡子  
小斉恭子  
Jack Shellenberger  
Grechen Donaldson  
Akiko Clayton  
Helen McKee  
松元美紀子

栗山尚一  
岡本行夫

甲野正道  
大村浩志  
瀬上清貴  
檜原稔  
山口寿夫  
御手洗直子  
寺島実郎  
岡本行夫  
平間純代  
大場昭  
柳川憲司  
新治毅  
北岡伸一  
和気洋子

古谷貞行

広島大学 教育学部 教授  
財団法人 世界平和研究所 理事長  
日本経済新聞社 編集局 地方部長  
記者  
読売新聞社 ぴーぷる編集部 記者  
国際教育交換協議会日本代表部 国際交流促進部 主任  
外務省 北米局日米安全保障条約課  
日本電気 広報部社会貢献室  
荒川奈央子  
井上敏之  
岩崎洋一郎  
大高巽  
田端利夫

竹本秀人  
中瀬正一  
松居泰三  
山崎秀之  
山田勝

二宮昭  
大河原良雄  
秋山光人  
榎本祥子  
林弘典  
掘越敏明  
加納雄大

小林久夫  
嶋田啓作  
原田徹  
山崎琢矢

●京都開催協力

立命館大学  
京都府知事公室国際課  
立命館大学 総長  
教務課  
学生センター

京都市会議員  
京都大学大学院 人間環境学研究科 教授  
京都大学大学院 経済学研究科 教授  
京都大学 法学研究科 助教授  
堀場製作所 広報部  
京セラ 株式会社 広報部  
明治鍼灸大学 第三生理学教室 教授  
明治鍼灸大学 臨床鍼灸医学教室 教授  
明治鍼灸大学 臨床鍼灸医学教室 助手  
明治鍼灸大学 大学事務局庶務部長

長田豊臣  
山本修司  
松井かおり  
北川明  
佐伯啓思  
大西広  
中西寛  
中村勝美  
岩間美希子  
川喜田健二  
矢野忠  
石崎直人  
森正彦

●広島開催協力

広島市長  
広島市 市民局国際平和推進部  
財団法人 広島大学講師・広島平和文化センター前館長  
広島平和のリボンの会 代表  
HIP 代表  
ボランティア  
鍵田育枝  
NHK 広島放送局放送センター  
NHK 報道局制作センター チーフプロデューサー  
慶應義塾大学 放送文化研究所 主任研究員  
広島大学参加学生一同  
広島ユースホステル  
広島女学院高校

秋葉忠利  
飯富和雄  
大牟田稔  
渡辺美代子  
小倉圭子  
木原美津子

金子与志一  
服部弘

●札幌開催協力

北海道庁

札幌市

北海道大学

財団法人 札幌国際プラザ

北海道大学 総長

学務部 学生課長

学生課 専門職員 厚生補導担当

留学生課 留学生企画掛長

総務部 国際交流課長

北海道庁 総務部 知事室 室長

総務部知事室国際課 主任 交流係長

国際課

財団法人 札幌国際プラザ 専務理事

事務局長

市民交流部 市民交流課長

市民交流部 市民交流課 主任

プロジェクト課長

プロジェクト課

札幌市 総務局国際部長

札幌市 総務局国際部交流課 主査

航空自衛隊 第二航空団司令部 監理部広報室

陸上自衛隊 第七師団司令部 広報幹部

北海道大学 経済学部 教授

札幌市 環境局清掃部事業廃棄物課

札幌リサイクル骨材 株式会社 専務取締役

財団法人 札幌市在宅福祉サービス協会 庶務係長  
事務係

医療法人 東札幌病院 副看護部長

札幌医科大学 産婦人科学講座 講師

小児科学講座 講師

標本館

企画課主査 (国際・学術交流)

北海道小児総合保険センター 副所長

JICA 北海道国際センター 総務課

北海道野幌森林公園事務所

在札幌米国総領事館 経済商務担当 領事

広報アドバイザー

札幌アカシアライオンズクラブ 会長

幹事

北海道大学 スラブ研究センター 教授

サッポロビール株式会社 市場開発部 営業推進担当部長

株式会社 サッポロ ライオン大通ビアガーデン 店長

札幌ロータリークラブ

ホテル札幌メッツ

北海道テレビ 報道制作センター

札幌テレビ放送株式会社 メディア事業局メディア開発部 副主事

丹保憲仁

児玉洋祐

土本力生

仙田真一

青島なな子

西川昌利

阿部啓二

佐藤宣男

細川弘毅

後藤道

高橋敬子

坂本将司

和島朋広

門間富士子

角田貴美

高橋喜一

照井康夫

金井一頼

住友寛明

田子根一弥

川名敏明

松羅研二

手島恵

遠藤俊明

堤裕幸

森恵惺子

甲谷恵

梅津征夫

佐藤映二

Michael A. Gayle

本堂藤昭

齋藤嘉久

前川忠男

村上隆

三浦一

森山数昭

川筋雅文

佐々木美佳

北海道新聞 記者  
記者

矢崎弘之  
枝松俊幸

豊平神社  
荒井聰  
金澤光司  
ホームステイ受け入れ家庭の皆様

●東京開催協力

国立オリンピック記念青少年総合センター

伊藤忠商事 株式会社

外務省

米国大使館 駐在日米国大使  
文化事業部  
経済部

Thomas S. Foley

在日米軍司令部横田基地

在日米海軍 横須賀米海軍基地 広報部長

Michael B. Chase

内閣総理大臣官邸

外務省 文化交流部文化第二課 課長補佐

株式会社 富士銀行 会長

土川正之

フェリス女学院大学 国際交流学部 教授

橋本徹

澤地久枝

武者小路公秀

通商産業省大臣官房秘書課 企画調査官

齋藤健

厚生省 大臣官房統計情報部 保健社会統計課 保健統計室

株式会社 日本香道 会長

小仲佳代子

株式会社 銀座香十 取締役社長

保科儒一

歌舞伎座

国際協力事業団 総務部広報課

実川幸司

国際協力事業団 企画部環境・女性課 課長代理

芦野誠

財団法人 地球環境戦略研究機関 副所長代行

松下和夫

東京大学 教育学部 教授

藤岡信勝

昭和館 総務部長

並木進

アメリカンファミリー 株式会社

株式会社 ホテル小田急センチュリーサザンタワー 常務取締役総支配人

佐々木勇

日本経済新聞社 編集委員兼論説委員

伊奈久喜

国際基督教大学 教養学部 教授

John Maher

国立国際医療センター エイズ治療・研究開発センター医療情報室 室長

青木眞

ジャパントイムズ 週刊ST 編集部

稲垣哲雄

賛助者 (敬称略)

財団法人 石橋財団

神戸日米協会

財団法人 国際交流基金日米センター

京都日米協会

財団法人 東京国際交流財団

財団法人 広島国際文化財団

財団法人 国際教育財団

財団法人 札幌国際プラザ

財団法人 平和中島財団

伊藤組100年記念基金

財団法人 三菱銀行国際財団

社団法人 信託協会

財団法人 吉田茂国際基金

社団法人 日本自動車工業会

財団法人 日商岩井国際交流財団

アメリカンファミリー 生命保険会社

大阪日米協会

エッソ石油 株式会社



デュボン 株式会社  
株式会社 電通  
日清食品 株式会社  
山崎製パン 株式会社  
中部電力 株式会社  
九州電力 株式会社  
塩野義製薬 株式会社  
藤沢薬品工業 株式会社  
武田薬品工業 株式会社  
伊藤忠商事 株式会社  
住友商事 株式会社  
凸版印刷 株式会社  
三菱レイヨン 株式会社  
株式会社 大丸  
北海道電力 株式会社  
伊藤組土建 株式会社  
松尾橋梁 株式会社  
株式会社 ソフトフロント  
三井化学 株式会社  
カゴメ 株式会社  
日本電気 株式会社  
日本マクドナルド 株式会社  
株式会社 日本エアシステム  
ハウス食品 株式会社

中村善哉  
栢田政治  
宮本昭八  
野原克也  
亀井尚美

味の素 株式会社  
株式会社 イトーヨーカ堂  
NTTコミュニケーションズ 株式会社  
オムロン 株式会社  
株式会社 オリエンタルランド  
キッコーマン 株式会社  
興和不動産 株式会社  
株式会社 さくら銀行  
三洋電機 株式会社  
株式会社 三和銀行  
新日本製鐵 株式会社

株式会社 住友銀行  
住友信託銀行 株式会社  
住友不動産 株式会社  
積水ハウス 株式会社  
セコム 株式会社  
ゼネラル石油 株式会社  
ソニー 株式会社  
株式会社 第一勧業銀行  
第一生命保険相互会社  
大成建設 株式会社  
竹中工務店  
堤清二  
東京海上火災保険 株式会社  
東京急行電鉄 株式会社  
株式会社 東京三菱銀行  
東京電力 株式会社  
トヨタ自動車 株式会社  
日本アイ・ビー・エム 株式会社  
株式会社 日本興業銀行  
日本生命保険相互会社  
日本たばこ産業 株式会社  
日本電気 株式会社  
野村證券 株式会社  
株式会社 日立製作所  
株式会社 富士銀行  
富士ゼロックス 株式会社  
富士通 株式会社  
本田技研工業 株式会社  
松下電器産業 株式会社  
三井不動産 株式会社  
三井物産 株式会社  
三菱地所 株式会社  
三菱重工業 株式会社  
三菱商事 株式会社  
三菱信託銀行 株式会社  
宮澤喜一  
明治生命保険相互会社  
安田火災海上保険 株式会社  
安田生命保険相互会社  
株式会社 ロイヤルホテル  
YKK 株式会社

## 編集後記

第51回日米学生会議が終了して、早2ヶ月。この2ヶ月間、自分の中にあるすべてのことが麻痺していたのではないかという気がする。しかし、編集を終え、第51回会議を始めから終わりまで振り返った今、新たなものを自分自身の中に生み出していくエネルギーが満タンであるのを感じる。この会議に参加し、その歴史の一端を担えたことを嬉しく思い、またこれからも会議の続きを見守っていきたい。

(大木愛)

報告書の作成も一段落した今、改めてこの1年を振り返る。1年間の道のりは決して平坦ではなかったが、おぼつかないながらも踏み出していった一步一步は着実に私たちをゴールへと導いていった。無駄な遠回りと思えたことから、出会いと経験という賜物を得た。こうして無事ここまで至ることができたのも、本当に多くの人々のお陰である。第51回会議に集ったメンバーたち、ご支援下さった皆様、そしてこの1年間共に歩んできた実行委員の7名に改めて感謝の意を表したい。

(小林美和子)



第51回日米学生会議日本側実行委員会

### 第51回日米学生会議日本側報告書

発行日 1999年11月14日

編集 : 第51回日米学生会議実行委員会  
編集責任者 : 大木愛 小林美和子  
発行 : 〒160-0004 東京都新宿区四谷1-21  
財団法人 国際教育振興会内  
日米学生会議事務局  
電話&Fax 03-3359-0563  
印刷 : 株式会社 実業広報社

*Japan-America Student Conference*  
*Since 1934*

---

■主 催■  財団法人 国際教育振興会  
■企画運営■ 第51回日米学生会議実行委員会

---